

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（225）

「廃寺は語る！よみがえる鹿児島の仏教文化」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

こう だい じ あと
光台寺跡
(指宿市岩本)

しょう しん いん あと
照信院跡
(曾於郡大崎町神領)

だい がん じ あと
大願寺跡
(薩摩郡さつま町柏原)

2024年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（225）

「廃寺は語る！よみがえる鹿児島の仏教文化」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

こう だい じ あと
光台寺跡
(指宿市岩本)

しょう しん いん あと
照信院跡
(曾於郡大崎町神領)

だい がん じ あと
大願寺跡
(薩摩郡さつま町柏原)

2024年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（遺跡を北西上空から）

序 文

この報告書は、文化庁の国庫補助事業「廃寺は語る！よみがえる鹿児島島の仏教文化」に伴って、令和3年度から5年度に実施した光台寺跡、照信院跡、大願寺跡の確認調査の記録です。

世界文化遺産に登録された旧集成館をはじめ、本県にはわが国の近代化を支えた産業遺産が数多く存在します。しかしながら、幕末維新时期における急速な近代化の一方で、旧薩摩藩領においては、主に明治2（1869）年に、1000を超えるすべての寺院が徹底的に破壊され、仏像、経典、仏画、法具など多くの貴重な文化財が失われるなど、仏教文化は大きなダメージを受けることとなりました。その痕跡は、首や腕を切りとられた仁王像や顔が破壊された石仏など現代でも所々で見ることができます。また石塔や石像類も散逸し、わずかに残された石造物も過ぎゆく時間の中で埋もれていく傾向にあります。

そこで本事業は、約150年前に徹底的に行われた廃仏毀釈で失われた寺院や廃仏毀釈以前に廃寺となった寺院の状況把握を考古学的な調査で行い、また薩摩藩が編纂した『三国名勝図会』等に記載されている県下の寺院に関する文献調査を実施し、寺院跡の実態解明や再評価を行い、その存在や歴史的な価値を現代によみがえらせる契機とし、適切な保護措置を講ずるための基礎資料を作成することを目的としています。

本報告書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただき、文化財保護の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たり御協力いただいた文化庁及び指宿市教育委員会、大崎町教育委員会、さつま町教育委員会、調査地点・周辺の土地所有者の皆様、関係各機関、発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

令和6年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 中 村 和 美

報告書抄録

ふりがな	こうだいじあと ・ しょうしんいんあと ・ だいがんじあと
書名	光台寺跡 ・ 照信院跡 ・ 大願寺跡
副書名	「廃寺は語る!よみがえる鹿児島県の仏教文化」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第225集
編集者名	上浦麻矢・平美典
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811
発行年月	2024年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市長村	遺跡番号					
こうだいじあと 光台寺跡	いぶすきし 指宿市 いわもと 岩本	46210	—	31° 17′ 22″	130° 35′ 56″	確認調査 2021.10.1～2021.10.28	50	保存目的調査
しょうしんいんあと 照信院跡	おおさきしょう 大崎町 じんりょう 神領	46468	—	31° 26′ 13″	131° 01′ 11″	確認調査 2022.6.1～2022.6.28	164	保存目的調査
だいがんじあと 大願寺跡	ちやう さつま町 かしわばる 柏原	46392	392-170	31° 55′ 37″	130° 27′ 42″	確認調査 2023.6.1～2023.6.29	140	保存目的調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主要な遺構	主要な遺物	特記事項
こうだいじあと 光台寺跡	寺院跡	近世	石垣・土坑1基・ピット1基	陶磁器, 瓦	
しょうしんいんあと 照信院跡	寺院跡	中世・近世	土坑6基, 溝状遺構3条, ピット12基, かまど状遺構1基, 造成面及び造成土, 版築, 造成土(礫敷)	青磁, 備前焼, 土師器 陶磁器, 青銅製品, 寛永通宝, 玉石, 軽石製品	仁王像は大崎町指定文化財(昭和51年7月28日)
だいがんじあと 大願寺跡	散布地	縄文早期	—	土器(押型文・塞ノ神式), 二次加工剥片, 石核, 石皿	
		縄文後期	—	土器(南福寺式)	
		古墳	—	土器(成川式)	
		中世・近世	溝状遺構9条, 帯状硬化面4条, 土坑1基, ピット1基	青磁, 染付(青花), 薩摩焼(龍門司), 火打ち石	墓塔群(開山堂跡・薬師堂跡)は鹿児島県指定文化財(昭和62年3月)

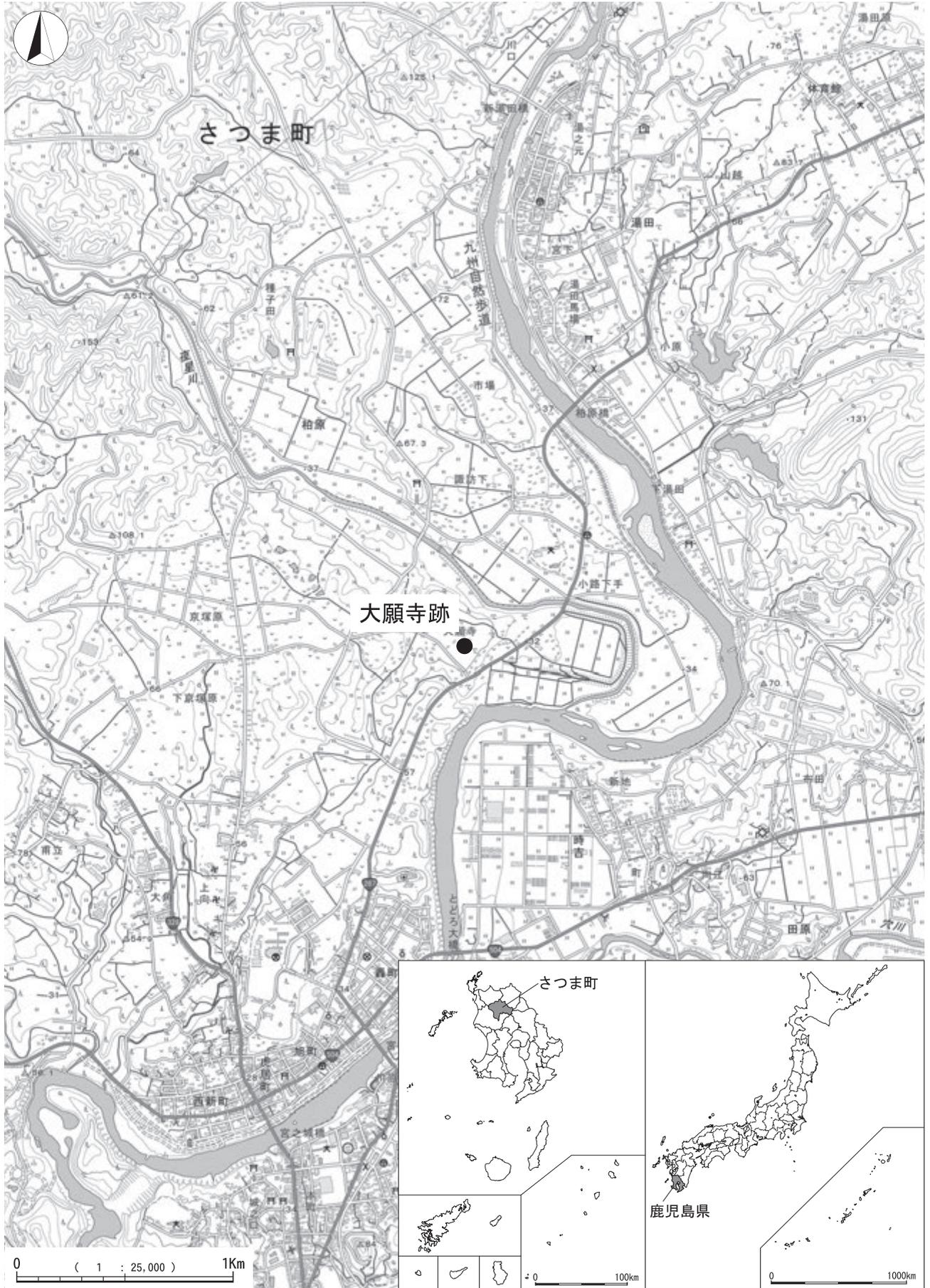
要約	<p>【光台寺跡】 光台寺は、今和泉島津家の菩提寺で、宝暦7(1757)年、第5代藩主島津継豊の命で創建された時宗の寺院である。絵図によれば今和泉島津家墓地に隣接し、茅葺きと軒先部分が瓦葺きの客殿と庫裏等の建造物があった。明治2(1869)年、廃仏毀釈により廃寺となった。今回の確認調査で、建物に直接関連する遺構は発見されなかったものの、当時の石垣が残存しており、在地生産されたとみられる瓦、鹿児島城下で焼かれた瓦など、近世の瓦が出土したことから、近世に何らかの建造物が存在していた可能性が高いことがわかった。また複数の産地の薩摩焼(堅野系、元立院、苗代川系、龍門司系)や肥前系の染付、琉球陶器が出土したことから、近世における生活の痕跡が見られた。</p>
	<p>【照信院跡】 照信院は和銅元(708)年に役小角の弟子の義覚がこの地にやってきて、飯隈山を開山し、新熊野三社権現を勧請し、阿弥陀如来・薬師如来・千手観音の三尊を安置したことが由来とされる寺院である。中世以降は本山派修験の京都天台宗聖護院の末寺として聖護院や近衛家など中央勢力や島津各代の藩主と深く関わり南九州最大の修験道場となった。しかし、明治2(1869)年に廃仏毀釈により廃寺となった。今回の確認調査では、絵図をもとに発掘調査を行い、土坑、溝状遺構、ピット、かまど状遺構、礫敷の造成土などが検出された。遺物については、中世の土師器の坏や小皿の破片が数多く出土し、龍泉窯系の青磁や白磁の一部が出土したほか、近世のものともみられる青銅製の懸仏の一部(華瓶)や紙、薩摩焼の仏花器、香炉などが出土した。また、一字一石経の可能性のある103個の小石が詰まったピットも検出され、調査区に寺院が存在していた可能性が高いことがわかった。</p>
	<p>【大願寺跡】 大願寺は、鎌倉時代後半から地頭としてこの地域に定住し、勢力を上げた祁答院氏の菩提寺であった。貞治三(1364)年、祁答院重成により一関宗万を開山、起宗宗冑を初住として創建されたと伝わる。室町時代に発展し十二の子坊があるなど巨利であり、薬師堂には足利義満筆の「醫王寶殿」の扁額を掲げていた。年代は不明だが、祁答院氏が衰退するとともに菩提寺であった大願寺も江戸時代初期には廃寺となったと考えられる。寺跡には開山堂跡と薬師堂跡があり、祁答院氏歴代の墓塔、供養塔や住職の墓塔が多く建てられている。大願寺は江戸時代の初期、新たに寺院を建立することが禁止されていたため、薩摩藩主島津光久のとき寺籍を鹿児島城下に移され、南泉院と改称された。今回の調査では、建物に直接関連する遺構は発見されなかったものの当時の鐘撞き堂の礎石が残存しており、また中近世のものと考えられる溝跡が各トレンチで確認された。遺物では、表土ではあるが染付(青花)が採集されており、調査区内に中世に建造物が存在していた可能性が高いことがわかった。</p>



光台寺跡位置図



照信院跡位置図



大願寺跡遺跡位置図

例 言

- 1 本書は、鹿児島県が文化庁の補助を受け、令和3～5年度に実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち、「廃寺は語る！よみがえる鹿児島の仏教文化」事業に伴う光台寺跡・照信院跡・大願寺跡の発掘調査報告書である。
- 2 光台寺跡は鹿児島県指宿市岩本麓に、照信院跡は鹿児島県曾於郡大崎町神領に、大願寺跡は鹿児島県薩摩郡さつま町柏原に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、鹿児島県教育委員会が調査主体となり、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は令和3～5年度に実施し、整理・報告書作成作業は令和3～5年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた記号は、光台寺跡が「KDJ」、照信院跡「SYO」、大願寺跡は「DGJ」である。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。また、空中写真の撮影は（有）ふじたに委託した。
- 11 遺構の埋土や土層断面の土色、土器の調色は、『新版標準土色帖』（1970年度版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
- 12 遺構図等の作成・トレースは、上浦が整理作業員の協力を得て行った。
- 13 遺構名については、遺跡ごとに番号を示している。光台寺は調査時の番号のまま掲載する。照信院跡、大願寺跡においては、調査時の番号から掲載順の番号に変更し、掲載することとした。原資料（図面・遺物・写真等）の注記には、調査時の遺構名で記載されている。対応表は下記のとおりである。
- 14 遺構名は主に挿図において略号で示している。土坑（SK）、ピット（SP）、溝状遺構（SD）、かまど状遺構（SL）である。
- 15 出土遺物の実測・拓本・トレースは上浦・浅田が整理作業員の協力を得て行った。なお、陶磁器の実測の一部は（株）イビソクに委託した。
- 16 挿図の縮尺は、挿図ごとに示し、土器・土師器・陶磁器、瓦はS=1/3を基本とした。
- 17 土師器で、復元できたものに関しては口径に対する底径の比率をもとに次のように分類し、文中における説明についても以下の分類を用いる。
【坏】A類…底径/口径が60%未満で、口縁部に向けて開く体部を形成するもの。
B類…底径/口径が60%以上70%未満で、口縁部に向けてやや開く体部を形成するもの。
C類…底径/口径が70%以上で、やや鋭い角度で立ちあがる体部を形成するもの。
小型…口径12cm未満のもの
中型…口径12cm以上、13cm未満のもの
大型…口径13cm以上のもの
【小皿】A類…底径/口径が75%未満で、口縁部に向けて開く体部を形成するもの
B類…底径/口径が75%以上、85%未満で、口縁部に向けてやや開く体部を形成するもの
C類…底径/口径が85%以上で、やや鋭い角度で立ちあがる体部を形成するもの
小型…口径7cm未満のもの
中型…口径7cm以上、8cm未満のもの
大型…口径8cm以上のもの
- 18 陶磁器の分類及び編年は、以下の文献を参考にした。
太宰府市教育委員会編2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一』太宰府市の文化財第49集
森田 勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2、pp. 10-33.
- 19 本書に掲載した他館所蔵資料は掲載許可を頂いた。
- 20 観察表の数値は、残存している数値を（）で示している（破片資料）。箇所によって完形・反転復元の場合は、（）なしの記載である。
- 21 出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場にて、西園勝彦が行った。
- 22 文献史料の調査・判読は、浅田剛士が行った。
- 23 本書の編集は、上浦が担当し、執筆の分担は次のとおりである。
第1章 上浦・浅田
第2章 上浦・浅田・隈元
第3章 上浦・浅田
第4章 上浦
第5章 上浦・浅田
- 24 本報告書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

遺構対応表

照信院跡

掲載名	旧遺構名
土坑1	土坑2
土坑2	土坑3
土坑3	土坑4
土坑4	土坑5
土坑5	土坑6
土坑6	土坑7
ピット1	ピット9
ピット2	ピット10
ピット3	ピット11
ピット4	ピット12

掲載名	旧遺構名
ピット5	ピット6
ピット6	ピット7
ピット7	ピット8
ピット8	ピット1
ピット9	ピット2
ピット10	ピット3
ピット11	ピット4
ピット12	ピット5
溝状遺構2	溝状遺構3
溝状遺構3	溝状遺構2

大願寺跡

掲載名	旧遺構名
溝状遺構1	4T-溝3
溝状遺構2	4T-溝2
溝状遺構3	4T-溝1
溝状遺構4	2T-溝1
溝状遺構5	2T-溝2
溝状遺構6	2T-溝3
溝状遺構7	2T-溝4
溝状遺構8	2T-溝5
溝状遺構9	3T-溝1

本文目次

序文

報告書抄録

例言

第1章 発掘調査の経過

第1節	事業の経緯と事業内容	1
第2節	調査体制	1
第3節	事業の経過	2
第4節	整理作業・報告書作成経過	2

第2章 光台寺跡

第1節	遺跡の位置と環境	3
第2節	調査の方法と基本層序	4
第3節	調査成果	4
第4節	小結	16

第3章 照信院跡

第1節	遺跡の位置と環境	18
第2節	調査の方法と基本層序	25
第3節	調査成果	25
第4節	小結	39

第4章 大願寺跡

第1節	遺跡の位置と環境	41
第2節	調査の方法と基本層序	47
第3節	調査成果	47
第4節	小結	58

第5章 総括

第1節	廃寺は語る！よみがえる鹿児島県の仏教文化事業	62
第2節	廃寺関連調査	63
第3節	廃仏毀釈の概要	66

写真図版		68
------	--	----

挿図 目次

光台寺跡位置図

照信院跡位置図

大願寺跡位置図

第1図	光台寺跡周辺遺跡 位置図	5	第28図	3トレンチ出土遺物	32
第2図	光台寺跡周辺史跡図	7	第29図	照信院跡4トレンチ平面・断面図及び出土遺物	33
第3図	光台寺跡絵図「藤澤山衆領軒」 (鹿児島県立図書館蔵)	8	第30図	照信院跡5トレンチ平面・断面図	34
第4図	光台寺跡推定地	9	第31図	照信院跡5トレンチ内かまど状遺構・ピット	34
第5図	光台寺跡トレンチ配置図	9	第32図	5トレンチかまど状遺構内出土遺物	35
第6図	光台寺跡1トレンチ平面・断面図	10	第33図	5トレンチ出土遺物	35
第7図	1トレンチ出土遺物	10	第34図	照信院跡6トレンチ平面・断面図	36
第8図	光台寺跡2トレンチ平面・断面図	11	第35図	照信院跡8トレンチ平面・断面図及び出土遺物	37
第9図	光台寺跡2トレンチ内土坑及びピット	12	第36図	8トレンチ溝状遺構内出土遺物	37
第10図	2トレンチ出土遺物	12	第37図	大願寺跡周辺遺跡 位置図	43
第11図	光台寺跡3トレンチ平面・断面図	13	第38図	大願寺跡周辺図	46
第12図	3トレンチ出土遺物	13	第39図	大願寺跡トレンチ配置図	48
第13図	光台寺跡石垣位置図	14	第40図	大願寺跡1・4トレンチ平面・断面図	50
第14図	光台寺跡石垣写真	14	第41図	1・4トレンチ出土遺物	51
第15図	光台寺跡石垣実測図	14	第42図	2トレンチ出土遺物	51
第16図	照信院跡周辺遺跡 位置図	21	第43図	大願寺跡2・3トレンチ平面・断面図	52・53
第17図	照信院跡調査対象範囲図	23	第44図	3トレンチ出土遺物	54
第18図	照信院跡三国名勝図会 四巻	24	第45図	表採遺物	54
第19図	照信院跡トレンチ配置図	26	第46図	中近世出土遺物	55
第20図	照信院跡1・7トレンチ平面・断面図	27	第47図	鐘撞き堂跡礎石図	56
第21図	1トレンチ溝状遺構内出土遺物	29	第48図	大願寺跡溝状遺構及び硬化面実測図	59
第22図	1トレンチ出土遺物	29	第49図	大願寺跡付近略図(室屋1980)	60
第23図	7トレンチ溝状遺構内出土遺物	29	第50図	磨崖仏発見位置	63
第24図	7トレンチ出土遺物	29			
第25図	照信院跡2トレンチ平面・断面図	30			
第26図	照信院跡3トレンチ平面・断面図	31			
第27図	3トレンチ土坑内出土遺物	31			

表 目次

第1表	光台寺跡基本層序	4	第11表	照信院跡出土瓦観察表	38
第2表	光台寺跡周辺遺跡一覧表	6	第12表	照信院跡出土青銅製品・古銭観察表	38
第3表	光台寺跡出土陶磁器観察表	15	第13表	照信院跡出土鉄製品等観察表	38
第4表	光台寺跡出土瓦観察表	15	第14表	大願寺跡周辺遺跡一覧表(1)	44
第5表	光台寺跡出土鉄製品観察表	15	第15表	大願寺跡周辺遺跡一覧表(2)	45
第6表	照信院跡周辺遺跡一覧表	22	第16表	大願寺跡基本層序	47
第7表	照信院跡基本層序	25	第17表	大願寺跡出土土器観察表	57
第8表	照信院跡出土土師器観察表	38	第18表	大願寺跡出土陶磁器観察表	57
第9表	照信院跡出土陶磁器観察表	38	第19表	大願寺跡出土石器観察表	57
第10表	照信院跡出土軽石製品観察表	38	第20表	鹿児島島の廃仏毀釈関連年表	66

図版 目次

巻頭図版 大願寺跡

遺跡遠景(遺跡を北西上空から)

写真1	石垣(亀甲崩し積み・間知石)	17	図版1	光台寺跡 1・2トレンチ	68
写真2	五輪塔	17	図版2	光台寺跡 2・3トレンチ	69
写真3	豊玉媛神社・仁王像	17	図版3	照信院跡 1・4・7トレンチ	70
写真4	重要文化財:聖観音懸仏	39	図版4	照信院跡 3・5・8トレンチ	71
写真5	熊野神社	40	図版5	大願寺跡 1・4トレンチ	72
写真6	仁王像	40	図版6	大願寺跡 2・3トレンチ	73
写真7	飯隈山飯福寺石塔群(下段)	40	図版7	光台寺跡 遺物	74
写真8	飯隈山飯福寺石塔群(上段)	40	図版8	照信院跡 遺物1	75
写真9	鐘撞き堂跡	60	図版9	照信院跡 遺物2	76
写真10	開山堂跡	61	図版10	照信院跡 遺物3	77
写真11	薬師堂跡	61	図版11	照信院跡 遺物4	78
写真12	興禅寺跡	61	図版12	大願寺跡 遺物	79
写真13	一石五輪塔	61			
写真14	堪真庵跡	61			
写真15	お手水の石塔群	61			
写真16	現地指導:池田純氏	61			
写真17	大願寺跡周辺 鳥瞰図(柏原小蔵)	61			
写真18	種子梵字	63			
写真19	石塔基壇	63			
写真20	碑文	63			

第1章 発掘調査の経過

第1節 事業の経緯と事業内容

これまで鹿児島県教育委員会は、平成27年度～平成29年度に「かごしま近代化遺産調査事業」で旧薩摩藩の近代化遺産（敷根火薬製造所跡・根占原台場跡・久慈白糖工場跡）について、平成30年度から令和2年度に「西南戦争を掘り、学ぶ事業」で近代化の波の中で勃発した西南戦争関連遺跡（滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡・チシャケ迫堡塁跡群・岩川官軍墓地）について調査を行い、発掘調査報告書を発行してきた。

令和3年度からは、近代化の流れの中で行われた「廃仏毀釈」に光をあてるとともに、それ以前に何らかの理由で廃寺となっていた寺院について調査を行うこととし、国庫補助を活用して「廃寺は語る！よみがえる鹿児島の仏教文化事業」を企画した。幕末維新期、薩摩藩は、寺院・仏像の破壊、経典・仏具の焼却を求めるなど廃仏を断行し、鹿児島では、すべての寺院が破壊され、鹿児島の仏教文化は大きなダメージを受けることとなった。今回の事業では、本県に残る失われた寺院の考古学的な調査や文献調査を実施することで、遺跡の実態解明や再評価を行い、その存在や歴史的な価値をよみがえらせる機会とする。また活用面では、発掘調査成果を用いた学校での授業支援や地域での講演会を行い、文化財の保存・活用、郷土教育などに資する目的とした。

発掘調査の実施にあたり、鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）と鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、歴史的価値や残存状況等を考慮し、関係機関とも協議を行い、調査対象地を選定した。

発掘調査を実施した遺跡として、令和3年度は、近世島津氏の一門家である今和泉島津家の菩提寺である光台寺跡（指宿市）を、令和4年度は、大隅半島にあり、残存状況が良好で天台修験の代表的な寺院であることから、照信院跡（大崎町）を選定した。令和5年度は、明治初年の廃仏毀釈の以前にすでに廃寺となった寺院のうち大願寺跡（さつま町）を選定した。調査結果については、2～4章で詳述する。

なお、整理報告書作成作業は、令和3～5年度に実施した。

第2節 調査体制

令和3年度調査体制（発掘調査、整理作業）

事業主体 鹿児島県
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 中原 一成
 調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 次長兼総務課長 大口 浩嗣

調査課長 寺原 徹
 調査課第一調査係長 三垣 恵一
 調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 調査課第一調査係 上浦 麻矢
 南の縄文調査室 隈元 俊一
 整理担当 調査課第一調査係長 三垣 恵一
 調査課第一調査係 浅田 剛士
 事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 主 査 和田 賢

令和4年度調査体制（発掘調査、整理作業）

事業主体 鹿児島県
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 中原 一成
 調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 次長兼総務課長 大口 浩嗣
 調査課長 寺原 徹
 調査課第一調査係長 黒川 忠広
 調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 調査課第一調査係 湯場崎辰巳
 上浦 麻矢
 整理担当 調査課第一調査係 湯場崎辰巳
 上浦 麻矢
 浅田 剛士
 前迫 亮一
 事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 主 査 和田 賢
 調査指導 文化庁調査官 斉藤 慶吏

令和5年度調査体制（発掘調査、整理・報告書作成作業）

事業主体 鹿児島県
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 中村 和美
 調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 総務課長 荒瀬 勝己
 調査課長 黒川 忠広
 調査課第一調査係長 平 美典
 調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 調査課第一調査係 上浦 麻矢
 調査課第二調査係 野間口 勇
 整理担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 調査課第一調査係 上浦 麻矢
 調査課第一調査係長 平 美典
 事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

主 査 斜木 吉夫
調査指導 伊敷歴史研究会会長 池田 純
報告書作成指導委員会 令和5年11月8日
黒川調査課長ほか 5名
報告書作成検討委員会 令和5年11月22日
中村所長ほか 3名

第3節 事業経過

1 確認調査

光台寺跡の確認調査は、調査対象面積460㎡に対し、トレンチを3か所設定し、表面積50㎡の調査を令和3年10月1日（金）～10月28日（木）（実働19日）にかけて実施した。

照信院跡の確認調査は、調査対象面積10000㎡に対し、トレンチを7か所設定し、表面積164㎡の調査を令和4年6月1日（水）～6月28日（火）（実働21日）にかけて実施した。

大願寺跡の確認調査は、調査対象面積2,656㎡に対し、トレンチを4か所設定し、表面積140㎡の調査を令和5年6月1日（木）～6月29日（木）（実働18日）にかけて実施した。

確認調査の経過については、各遺跡の日誌抄を週ごとに集約して記載する。

（1）光台寺跡（指宿市）

令和3年10月1日（金）

機材搬入、環境整備

10月4日（月）～8日（金）

基準点移動、石垣清掃、掘り下げ（1～2トレンチ）

10月11日（月）～15日（金）

石垣写真実測、掘り下げ（1～3トレンチ）、実測（土坑、ピット）、鹿児島地質学会成尾英仁氏来跡

10月19日（火）～23日（土）

土層断面実測、掘り下げ（1～3トレンチ）、今和泉島津家墓地清掃

10月24日（日）～28日（木）

今和泉島津家墓地清掃、実測（土層断面）、埋め戻し（1～3トレンチ）

（2）照信院跡（大崎町）

令和4年6月1日（水）

機材搬入、環境整備

6月2日（木）～3日（金）

基準点設置、掘り下げ（1～2トレンチ）

6月6日（月）～10日（金）

掘り下げ（1～3、5～7トレンチ）、実測（溝状遺構・土坑・かまど状遺構・ピット・土層断面）、埋め戻し（6トレンチ）

6月13日（月）～17日（金）

掘り下げ（3～5、7トレンチ）、拡張調査（1トレンチ）、実測（土層断面、かまど状遺構、ピット、礫）

6月20日（月）～24日（金）

地形測量、掘り下げ（トレンチ3～8トレンチ）、実測（土層断面、溝状遺構、ピット）写真撮影（1、4、8トレンチ）
6月27日（月）～29日（水）

埋め戻し（1～5、7～8トレンチ）、古墓塔群環境整備、写真撮影

（3）大願寺跡（さつま町）

令和5年6月1～2日（金）

機材搬入、環境整備、トレンチ設定・表土剥ぎ（1～3トレンチ）

6月5日（月）～9日（金）

レベル移動、レベル杭設置、掘り下げ（1～3トレンチ）、写真撮影（2トレンチ）

6月12日（月）～16日（金）

掘り下げ（1・3・5・7トレンチ）、写真撮影（1・3・5トレンチ）実測（1～2トレンチ、ピット、溝状遺構、硬化面）、環境整備

6月19日（月）～24日（土）

掘り下げ（1～4トレンチ）、実測（1～2トレンチ）、写真撮影（2～3トレンチ）、環境整備

6月26日（月）～29日（木）

掘り下げ（1～4トレンチ）、実測（1～4トレンチ）、写真撮影（1～4トレンチ）、埋め戻し

第4節 整理作業・報告書作成経過

整理作業・報告書作成は、令和3年11月～令和4年2月、令和4年7月～8月、令和5年11月～12月にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

整理作業の経過については、年度、月別に集約して記載する。

（1）光台寺跡（令和3年度）

11月 遺物水洗、注記

12月 注記、接合、図面整理、原稿執筆

1月 遺物実測、原稿執筆、陶磁器実測委託

2月 原稿執筆・修正、遺物・写真収納

（2）照信院跡（令和4年度）

7月 遺物水洗、注記、接合

8月 遺物実測、写真整理、原稿執筆

12月13日～14日 文化庁斎藤慶吏調査官整理指導

（3）大願寺跡（令和5年度）

11月 遺物水洗、注記、接合、遺物実測

12月 写真整理、拓本、トレース、レイアウト

第2章 光台寺跡

第1節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

遺跡の所在する指宿市は、薩摩半島南部に位置し、平成18年に旧指宿市・山川町・開聞町の1市2町が合併した。人口は約3万7千人で（令和5年11月1日現在）、西側は南九州市、北側は鹿児島市と隣接する。

指宿市の地形は、山地・台地・平地・湖沼の大きく4つに区分される。中でも九州最大のカルデラ湖である池田湖は、約5,700年（較正年代6,300年）前に活動し、その噴出物は、厚く指宿地方を覆い、指宿地方の地形形成要因となっている。また、指宿市開聞町にはトロイデ型の火山として有名な開聞岳がある。開聞岳の噴火活動は約4,500年前頃から始まり、固結した火山灰に覆われた指宿地方特有の地形が形成されている。なお、開聞岳起源の噴出物堆積層は、通称、黄ゴラ、暗紫ゴラ、青ゴラ、紫コラなどの噴出物が確認されている。指宿周辺ではほかにも阿多カルデラ・鰻池などの古い火口があり、国指定史跡である指宿橋牟礼川遺跡は開聞岳噴火による災害を受けた火山災害遺跡としても知られている。

光台寺跡は、鹿児島県指宿市岩本に所在する。北は鹿児島湾が広がり、今和泉漁港など海沿いに面した立地である。遺跡の北を北西から南東方向に国道226号が通り、北西にはJR薩摩今和泉駅がある。遺跡東側に史跡今和泉島津家墓所、北西方向に今和泉家屋敷跡がある。調査前は畑地であった。

2 歴史的環境

指宿市における発掘調査は、大正7（1918）年に濱田耕作（京都帝国大学教授）や長谷部言人（東北帝国大学教授）による橋牟礼川遺跡の学術調査に端を発する。

ただし「橋牟礼川遺跡」の名称は、昭和48（1973）年の調査以降用いられており、現在は、大正13（1924）年に国指定史跡となった「指宿橋牟礼川遺物包含地」を含む一連の遺跡を総称して「橋牟礼川遺跡」と呼んでいる。

この濱田耕作らの学術調査において火山灰を挟んで上層に弥生時代以降の土器、下層に縄文土器を確認し、縄文土器（当時は「アイヌ式土器」と呼ばれていた。）が弥生時代よりも古い時代の土器であることが実証され、火山灰噴出物を考古学の時代区分に取り入れる層位学が確立していききっかけとなった。

指宿市は、火山活動が活発であった地域であるため考古学のみならず、関連諸科学の視点からも調査を行うことができ、その成果の意義は大きいものである。

以下本遺跡の周辺の遺跡について述べることにする。

旧石器時代

小牧3A遺跡は、当時、南部九州では発見事例の少なかった剥片尖頭器、三稜尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、スクレイパー等が多く出土しており、南部九州における細石刃文

化期以前の後期旧石器時代の代表的な遺跡である。

縄文時代

岩本遺跡は、早期岩本式土器の標式遺跡である。岩本式土器は、貝殻円筒形土器の最古形態として評価されており、ベンガラで赤色に塗彩するものもある。隆帯文土器も同時に出土した。大園原遺跡では、高床の掘立柱建物と思われる線刻画が描かれた土器片が発見されている。ヘラ状の工具で草葺屋根や柱、床を表現したと思われる線で構成されており、西日本最古級の建物絵画であると考えられている。

弥生時代

横瀬遺跡では、弥生時代後期の住居跡が12基検出され、そのうち1基の花弁型住居跡の埋土中から朝鮮半島製と考えられる破鏡「変形渦文鏡」が出土している。中尾迫遺跡では、直径約1m、深さ20cm程度の土器焼成遺構が発見されている。近くには、粘土を採掘した痕跡があり、炭化物和受熱している粘土塊が確認されている。

古墳時代

鍛冶遺構が発見された遺跡として知られている尾長谷迫遺跡は、住居内部中央部に鍛冶炉が設けられ、鉄滓、金床石、砥石、高杯の脚部を転用した鞆羽口等が出土した。日常的に使用していたと思われる甕や壺等の土器も出土している。宮ノ前遺跡では、住居跡が8基検出され、なかでも方形のプランの中に円形の落ち込みをもつ竪穴式住居と、方形の落ち込みをもつ住居跡が1基検出された。遺物は成川式土器と須恵器が主な出土遺物である。土器のほか、鉄鏃や青銅製の環等の金属製品が出土している。特に成川遺跡と同類の鉄鏃が出土したことが注目できる。

古代～近代

中島ノ下遺跡で「中」の文字が刻書された10世紀代の土師器の椀が出土した。また、885年の開聞岳噴火に伴う可能性のある液状化現象の痕跡も見つかり、注目された。松尾城（指宿城）跡は明治初年から幕末維新期に行われた廃仏毀釈の痕跡と思われる五輪塔や仏像等の散布地がある。鎌倉時代から元和元（1615）年の江戸幕府が発令した一国一城令で廃城となるまで、山城・海城の両方の性格をもった山城として活用された。国指定史跡今和泉島津家墓所は、今和泉島津家初代の忠卿から、6代忠冬とその一族が葬られている。

なお、今和泉島津家墓所は、令和2年3月に島津宗家・越前（重富）・加治木・垂水・宮之城島津家墓所とともに、鹿児島島津家墓所として国史跡に指定されている。

3 光台寺跡略史

和泉家は、島津家4代当主忠宗の子、忠氏を初代として5代直久まで続いたが、直久が応永24（1417）年の川辺城の戦いで戦死したために和泉家は断絶した。延享元（1744）年、島津家21代当主（4代藩主）吉貴の命を受け、吉貴の七男である忠卿が和泉家の名跡を相続して、今和泉島津家を創設し

た。

光台寺は、この今和泉島津家の菩提寺である。『三国名勝図会』によれば、正式名称を道熙山壽祥院光台寺といい、延享2(1745)年第4代藩主吉貴が建立を命じ、宝暦7(1757)年、第5代藩主継豊の代に現指宿市西方宮ヶ浜にあった安泰山源忠寺の末寺西光寺を曹洞宗から時宗に改めて移設し、水引(薩摩川内市)にあった光台寺の寺号をとって創建したとされている。開山僧は、鹿児島浄光寺21世の廓心上人である。本尊を『三国名勝図会』では、阿弥陀如来とあり、天保13(1842)年にまとめられた『藤澤山衆領軒』には、釈迦如来、文殊菩薩、付言菩薩の3対であったとされている。その後、光台寺も明治2(1869)年の廃仏毀釈によって廃寺となった。

【参考・引用文献】

指宿市教育委員会

- 1981『宮之前遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 1982『横瀬遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
- 1986『尾長谷迫遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 1990『中島ノ下遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
- 1992『橋傘礼川遺跡Ⅲ』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 1994『橋傘礼川遺跡Ⅵ』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
- 2001『水迫遺跡Ⅰ』指宿市埋蔵文化財調査報告書(34)
- 2002『指宿市考古博物館・時遊館 Cocco はしむれ 第8回企画展示図録』
- 2005『中尾迫遺跡』指宿市埋蔵文化財調査報告書(38)
- 2019『今和泉島津家墓地埋蔵文化財発掘調査報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(62)

鹿児島県教育委員会2005『先史・古代の鹿児島』資料編
鹿児島県立埋蔵文化財センター

- 1996『小牧3A遺跡・岩本遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(15)
- 2009『南摺ヶ浜遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(144)
- (公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
- 2015『岩本麓遺跡』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(4)

京都帝国大学

- 1921『薩摩国指宿群指宿村土器包含層調査報告』京都帝国大学文学部考古学研究報告(6)

【参考史料】

- 『三国名勝図会』
- 『藤澤山衆領軒』鹿児島県立図書館蔵

第2節 調査の方法と基本層序

1 調査の方法

光台寺跡の発掘調査は、令和3年10月1日～令和3年10月28日の期間に、調査対象面積460㎡を対象に実施した。

本遺跡の調査区割(グリッド)は、南北方向を世界測地系座標X=-189550.000, Y=-38190.000と、世界測地系座標X=-189630.000, Y=-38190.000を結んだ線及びその延長線、東西方向を世界測地系座標X=-189550.000, Y=-38190.000と、世界測地系座標X=-189550.000, Y=-38040.000を結んだ線及びその延長線を中心に設定した。具体的にはグリッドは10mおきに北側から南側に向かって1・2・3…、西側から東側に向かってA・B・C…と調査区割を設定した。

調査は用地境界などでは安全上の措置として、約2m程度内側に控えて3つのトレンチを設定し、人力による掘り下げ作業を実施した。トレンチ位置は『藤澤山衆領軒』に描かれた光台寺絵図を参考に設定した。

包含層中の遺物は、トータルステーションによる実測後取り上げを行った。遺構は検出状況の写真撮影の後掘り下げを行い、実測を行った。実測の縮尺は、遺構に応じて縮尺10分の1と20分の1とした。

2 遺構の検出と認定

各遺物包含層上面を検出した際、精査を行い、半裁で遺構の掘り下げを行った。その際、埋土の色・質・硬さなどの違いを比較し掘り下げた。さらに、遺構を検出した層や埋土状況、遺構の形態、遺構内出土遺物などの情報から遺構の帰属時期の検討を行った。

3 基本層序

今回の調査で、Ⅰ層からⅢ層まで確認できた。トレンチ設定場所によって、Ⅰb、Ⅰc層が確認でき、調査区を平坦にするための近世の造成土と考えられる。また下記に示す層以外に2トレンチでは、調査区北側の石垣に向けて、自然地形で傾斜が強くなる所から石垣までの間を埋め、平坦な土地を造成するために裏込めとして使用したと考えられる。裏込めの土層は、Ⅱ層とⅢ層の間で確認された。

層序は第1表のとおりである。

第1表 光台寺跡基本層序

層	色調	層厚(cm)	備考
I a	暗褐色土	10～15	近代～現代
I b	にぶい黄褐色土	5～10	近世の造成土か
I c	灰黄褐色土	0～50	近世の造成土か
I d	褐色土	0～30	近世の造成土か
Ⅱ	暗褐色土	10～15	中世～近世
Ⅲ	褐色土	25以上	古代(紫コラを含む)

第3節 調査成果

3つのトレンチ(第5図)を設定して調査を行った。また、本年度調査区北側と民有地との間に、近世のころ構築されたと考えられる石垣遺構があり、測量調査を実施した。



第1図 光台寺跡周辺遺跡 位置図

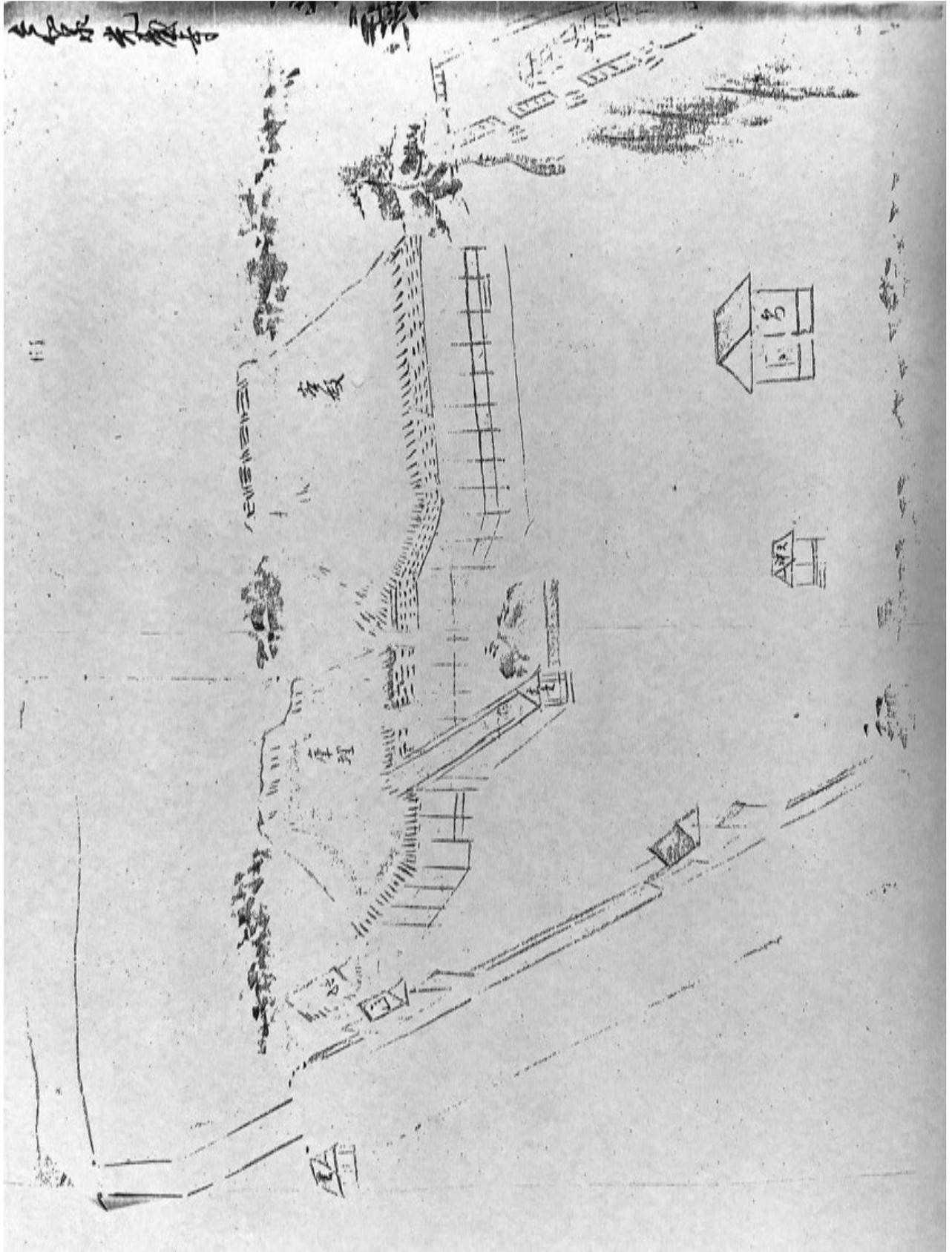
第2表 光台寺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡台帳番号	所在地	地形	石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
1	田真原	201	237	鹿児島市喜入生見町	台地		●	●				
2	北川	210	39	指宿市岩本	台地	●						
3	北迫	210	75	指宿市小牧	台地	●						
4	小牧	210	1	指宿市小牧	台地	●	●	●	●			指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書1979年 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(15)
5	慈雲山永泉寺福寿院跡	210	76	指宿市	—						●	
6	小久保	210	3	指宿市小牧	台地	●	●	●				
7	岩本	210	4	指宿市小牧	台地	●	●	●				指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書1978年 指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
8	小牧3A	210	2	指宿市岩本	台地	●	●					鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(15)
9	今和泉島津家屋敷跡	210	139	指宿市岩本	—						●	
10	岩本麓	210	138	指宿市岩本	—		●	●	●	●		指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(57) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(4)
11	今和泉島津家墓所	210	—	指宿市岩本	—						●	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(62) 国指定史跡 島津家墓所
12	光台寺跡			指宿市岩本	—						●	本報告書
13	豊玉媛神社			指宿市岩本	—						●	有形文化財 豊玉媛神社等棟札
14	岩本	210	41	指宿市岩本麓	台地		●	●				
15	鳥山	210	16	指宿市新西方	台地		●					
16	角切頭	210	90	指宿市新西方	台地		●					
17	舟迫	210	19	指宿市新西方	台地		●	●	●			
18	市後迫	210	89	指宿市新西方	台地		●					
19	宮尻平	210	68	指宿市新西方	山地			●	●	●	●	
20	高江山麓	210	69	指宿市岩本	山地			●	●			
21	田原迫	210	87	指宿市新西方	台地					●		
22	野中	210	88	指宿市新西方	台地			●				
23	砂入	210	18	指宿市新西方	台地					●		
24	渡瀬	210	9	指宿市新西方	台地		●					
25	西原道畑	210	5	指宿市新西方	台地		●	●				
26	早馬迫	210	10	指宿市新西方	台地		●	●	●			
27	中迫	210	77	指宿市新西方	丘陵		●					
28	西原迫	210	6	指宿市新西方	台地		●	●	●			
29	鳥添	210	80	指宿市新西方	丘陵		●					
30	十石平	210	81	指宿市新西方	丘陵			●				
31	今田平	210	78	指宿市新西方	丘陵		●					
32	十石	210	79	指宿市新西方	丘陵		●					
33	十石出口	210	82	指宿市新西方	丘陵			●				
34	榎木迫	210	83	指宿市新西方	丘陵		●					
35	景気ヶ鼻	210	42	指宿市岩本	台地			●				
36	尾長谷迫	210	12	指宿市西方	台地		●	●	●	●		指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
37	外城市	210	17	指宿市西方	台地			●				
38	松尾城跡	210	25	指宿市西方	海岸					●		指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 (52) (54) (55) (58) (59) (61)
39	佐真原	210	33	指宿市西方	台地			●	●	●		
40	弓場	210	32	指宿市西方	台地		●	●	●	●		
41	大園原	210	44	指宿市西方	台地		●	●				指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 (47) (61)
42	道下	210	45	指宿市西方	平地			●				
43	道下工区第1地点	210	84	指宿市西方	台地		●	●				
44	横瀬	210	7	指宿市西方	台地		●	●	●	●		指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
45	宮之前	210	21	指宿市西方	台地		●	●	●			指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(5) (37) (67)
46	狩集	210	43	指宿市西方	台地			●				
47	久保	210	31	指宿市西方	台地		●	●				
48	中尾迫	210	29	指宿市西方	山地			●	●			指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(38)
49	水迫	210	30	指宿市西方	台地	●	●	●	●	●		指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(34)
50	幸屋	210	20	指宿市新西方	台地				●			指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(46)

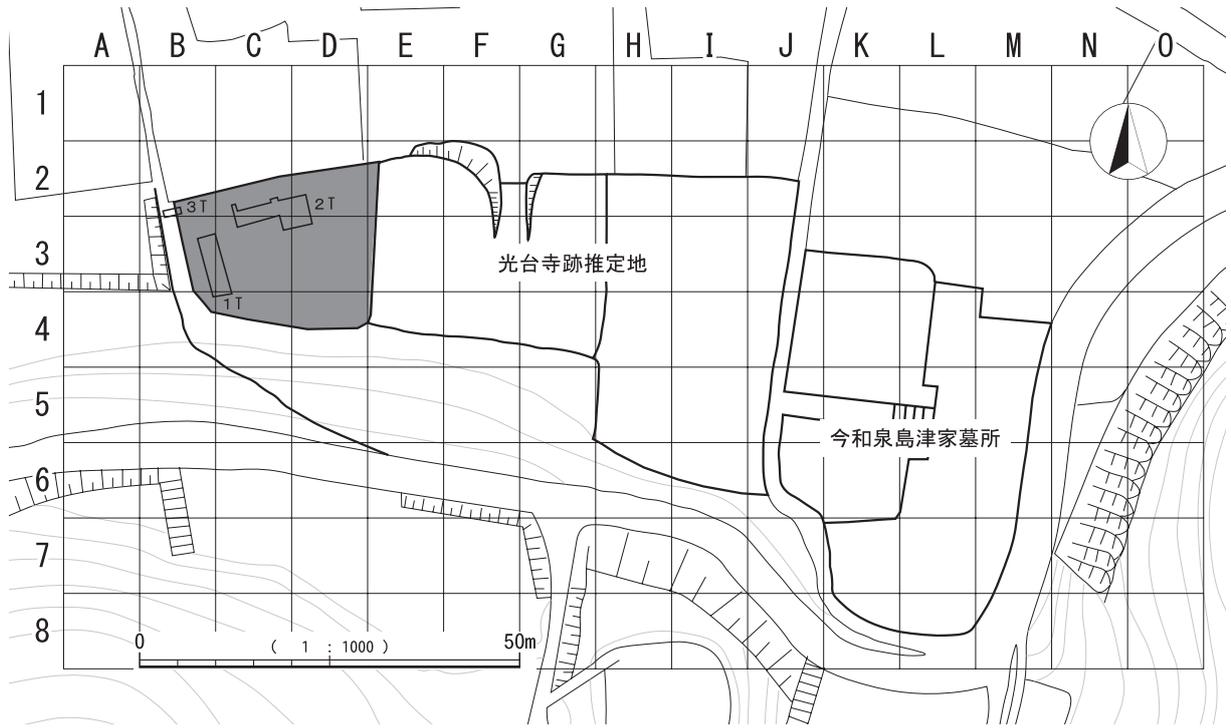
鹿児島湾
(錦江湾)



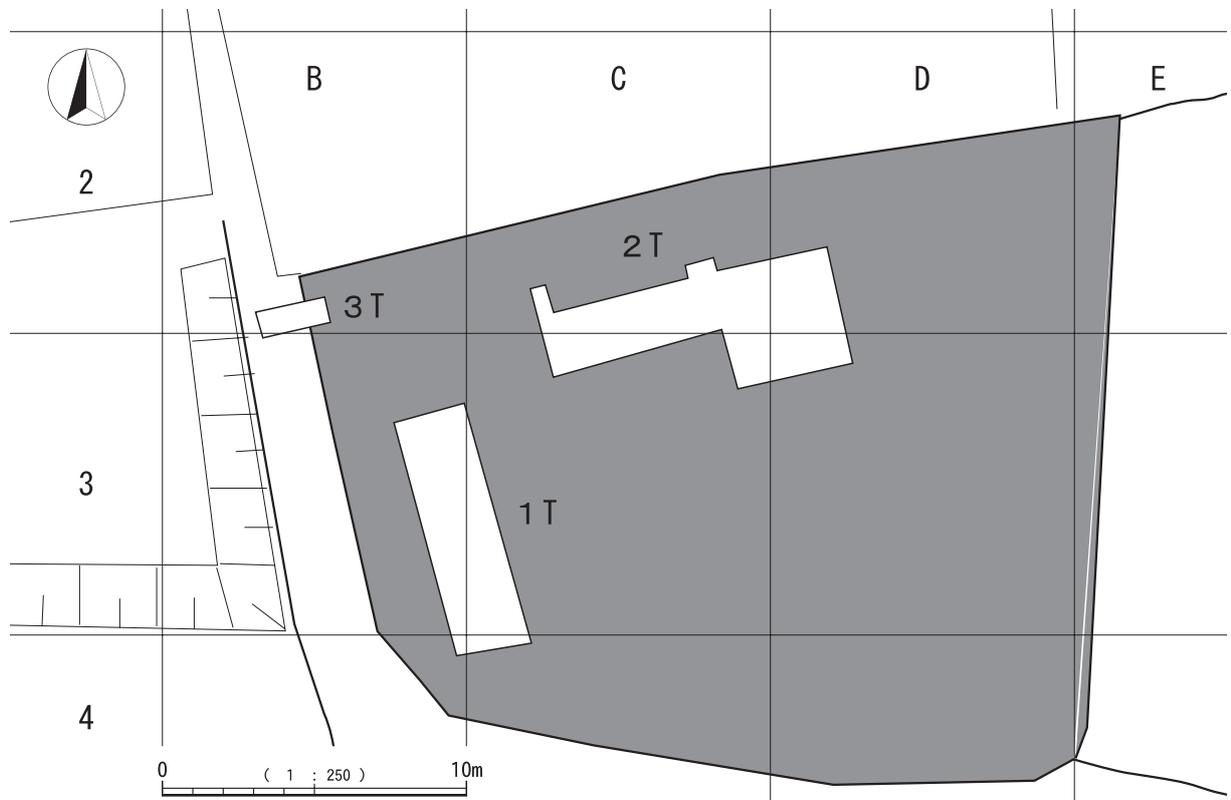
第2図 光台寺跡周辺史跡図



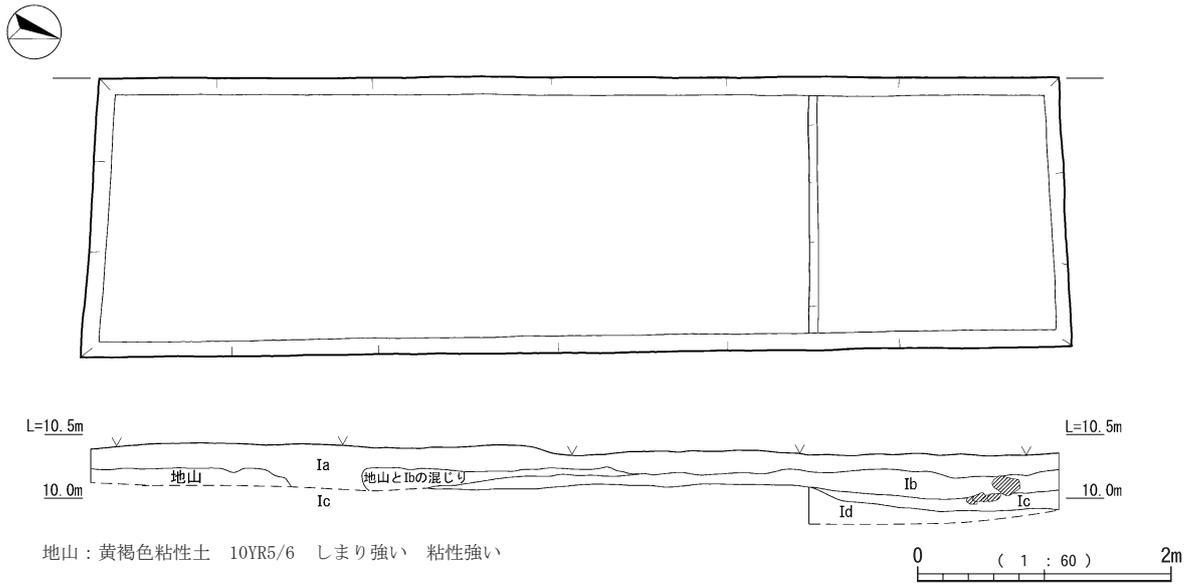
第3図 光台寺跡絵図「藤澤山衆領軒」（鹿児島県立図書館蔵）



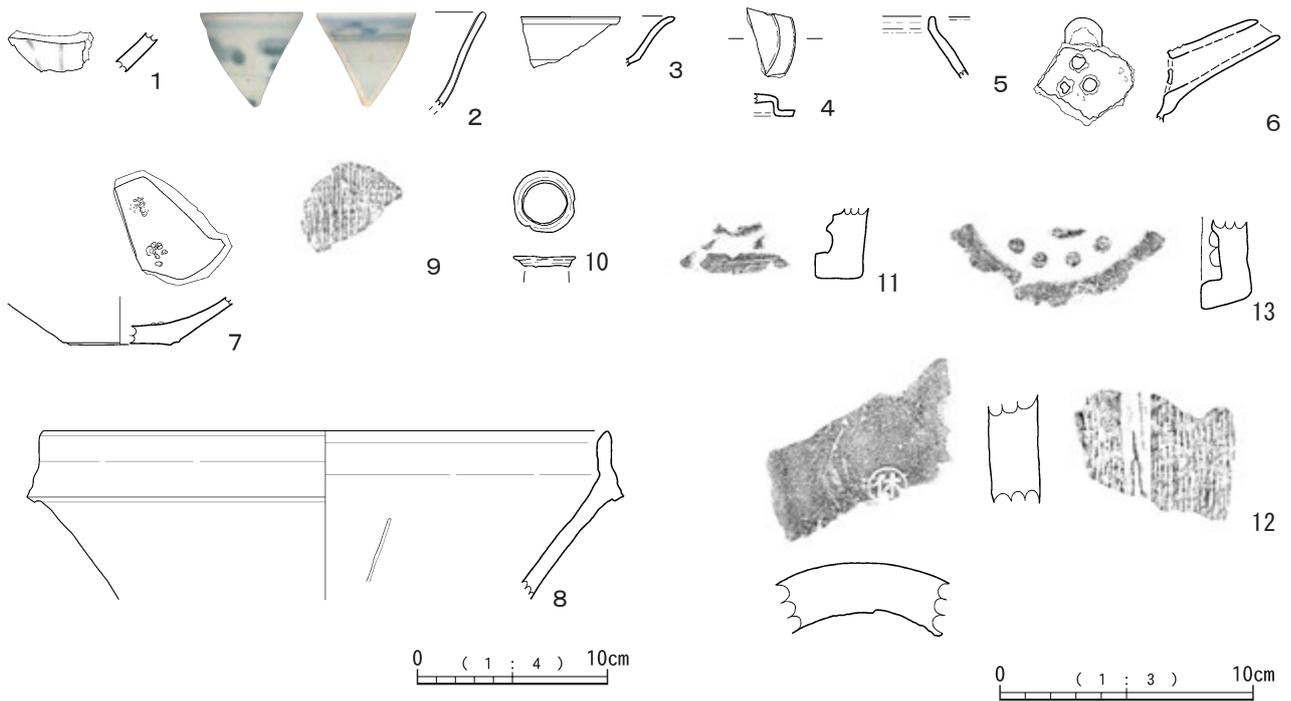
第4図 光台寺跡推定地



第5図 光台寺跡トレンチ配置図



第6図 光台寺跡1トレンチ平面・断面図



第7図 1トレンチ出土遺物

1 1トレンチ（第6図）

光台寺跡推定地の西端部の、B・C-3・4区に設定した。約8m×2.4m、南北方向を軸とするトレンチを設定し調査を行った。

トレンチ北東部にIb層以下の下層確認トレンチを設定し掘削したが、粘質の強い土壤に拳～人頭大の流紋岩角礫が混入する層が50cm以上堆積していることが確認された。

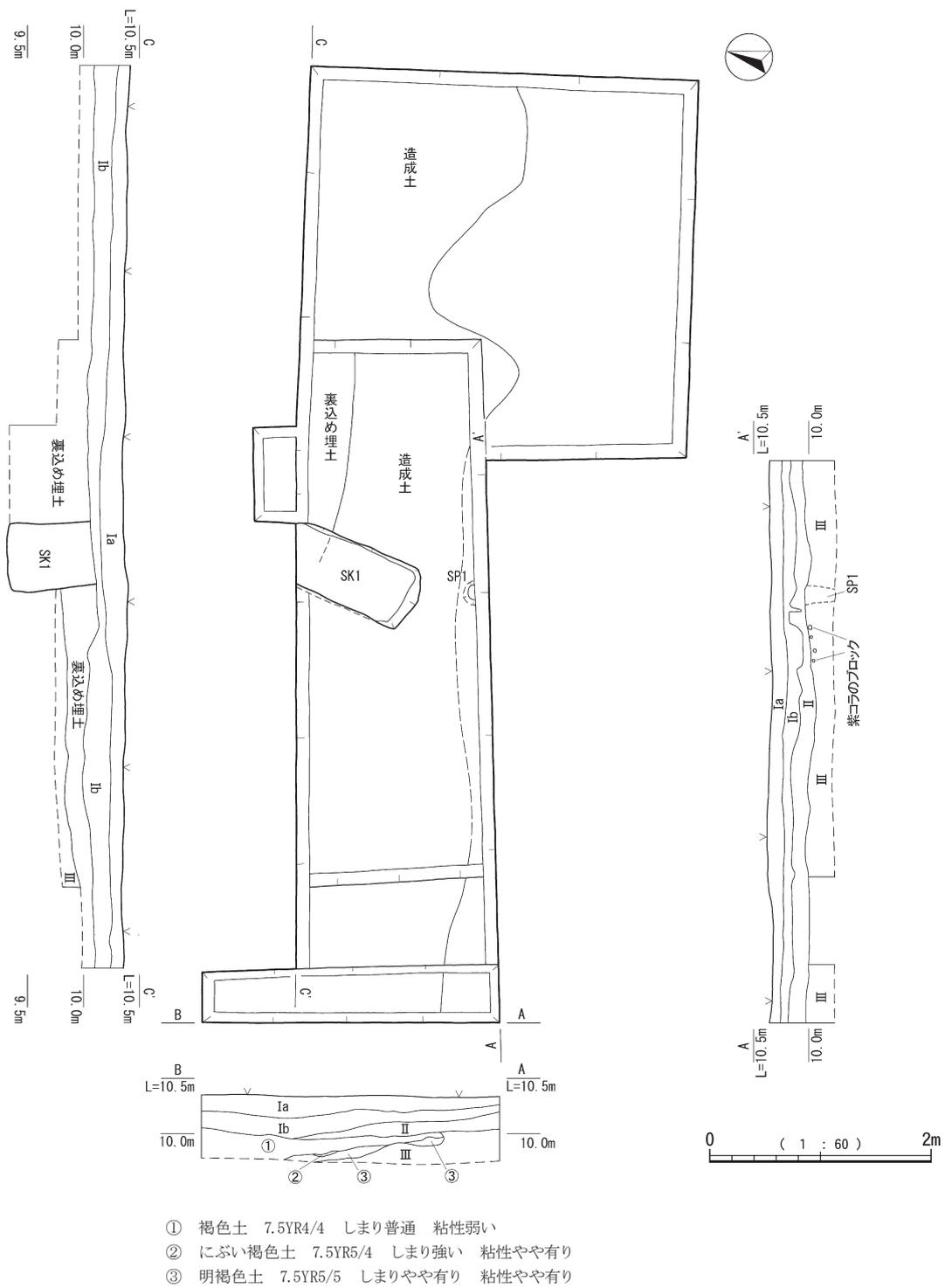
(1) 遺構

遺構は検出されなかった。

(2) 1トレンチ出土遺物（第7図）

遺物は、Ia・Ib層から中世の青磁、白磁、備前焼、近世は瓦、薩摩焼、肥前焼、琉球陶器、磚、土師器が出土した。近世の遺物はおおよそ18世紀代のものと考えられる。

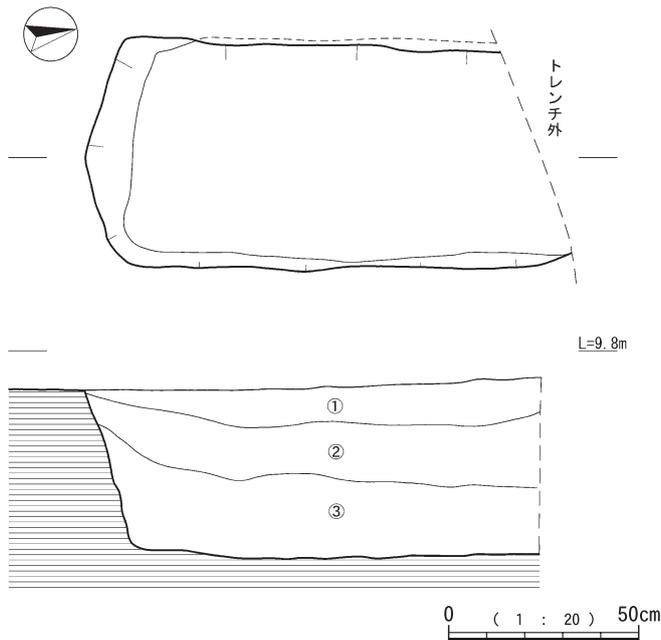
ア 陶磁器



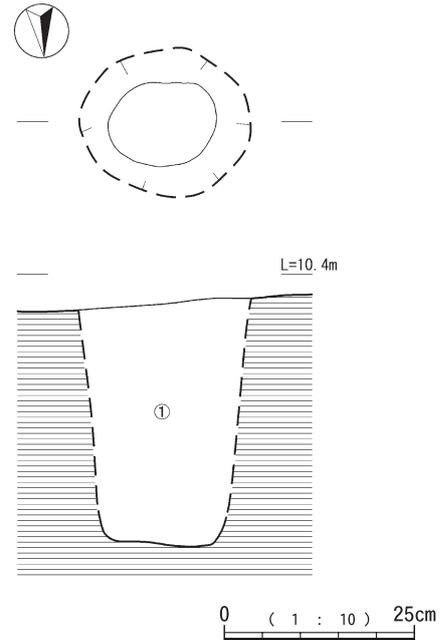
第8図 光台寺跡2トレンチ平面・断面図

1は、碗で、中国龍泉窯系の青磁である。大宰府分類の碗Ⅲ類に比定される。13世紀前半～14世紀のものと思われる。鎬連弁文が見られる。2は、染付であり、薩摩磁器の端反碗である。外面の口縁部分に文様が描かれ、内面には

虫文が描かれる。時期は19世紀中頃のものと考えられる。3は、白磁の皿で、森田分類の皿D群に比定され、16世紀のものと思われる。4は、堅野系の総釉の土瓶の蓋部分である。時期は18世紀～19世紀のものと思われる。5は、堅野系の

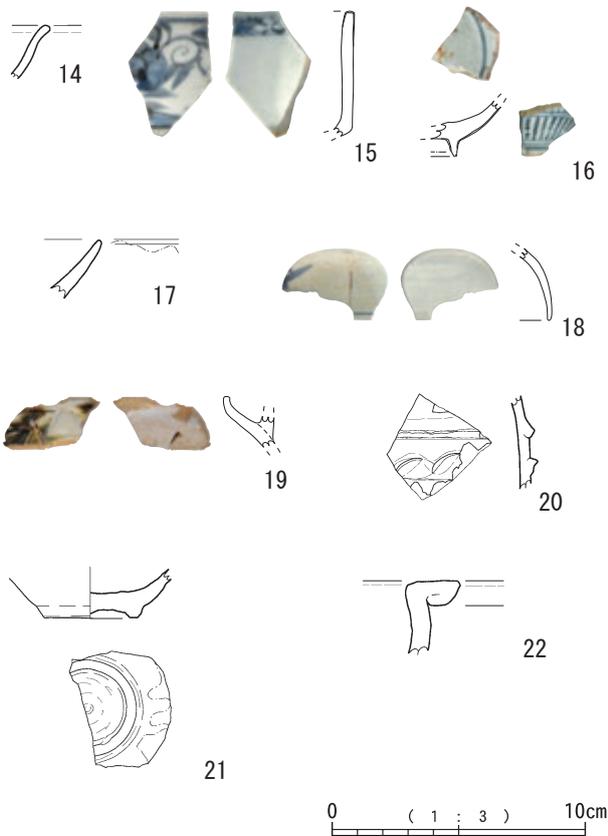


- ① 褐色土 7.5YR4/4 しまり普通 粘性弱い
- ② にぶい褐色土 7.5YR5/4 しまり強い 粘性やや有り
- ③ 明褐色土 7.5YR5/5 しまりやや有り 粘性やや有り



- ① 粒径1cm以下の池田降下軽石が充填されている。

第9図 光台寺跡2トレンチ内土坑及びピット



第10図 2トレンチ出土遺物

土瓶で、外面、内面が施釉され、口縁付近は露胎する。時期は18世紀～19世紀と思われる。6は、龍門司系の土瓶である。緑釉であるが注ぎ口根元に火を受けて焦げている。時期は18世紀後半と思われる。7は、加治木・始良系（元立院窯）の皿である。18世紀のものと考えられる。胎土の色が黒く、重ね焼きの際の砂目（ごま目）が残る。深い黒い釉薬がかかる。8は、備前産と思われる播鉢である。時期は16世紀と考えられる。9は、苗代川系の播鉢で総釉、18世紀～19世紀のものと思われる。

イ 鉄製品

10は、鉄製のキセルの先端部である。

ウ 瓦

11は、軒棧瓦で在地系のものと思われる。12は、丸瓦で「休」のスタンプが押されている。13は、軒棧瓦の軒丸部とみられ、右巻きの連珠巴文である。これは在地生産のものと思われる。

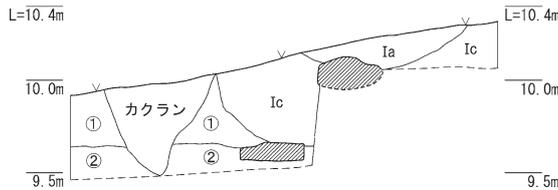
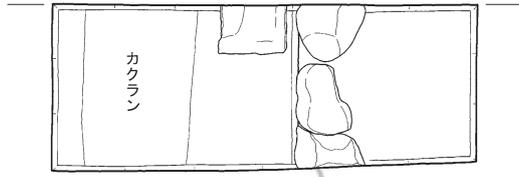
2 トレンチ（第8図）

光台寺跡推定地の北側の、C・D-2・3区に設定した。約9.7m×4.4mの東西を軸とするトレンチを設定し調査を行った。

（1）遺構（第9図）

遺構は、土坑1基とピット1基を検出した。

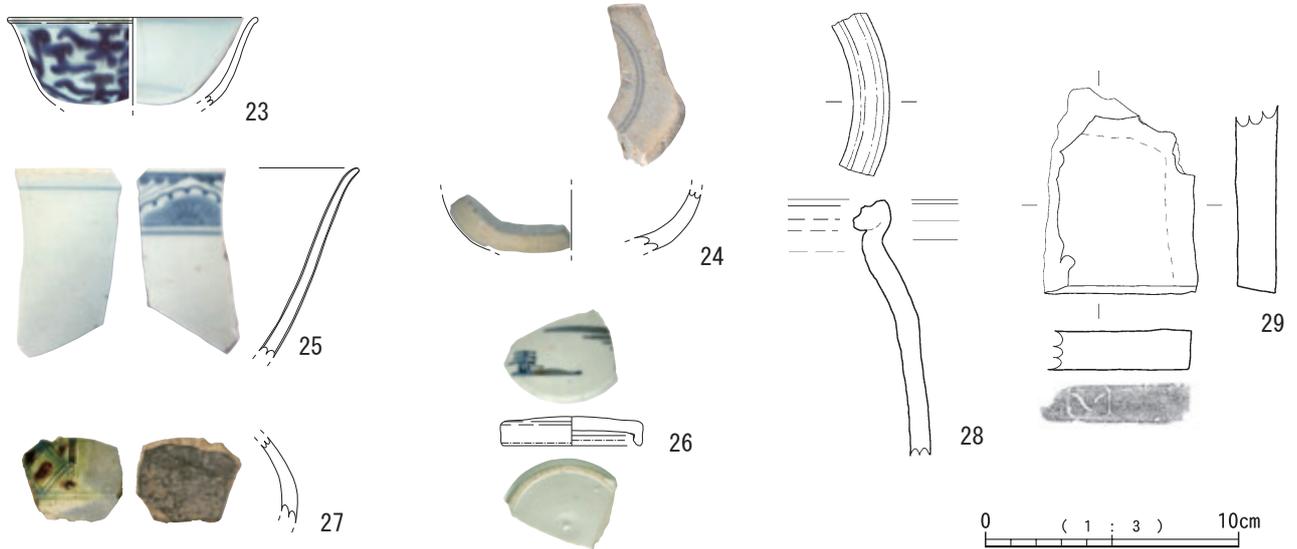
土坑（SK 1）は、裏込めの埋土を切り込む形で検出された。Ⅲ層で検出、長軸120cm以上、短辺60cm、検出面からの深さが45cmである。トレンチ断面で観察するとIb層下面か



- ① 暗褐色土 10YR3/3 しまり強い 粘性やや有り
- ② 黄褐色土 10YR5/6 しまり非常に強い 粘性弱い



第11図 光台寺跡3トレンチ平面・断面図



第12図 3トレンチ出土遺物

ら掘り込まれており、実際の深さは75cmであった。土坑北側はトレンチ外のため調査できなかった。

ピット (SP 1) は、上部を掘り飛ばしており、下部2~3cm程度しか残存していなかった。壁面はわずかに上部が残存しており、II層上面から掘り込まれている。

(2) 遺構内遺物

遺構内遺物として、土坑内出土の棧瓦が1点出土した。鹿児島城下生産の胎土と同じであるが、焼成不良である。時期は18世紀から19世紀の年代のものと推定される。薩摩焼も出土したが、小片のため図化しなかった。

(3) 2トレンチ出土遺物 (第10図)

ア 陶磁器

14は、白磁の小碗で森田分類のE群に否定され、16世紀のものと考えられる。15は、染付であり肥前系の半筒碗である。外面に草花文が描かれる。時期は18世紀後半以降と考えられる。呉須が薩摩焼でよくみられるものである。16は、

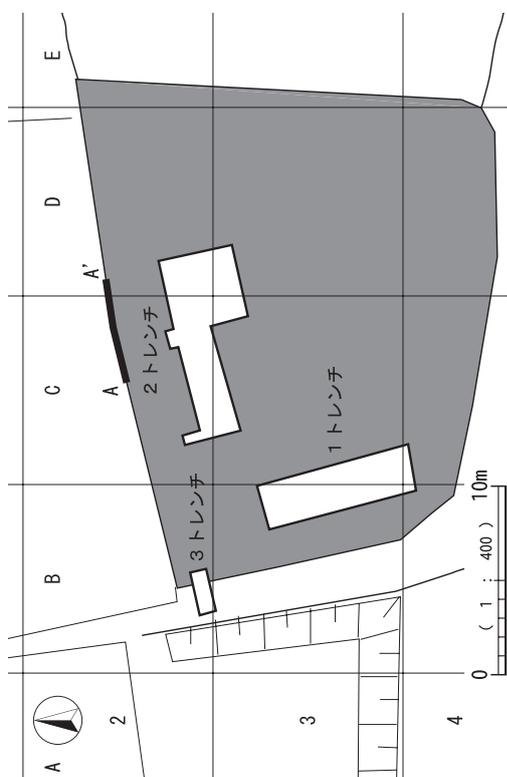
薩摩磁器である。器種は碗で外面に暦文が描かれる。時期は18世紀末~19世紀前半と考えられる。17は、加治木・始良系の小皿で灯明皿として使用されていたと考えられる。内面、外面口縁付近に施釉されている。時期は18世紀後半と考えられる。18は、染付であり肥前系の蓋である。蓋物の下部に当たり、内側が無釉である。時期は不明。19は、土瓶で、琉球陶器である。部位は土瓶の持ち手をつける土台部分である。18世紀~19世紀のものと考えられる。20は、苗代川系の甕の肩の部分で突帯と蓮状文があり、堂平II期に分類される。時期は17世紀代と思われる。胴部が施釉され、内面・高台周辺は露胎している。21は、加治木・始良系の油壺で無釉である。18世紀後半のものと思われる。22は、苗代川系の播鉢である。逆L字口縁で19世紀中頃と考えられる。

3 3トレンチ (第11図)

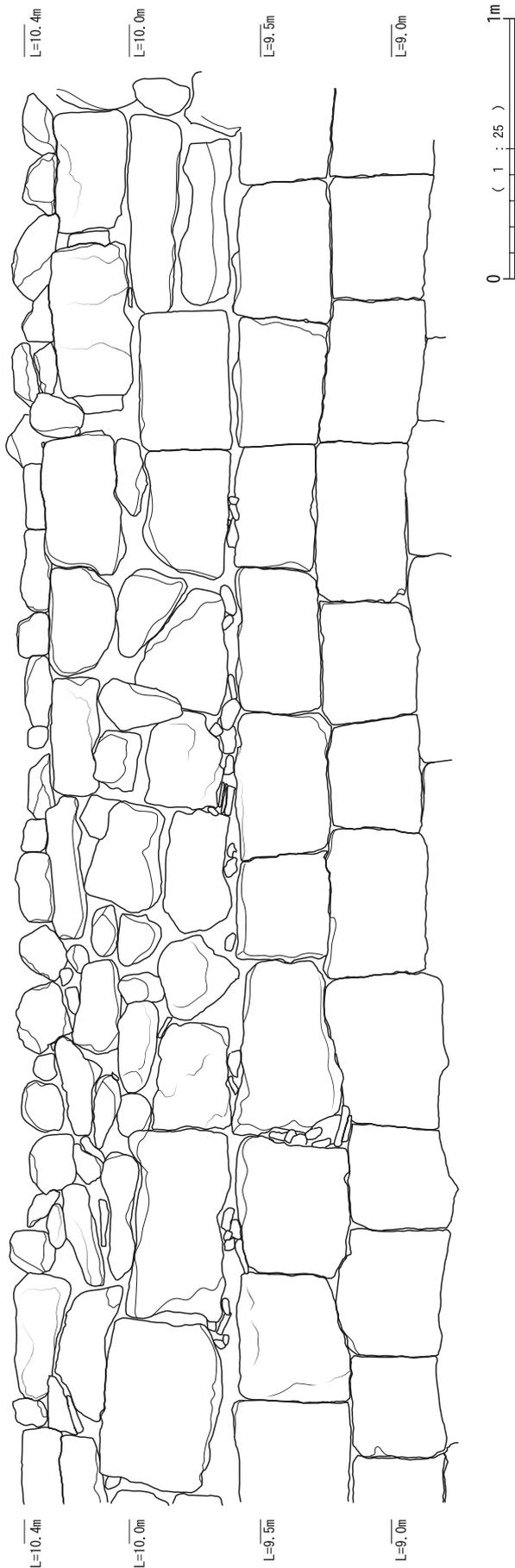
光台寺跡推定地の北西端、B-2・3区に設定した。絵図では参道から光台寺に入る門があったと想定される地点であ



第14図 光台寺跡石埋写真



第13図 光台寺跡石埋位置図



第15図 光台寺跡石埋実測図

る。約2.1m×1mの東西を軸とするトレンチを設定し調査を行った。

地表面から50～60cm程度まで調査したが、攪乱が多く、トレンチの床面直上でも現代のものが出土した。

(1) 遺構

遺構は検出されなかった。

(2) 3トレンチ出土遺物(第12図)

遺物は、近代と考えられる瓦、肥前焼、薩摩焼が出土したが、攪乱内のものが多い。

ア 陶磁器

23は、景德鎮窯系の青花である。青が色鮮やかで、薄い作りであるが、器種は不明である。時期は16世紀末～17世紀初頭と考えられる。24は、外青染付で、肥前系である。18世紀後半のものと思われる。火を受けて変色している。25は、鉢で肥前系の染付である。薩摩焼に類似する釉薬がかかり、内面には文様がある。26は、薩摩磁器で合子の蓋部分である。上面に桜間山水文が描かれる。時期は19世紀と考えられる。27は、土瓶で、琉球陶器である。18世紀のものと思われる。28は、苗代川系の蛸壺である。近世～近代のものと思われる。

イ 瓦

29は、3トレンチから出土した棧瓦で、鹿児島城下で出土するタイプと似通い、「八」のスタンプが押されている。

ウ 板石

トレンチ中央部付近の表土下50cmの地点から長軸60cm、短軸30cm、厚さ10cmの、長方形に成形された凝灰岩製の板石が出土した。保存目的の調査のため、現状のまま留め置いた。

4 石垣(第13・14・15図・写真1)

石垣はC・D-2区の民有地との境界に現存するものである。(第13図) 調査は、石垣表面の除草、異物の除去を行い、写真撮影、写真実測のための測量、写真撮影を行った。(第14図)

この石垣は、今回調査した部分以外は、後世の土地改変等により損壊、改変されており、ほとんど残存していない。今回調査した箇所も、創建時のものと考えられる石垣の上に、100cm程度近現代の石積み積み足されている。近世と考えられる石垣は、間知積みで積まれているが、数か所において亀甲崩し積みが確認できる。石材を切り出す際についた鑿の痕を削り、表面を鑿で整えている。縦約40cm、横約40～60cmに切り出した凝灰岩で構成されている。表面で確認できる範囲の下にも石垣が続いているが、民有地のため下位の状況は確認できなかった。(第15図)

第3表 光台寺跡出土陶磁器観察表

挿入番号	掲載番号	種別	器種	種類	トレンチ	層	取上番号	遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土の色調	記号	産地	年代	備考	
7	1	陶磁器	碗	青磁	1T	I b	6	—	—	—	—	灰白	N8/0	龍泉窯系	13C前半～14C		
	2	陶磁器	端反碗	薩摩磁器	1T	II	144	—	—	—	3.8	灰白	10Y8/1	薩摩	19C中期		
	3	陶磁器	皿	白磁	1T	I b	3	—	—	—	—	灰白	2.5YR8/1	中国	16C		
	4	陶磁器	蓋	白色陶胎	1T	表土一括	—	—	—	—	—	淡黄	2.5YR8/3	薩摩(堅野系)	18C～19C		
	5	陶磁器	土瓶	白色陶胎	1T	表土一括	—	—	—	—	—	淡黄	2.5YR8/3	薩摩(堅野系)	18C～19C		
	6	陶磁器	土瓶	白色陶胎	1T	I b	47	—	—	—	—	—	オリーブ黒	Hue5Y3/2	薩摩(堅野系)	18C後半	被熱している
	7	陶磁器	皿	陶器	1T	I a	—	—	—	4.0	1.6	褐灰	10YR6/1	薩摩(加治木・始良系)	18C		
	8	陶磁器	擂鉢	炆器	1T	II	—	—	(29.8)	—	—	—	灰白	N71	備前	16C	
	9	陶磁器	擂鉢	陶器	1T	I b	—	—	—	—	—	—	にぶい赤	7.5R4/4	薩摩(苗代川系)	18C～19C	
10	14	陶磁器	小碗	白磁	2T	I b	20	—	—	—	—	灰白	5Y8/1	中国	16C		
	15	陶磁器	半筒碗	染付	2T	II	89	—	—	—	(4.95)	灰白	N81	肥前系	18C後半以降	草花文	
	16	陶磁器	碗	薩摩磁器	2T	I	—	—	—	—	(2.2)	灰白	5Y8/1	薩摩	18C末～19C前半	層文	
	17	陶磁器	小皿	陶器	2T	I b	19	—	—	—	—	にぶい褐	7.5YR6/3	薩摩(加治木・始良系)	18C後半	灯明皿	
	18	陶磁器	蓋	染付	2T	II	119	—	—	—	2.8	灰白	N81	肥前系	不明	内側が無釉	
	19	陶磁器	土瓶	琉球陶器	2T	II	123	—	—	—	2	にぶい黄橙	10YR7/4	琉球	18C～19C	つる掛け部	
	20	陶磁器	壺	陶器	2T	II	131	—	—	—	—	—	褐	7.5YR4/3	薩摩(苗代川系)	17C後半	
	21	陶磁器	油壺	陶器	2T	II	126	—	—	3.8	—	—	明黄褐	10YR6/6	薩摩(加治木・始良系)	18C後半	
	22	陶磁器	擂鉢	陶器	2T	II	90	—	—	—	—	—	にぶい黄褐	10YR6/4	薩摩(苗代川系)	19C中頃	
	23	陶磁器	不明	青花	3T	I	—	—	(9.8)	—	(3.5)	灰白	N81	景德鎮窯系	16C末～17C初頭		
	24	陶磁器	不明	外青染付	3T	I	—	—	—	—	(2.6)	灰白	N71	肥前系	18C後半～19C	被熱している	
12	25	陶磁器	鉢	染付	3T	I	—	—	—	—	(7.7)	灰白	5Y8/1	肥前系	18C～19C		
	26	陶磁器	合子蓋	薩摩磁器	3T	I	—	—	(4.4)	—	1.1	灰白	N81	薩摩	19C	桜間山水文	
	27	陶磁器	土瓶	琉球陶器	3T	I	—	—	—	—	(3.4)	にぶい黄	2.5Y6/4	琉球	18C		
	28	陶磁器	蛸壺	陶器	3T	I	—	—	—	—	—	赤褐	2.5YR4/8	薩摩(苗代川系)	近世～近代		

第4表 光台寺跡出土瓦観察表

挿入番号	掲載番号	種別	瓦種	トレンチ	遺構	層	取上番号	長さ	幅	厚さ	瓦当 : 文様	建数	瓦径	周縁幅	瓦当高 (cm)	文様高 (cm)	内径 (cm)	文径 (cm)	胎土色調	産地	年代	備考
7	11	瓦	軒棧瓦	1T	—	I b	—	(3.1)	(5.9)	1.9	—	—	(2.75)	1.0	—	—	(0.8)	(1.8)	にぶい黄橙10YR6/3	在地生産か	18C～19C	
	12	瓦	丸瓦	1T	—	I a	—	(6.1)	(7.8)	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	淡黄2.5Y8/3	鹿児島城下	18C～19C	「八」のスタンプ
	13	瓦	軒棧瓦	1T	—	表土	—	—	—	2.0	連珠巴 (右巻き)	(4)	(3.5)	1.2	—	—	—	(1.2)	にぶい黄橙10YR6/3	在地生産か	18C～19C	
12	29	瓦	棧瓦	3T	—	I	—	(8.1)	(6)	1.5	—	—	—	—	—	—	—	—	灰黄2.5Y6/2	鹿児島城下か	18C～19C	「八」のスタンプ

第5表 光台寺跡出土鉄製品観察表

挿入番号	掲載番号	種別	器種	トレンチ	遺構	層	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	色名	記号	産地	年代	備考
7	10	鉄製品	キセル先端	1T	—	I b	44	(0.4)	2.4	(0.4)	黄褐	2.5Y5/4	—	不明	

第4節 小結

第3節調査成果をもとに、光台寺跡についてまとめていきたい。

1 発掘調査

(1) 各トレンチの調査

光台寺跡の調査では、第5図のように3つのトレンチを設定し、調査を行った。

1・2トレンチの調査から、調査区の土層は山側から石垣側に向かって造成を何層か行っていることが確認された。自然地形で傾斜が強くなる所から石垣までの間を埋め、平坦な土地を造成するために裏込めとして使用したと考えられる。裏込めの土層は、Ⅱ層とⅢ層の間で確認され、Ⅲ層には含まれない流紋岩の角礫や瓦片が出土した。石垣に向けて深くなっており、地表面から100cm以上掘削したが、床面は検出できず、安全上の配慮からそれ以下の掘削は断念したため、石垣の裏面にどのように入っているかは確認できていない。

3トレンチ内で出土した板石は、現存する石垣上面の高さと同一である。ただし、板石の広がりとは今回の調査では分からなかった。板石の検出は地山に近い層の上層であるため、光台寺創建時の可能性が高い。また詳細は後述するが、調査区に隣接する宅地にあった五輪塔から3トレンチへ向かう里道は、光台寺への参道であったと考えられる。その参道に敷き詰められていた敷石である可能性が高い。

(2) 出土遺物

今回の調査では、約380点の遺物が出土し、そのうち、陶磁器24点、瓦4点、鉄製品1点を図化した。

出土遺物の中で、瓦が223点と最も多く、18～19世紀で在地生産と思われるものが主となるが、スタンプが押されている刻印瓦が2点(12丸瓦「休」、29棧瓦「八」)出土している。刻印は、生産者の屋号を表すもの、また職人名、瓦の送り先など様々である。「休」は、鹿児島城跡でも162点出土しており、県埋せ報告書(214)で報告されている刻印瓦のうち、「休」の刻印は、刻印039-2に類似する。また、胎土や色調が類似しているものもあった。また、「八」の刻印は確認されていないものの、「二」「七」「十」の刻印は確認されており、光台寺跡で出土した「八」も鹿児島城下で生産された可能性が高いと考えられるが、鹿児島県内での近世遺跡の調査類例が少なく、瓦の生産等についても明確になってはいないのが現状である。

また、次に出土数が多いのは、陶磁器の90点である。主として18～19世紀の碗や土瓶、播鉢などの遺物が出土しているが、青磁や白磁、琉球陶器などの陶磁器類の小片も出土している。青磁は13世紀後半～14世紀前半のものが1点、青花は16世紀末～17世紀初頭のものが1点出ている。青磁、白磁の出土は、伝製品として使用されていた可能性があるものの、中世において生活の痕跡があったともいえる。またその他の遺物で18～19世紀のものが出土していることは、光台寺が延享2(1745)年薩摩藩4代当主島津吉貴に建立を命

じられ、宝暦7(1757)年に創建されていることと時期が重なることから、光台寺に関連する遺物と考えられる。

(3) 石垣(第4・13・14・15図・写真1)

周辺の状況から光台寺創建時にはB-2区からJ-2区までであった可能性がある(第4図)が、今回調査した部分以外には後世の土地改変等により損壊、改変されており、ほとんど残存していない。今回調査したC・D-2区の石垣(第13・14図)は、上下で積み方が異なる。下2段は数か所において間知石や亀甲崩し積みが確認できることから、当時のものであると判断した。現地表面の下については、埋没しており下層面の確認は出来ていない。今和泉島津家墓所に残る石垣の下段も石垣遺構と同様に間知石や亀甲崩し積みが確認できる(第15図、写真1)。表面の加工は墓所の石垣がより丁寧な加工がなされているが、積み方から同時期のものではないかと考えられる。

石積みの状況から、残存する石垣の上から100cm程度は積み足されたものと考えられる。積み足された石垣の間詰には、破碎した瓦を挟んでいる箇所や凝灰岩製の導水管を転用しているものもあった。聞き取りによると、積み足された部分に仁王像の胴部も石垣の石材として使用されていたそうで、廃仏毀釈後に転用されたものと考えられる。

2 現地踏査及び聞き取り調査

(1) 仁王像(写真3)

仁王像は、元禄8(1695)年に、調査区の西方約200mにある豊玉媛神社に奉納されていたものを、光台寺創建時に移設したものであるが、廃仏毀釈で破壊され、その一部が石垣として使用されていたとみられる。その後、指宿市考古博物館時遊館Coccoはしむれ敷地内に移設され、修復の後、現在は元の豊玉媛神社に戻されている。

(2) 今和泉島津家墓所の五輪塔(写真2)

聞き取りによると、現在、今和泉島津家墓所入り口に置いてある五輪塔2基は、宅地造成のために移設されたものであることが分かった。幸いにも写真の提供を得たので、写真2に示す。鹿児島市の福昌寺は島津家の菩提寺であるが、藩主墓域の他に城下士の墓域もあったとされる。平成19年度の調査においては墓所南西に近世墓として円形墓壇が9基、平成20年度の調査においては、墓所中央西寄り円形を呈する石組の近世墓が1基検出されている。また、同じく鹿児島市の清泉寺跡では、調査区北の島津大和守の墓周辺や調査区西で、五輪塔が19基造立、また五輪塔の部位が約100個確認され石塔残欠として報告されている。五輪塔だけでなく、磨崖仏や磨崖宝塔、板碑、無縫塔なども並ぶ。これらをふまえると、光台寺も清泉寺のように寺院の周辺に墓や供養塔など複数の石塔が広がっており、現存する五輪塔が2基確認された周辺には、当時その一帯に墓地が広がっていた可能性が考えられる。

3 光台寺の推定地

周辺住民への聞き取りを行った。それによると、今和泉島津家墓所に隣接するH～I-4区には、築山や池があり、そこからは多くの陶磁器が出土したという。しかし、立ち入りが困難で詳細に確認するには至らなかった。また近くに手水鉢も置かれていたが、現在は墓所付近に移設しているとのことであった。E～G-2～4区付近にはかつて墓守を行っていた大きな屋敷があり、その敷地内に築山があったという。

H-5区には古くから井戸があり、現在も使用されている。平面形は方形で、溶結凝灰岩を利用している。民有地のた

め詳細な調査はできなかったが、現在指宿市立今和泉小学校の敷地内にある、今和泉島津家屋敷跡の井戸の形状に非常に類似している。

今回の調査区では、建物跡を検出することは出来なかった。調査区の周辺をみると、南側は斜面になっていて、現在も山中に近世～近現代の墓地が広がり、北側は、鉄道や国道がすぐ近くを通り、当時も旧街道が通っていた。このような状況や聞き取りから、調査区と今和泉島津家墓所の間に光台寺に関する建物があつたと推定される。



写真1 石垣（亀甲崩し積み・間知石）



写真2 五輪塔



写真3 豊玉媛神社・仁王像

第3章 照信院跡

第1節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

大崎町は、鹿児島県の東南部、大隅半島の東部に位置する。東は志布志市、南は肝属郡東串良町、西は鹿屋市、北は曾於市と接し、南東は志布志湾に面している。大隅半島は、南北方向に走る山地、その間の丘陵、台地及び低地などの低地帯から構成され、地質は大部分がシラス、ボラなどの火山灰土壌となっている。東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に張り出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山(1,119m)である。西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈山地へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など500~600m級の山々と、南部の大笹柄岳(1,236.8m)を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。東西の山地は、ともに九州山地の延長上にあり、その間は丘陵や台地及び低地帯となっている。これらの山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布する典型的なシラス地形となっている。この火砕流は、鹿児島湾口にある阿多カルデラの火砕流や、湾奥にある始良カルデラの入戸火砕流で、これらの火砕流をはじめとする火山性噴出物の堆積がベースとなっている。噴出物は、堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開析されるが、丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず、広大な台地となっている。一方、低地は高隈山地や鰐塚山地などを水源とする大小の河川が走り、志布志湾、鹿児島湾などに注いでいる。これらの河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また、幾段かの河岸段丘も認められる。海岸線には砂丘の形成されるところもあり、特に東側の志布志湾岸では幅広い。

大崎町の地形は、北部に菱田川とその上流にあたる大鳥川、東部を田原川、中央部を持留川が南流し、志布志湾に注いでいる。大崎町の地勢は概ね2つに分けられ、北端部は大鳥川を中心として河川が溶結凝灰岩を切り開き、起伏の激しい溪谷を構成している。中部から南部地帯は北西から東南の海岸線に向かって、緩やかに傾斜している起伏の少ない平坦な地帯であり、場所によっては志布志湾まで見通せる。これらの河川によって台地は区切られ、西部から永吉台地、仮宿台地、飯隈(中沖)台地に分けられる。永吉台地の西側を串良川、永吉台地と仮宿台地の間を持留川、飯隈台地の東側を菱田川が流れている。台地の大部分は、約29,000年前の始良カルデラ起源のシラスの上に形成された「クロボク」と呼ばれる黒色土壌が広がっている。

大崎町の海岸線は、志布志市から東串良町まで約16kmにわたって続く幅1~1.5kmの砂丘海岸のほぼ中央部分にあたる。菱田川河口から南西に弧状を描いて、東串良町に至るま

で約7kmの海岸線があり、弥生時代などの遺跡が数mの砂層に厚く覆われていた事例もある。

照信院跡は、田原川の左岸に位置し、飯隈台地の南西部縁辺部に位置し、標高約33m、志布志湾から直線距離で約2.4kmある。田原川の左岸の飯隈台地には、飯隈遺跡群といわれる古代以降の飯隈山の寺院に関する石塔群や墓所・飯隈が存在しており、現在でも熊野神社周辺の地域を「○○坊」(第17図)と呼んでおり、中・近世においても歴史的に重要な地域であったことがうかがえる。また、古墳も9基確認されており、鰐塚山では多数の地下式横穴墓が確認されている。

2 歴史的環境

大崎町では、主に田原川、持留川、菱田川、大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。これまで本格的な発掘調査がなされていなかったため詳細は不明であったが、近年大隅中央広域農道や東九州自動車道建設などに伴う発掘調査によって、次第にその歴史的様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

天神段遺跡でナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡及び石器類が、二子塚A遺跡で剥片が発見されている。永吉天神段遺跡では、角錐状石器やナイフ形石器など、ナイフ形石器文化期の遺物や制作跡が発見されている。永吉天神段遺跡と持留川を挟んで立地する荒園遺跡では、細石刃文化期の石器類が発見されている。

縄文時代

早期では、天神段遺跡で堅穴住居状遺構・集石・連穴土坑・落とし穴等が検出され、前平式・石坂式・桑ノ丸式・塞ノ神式・苦浜式土器、石鏃・打製石斧が出土している。二子塚A遺跡では集石が検出され、吉田式・石坂式・塞ノ神式土器、石鏃・石匙などが出土している。金丸城跡では石坂式土器・石鏃・凹石などが、下堀遺跡では集石13基や土坑と、前平式・石坂式・桑ノ丸式・平栞式・塞ノ神式土器、石鏃・石錐等が発見されている。平良上C遺跡では堅穴建物跡・集石・連穴土坑と、石坂式・下剥峯式土器が、荒園遺跡では集石や土坑と、前平式・石坂式・桑ノ丸式・平栞式・塞ノ神式土器、石鏃・石匙、耳栓などが発見されている。益畑遺跡では、前平式土器の時期の堅穴建物跡2軒、連穴土坑16基、集石85基、土坑160基などが検出された。他に前平式・吉田式・石坂式・下剥峯式・辻タイプ・桑ノ丸式・塞ノ神式などの土器や、石鏃・石皿・磨石・敲石・石斧・ハンマーなどの石器が出土した。串良川の右岸に位置する鹿屋市町田堀遺跡では、集石遺構が多く検出され、中原式土器や下剥峯式土器などが出土した。前期では、天神段遺跡で曾畑式土器に伴い現状では西日本最古となる石剣や、石鏃・石皿・磨石等の遺物が、立山B遺跡では曾畑式土器が出土している。

中期では、立山B遺跡で阿高式土器が出土している。細山田段遺跡では、前期末から中期前半の土坑が170基以上検出され、在地の深浦式土器とともに東海系土器、近畿地方の大歳山式土器、瀬戸内～北部九州系の鷹島式・船元式とみられる土器が出土しており、広域な交流がうかがわれる。石鏃・石匙など石器の出土数も多く、挾状耳飾も出土している。後期では、細山田段遺跡で丸尾式・辛川式・西平式・中岳Ⅱ式土器、磨石・石皿などが出土している。下堀遺跡では指笈式・擬似磨消縄文系土器が、大崎細山田段遺跡では、土坑や丸尾式・北久根山式・西平式・御領式土器が確認されている。町田堀遺跡では、竪穴建物跡や埋設土器が検出され、建物跡から中岳Ⅱ式土器が出土している。晩期では、天神段遺跡で竪穴建物跡・土坑群とともに、入佐式・黒川式土器、石鏃・打製石斧・磨製石斧・石鏃・砥石が出土している。立山B遺跡と大崎細山田段遺跡では、黒川式土器が出土している。細山田段遺跡では、入佐式・黒川式土器が出土している。永吉天神段遺跡第1地点では、突帯文土器を伴う竪穴建物跡や鉢・壺、打製石斧・石鏃・石匙・石皿などが発見されている。第2地点でも同時期の土器・石器などが多量に出土している。町田堀遺跡では、入佐式・黒川式土器が出土している。

弥生時代

沢目遺跡は、砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成11年に行われた発掘調査で、竪穴建物跡53軒・土坑約20基・柱穴約180基が発見され、入来Ⅰ式・入来Ⅱ式・山ノ口Ⅰ式・山ノ口Ⅱ式・須玖式土器、鉄製品・軽石製加工品が出土している。近くの砂丘では戦前に人骨が発見されており、河口付近の横瀬では甕棺破片も採集されていることから、埋葬遺構があった可能性もある。下堀遺跡では、山ノ口式土器や須玖式土器を伴った直径8mの円形の大型建物跡2軒・掘立柱建物跡5棟などが検出されている。下堀遺跡と同じ台地にある河岸段丘状の荒園遺跡でも吉ヶ崎式・山ノ口式土器を伴う竪穴建物跡が検出されている。下堀遺跡より一段下がった河岸段丘上にある麦田下遺跡では、高付式土器、西南四国系の土器、瀬戸内系の土器など後期の土器溜まりが検出されている。遺跡の北側と東側を串良川が蛇行して流れる町田堀遺跡では、竪穴建物跡と掘立柱建物跡が検出され、建物跡から中津野式土器が出土している。田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地が多く点在している。

古墳時代

志布志湾岸沿いには、巨大前方後円墳をはじめ、多くの古墳群があり、畿内との関連をうかがわせる。横瀬古墳は古墳時代中期（5世紀前半頃）の大型前方後円墳で、東串良町に所在する唐仁大塚古墳に次いで県内第2の規模を誇る。墳長132m、前方部幅72m、前方部長68m、後円部径64m、くびれ部幅48mあり、そのまわりを幅が12～23m、深さ約1.5mの濠が巡っているが、さらに周堤帯を挟んで外側に周濠が巡る二重周濠の可能性も考えられている。周濠跡からは伽耶

系陶質土器あるいは大阪府陶邑窯産の須恵器や埴輪が出土している。墳丘の高さは、後円部が10.5m、前方部が11.5mであるが、後円部の頂上部に石室が露呈していることから、本来の後円部は現在より高かったと考えられる。墳丘からは円筒埴輪片、形象埴輪片が採集されている。明治35年に盗掘を受け、腐食した直刀や鎧、勾玉類が出土し、石室内は朱塗りであったと伝えられている。神領古墳群は、前方後円墳4基、円墳9基で構成されている。10号墳は墳長54mの前方後円墳である。主体部は6か所の縄掛突起のある刳抜式舟形石棺を軽石で覆った礫榔で、周辺から管玉・勾玉、鉄剣、短甲の一部、鉄鏃束などが出土している。周溝からは盾持人埴輪や朝顔形埴輪などの埴輪や、愛媛県市場南組窯産などの初期須恵器・土師器高坏・製塩土器などを含む5世紀前半のものである大量の祭祀土器群が出土している。まわりには4基の地下式横穴墓が発見されている。6号墳（天子ヶ丘古墳）は墳長43mの前方後円墳で、後円部に花崗岩質板石を使用した組合せ箱形石棺があった。日光鏡・倣製獣帯鏡各1面が採集され、石棺内から、鉄剣・鉄刀、鏡等の副葬品が出土した。神領古墳群では他に5・6世紀の地下式横穴墓も8基検出されている。1号は、長方形家形の玄室、妻入りの羨道部取り付けで、軽石製箱形石棺内から鉄剣・イモガイ製貝釧・仿製内行花文鏡・骨製簪などの副葬品が出土した。5号からも、イモガイ製貝釧が出土した。6号の玄室内では南側に歯が数本、北側に大腿骨が残存しており、副葬品はなかった。海岸から離れた所にも高塚古墳は広がり、志布志市原田古墳群には、直径40mの円墳が現存する。また、軽石製組み合わせ石棺をもつ地下式横穴墓は、玄室が家形をなし、羨道部の取り付けが妻入りである。石棺内には、女性の人骨が残っており、刀子が副葬されていた。町内では他に、飯隈台地に飯隈古墳群（円墳9基、地下式横穴墓21基）、假宿台地に田中古墳群（円墳3基）・後迫古墳群・鷲塚地下式横穴墓群・下堀遺跡（地下式横穴墓7基）が知られている。集落遺跡としては、原田古墳群と同じ台地の北側には長田遺跡があり、竪穴住居跡3軒が検出されている。二子塚A遺跡では、竪穴住居跡3軒・土坑1基が検出され、4～5世紀代の成川式土器や、宮崎平野の影響を受けたと考えられる土師器が出土している。沢目遺跡では、古墳時代初頭の竪穴住居跡5軒があり、住居跡内から成川式土器、土師器が意図的に並べられた状態で出土した。遺物には、布留式土器をまねて作られた土師器等が出土している。下堀遺跡では竪穴住居跡7軒・溝状遺構が、荒園遺跡では笹貫式土器を伴う竪穴住居跡が検出され、うち1軒は焼失住居跡である。高久田A遺跡では1軒、永吉天神段遺跡では4軒の竪穴住居跡が見つっている。小牧遺跡でも花卉状を呈する竪穴住居跡などが検出されている。また、二子塚で採集されたと伝わる朝鮮半島製の鑄造鉄斧もある。町田堀遺跡では、南九州特有の地下式横穴墓が92基検出され、南九州では初めてとなる円形周溝を伴う例も確認されている。

古代

古代の大崎は日向国諸県郡に属し、その南端にあったと考えられるが、具体的な郡域等は不明である。この地域の古代相当期の考古学的様相も明らかになっていない。天神段遺跡では、掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑・炉跡、土師器・墨書土器・刻書土器、鍛造剥片が確認されている。永吉天神段遺跡の第1地点では、7棟の掘立柱建物跡や墨書土器・刻書土器、須恵器、焼塩土器、鉄製刀子、砥石などが発見されている。

中世

中世には各地で山城が造られ、この地域にも大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野卸城跡・竜相城跡・金丸城跡・梶谷城跡・遠見ヶ丘などがある。金丸城跡では、溝状遺構・土坑が検出され、青磁・白磁・青花・東播系こね鉢・瓦質土器・備前焼播鉢・天目碗など14世紀半ばから15世紀の遺物が出土している。集落跡としては、天神段遺跡で多くの掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓が検出され、中でも土坑墓1号からは、同安窯系青磁6点・青磁1点・青白磁1点、銅鏡1点・滑石製石鍋2点、鉄製品、木製品、土師器などの豊富な副葬品が出土している。下堀遺跡では、溝状遺構・畝跡とともに、青磁・青花・中国陶器などが発見されている。荒園遺跡では、掘立柱建物跡や土坑・溝などが検出され、土師器・東播系須恵器などとともに華南三彩も出土している。永吉天神段遺跡でも、湖州六花鏡、白磁碗、羽釜形のミニチュア土器や土師器皿・坏の副葬された土坑墓等が検出され、青磁・白磁・陶器壺などの輸入陶磁器や、東播系こね鉢・常滑焼・備前焼などの国内産陶器、楠葉型瓦器碗、滑石製石鍋、茶臼など多くの遺物が出土している。

近世

金丸城跡では、17世紀前半を主体とする陶磁器が多く出土している。多くの柱穴とともに、掘立柱建物跡7棟や水溜土坑(大型6基・小型2基)・炉跡16基・溝状遺構・墓などが検出されている。炉跡はいずれも意図的に壊され、炉周辺に炉壁を構成していたと思われる軽石や熱変粘土片が集中している場所も確認された。周辺で椀形鉄滓が出土していることから、この炉については鉄生産に関連する可能性が考えられる。肥前染付・瓦質土器・中国製陶磁器・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼、鉄製品・鉄滓など多くの遺物も出土している。天神段遺跡では、安永ボラ(1779年)を埋土とする畝畝状遺構や薩摩焼などが発見されている。細山田段遺跡では、近代まで続く溝状遺構や古道が検出されている。永吉天神段遺跡でも薩摩焼や肥前系染付などが出土し、道跡や寛永通宝を副葬した墓坑5基が検出されている。

3 照信院跡略史

和銅元(708)年に修験道開祖役小角の弟子である義覚がこの地にやってきて、飯隈山を開山し、新熊野三社権現を勧請し、本地阿弥・薬師・観音の三尊を安置したことが由来とされている。また、天平15(743)年に聖武天皇の勅願所の

宣旨を受け、神領の地一千石を支給されたとも伝えられている。中世以降も本山派修験の京都天台宗聖護院の末寺として、聖護院や近衛家などの中央勢力や、島津各代の藩主と深く関わり南九州最大の修験道場として君臨したとされている。しかし廃仏毀釈で飯隈山の寺院は破壊し尽くされ、長く続いた聖域は完全に失われてしまった。現在は、大部分が住宅地や農地になっており、飯福寺照信院本社跡に熊野神社が残る。

【参考・引用文献】

大崎町教育委員会

2001『立山B遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

2005『金丸城跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2005『下堀遺跡・大崎細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

2006『美堂A遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

2014『麦田下遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

2018『飯隈古墳群』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

鹿児島県歴史・美術センター黎明館

2022『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 神社調』

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2010『加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡A地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(154)

2012『宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(173)

(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

2015『天神段遺跡1』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(3)

2016『永吉天神段遺跡第1地点』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(8)

2017『永吉天神段遺跡第2地点(旧石器・縄文時代編)』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(13)

2017『荒園遺跡』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(12)

2018『町田堀遺跡2』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘報告書(20)

橋本達也

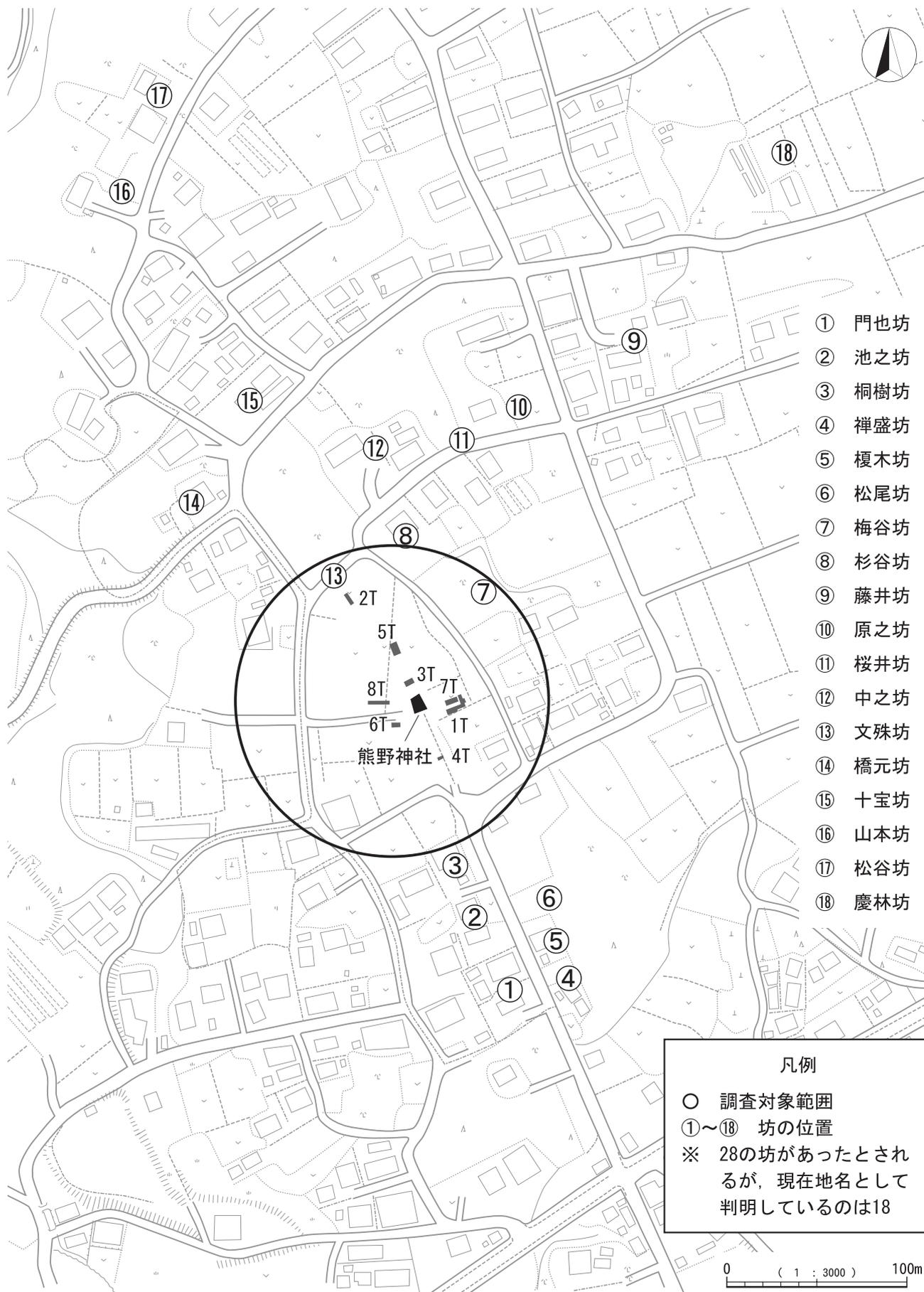
2010「古墳築造南限域の前方後円墳―鹿児島県神領10号墳の発掘調査とその意義」『考古学雑誌』第94巻第3号



第16図 照信院跡周辺遺跡 位置図

第6表 照信院跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡台帳番号	所在地	地形	旧跡	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
1	浜田	468	75	大崎町横瀬	砂丘			●				
2	大塚	468	48	大崎町横瀬	砂丘			●				
3	京ノ峯	468	77	大崎町永吉	台地	●	●	●				
4	梶井谷城跡	468	32	大崎町永吉	台地 沖積地		●	●		●		
5	栗之峰B	468	44	大崎町横瀬	砂丘			●				大崎町教育委員会発掘調査報告書(12)
6	横瀬古墳	468	35	大崎町横瀬	砂丘			●				大崎町教育委員会発掘調査報告書(9),(12)
7	栗之峰A	468	15	大崎町横瀬	沖積地		●					
8	穂園	468	28	大崎町横瀬	沖積地							
9	後迫	468	61	大崎町横瀬	砂丘	●	●	●	●	●	●	
10	神領遺跡群	468	21	大崎町神領・横瀬	台地		●	●		●		
11	田原A	468	20	大崎町神領	平地 沖積地		●					
12	沢目	468	1	大崎町益丸	海岸	●	●	●				
13	大園・濱牧・蓼池	468	59	大崎町益丸・神領	台地		●	●	●			大崎町教育委員会発掘調査報告書(10)
14	高尾B	468	60	大崎町神領	台地			●				
15	高尾A	468	12	大崎町神領・菱田	台地	●						
16	飯隈遺跡群	468	16	大崎町神領	台地		●	●		●		大崎町教育委員会発掘調査報告書(10),(11),(12)
17	照信院跡			大崎町神領	台地					●	●	本報告書
18	別府下	468	125	大崎町益丸・神領	平地			●				H17農政分布調査(町), H18確認調査(町)
19	田原B	468	27	大崎町益丸	台地			●				
20	王子脇	468	133	大崎町益丸	台地			●				H18農政分布調査(町)
21	大崎城跡	468	34	大崎町仮宿	台地					●	●	
22	胡摩ヶ崎城跡	468	33	大崎町仮宿	台地					●		
23	美堂B	468	50	大崎町胡摩	台地			●				
24	田中古墳群	468	25	大崎町井俣・神領	台地			●				
25	柿木	468	94	大崎町井俣	台地		●	●				
26	坂上	468	87	大崎町井俣	台地		●	●				
27	宮脇	468	88	大崎町井俣	台地			●	●			
28	堂園堀	468	89	大崎町井俣	台地		●					
29	平良宇都B	468	124	大崎町井俣	平地		●	●				H17農政分布調査(町), H18確認調査(町)
30	牛ヶ迫	468	82	大崎町神領	台地		●	●				H11農政分布調査
31	稲荷堀B	468	85	大崎町菱田	台地				●			H11農政分布調査
32	稲荷堀A	468	83	大崎町菱田	台地				●			H11農政分布調査(町), H25確認調査(町)
33	牧ノ上B	221	509	志布志市有明町蓬原	台地			●				
34	春日堀	221	423	志布志市有明町蓬原	台地	●		●				鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(32),(48)
35	清水ノ上	468	71	大崎町菱田	台地			●				
36	田尾下	221	465	志布志市有明町野井倉	台地				●			
37	平良上C	468	70	大崎町井俣	台地	●						
38	平良宇都A	468	123	大崎町井俣	平地			●				H17農政分布調査(町), H18確認調査(町)
39	平良上B	468	69	大崎町井俣	台地			●				H9農政分布調査
40	平良上A	468	68	大崎町井俣	台地	●		●				H9農政分布調査
41	井俣和田	468	122	大崎町井俣	平地			●				
42	井俣牧	468	86	大崎町井俣	台地		●	●				H11農政分布調査
43	長田	221	366	志布志市有明町原田	台地	●	●	●		●		H10確認調査, H11本調査
44	金丸城跡	468	30	大崎町井俣	台地	●		●	●	●	●	H10~12発掘調査(町)
45	大塚	221	504	志布志市有明町原田	台地	●		●				H10農政分布調査
46	原田古墳群	221	386	志布志市有明町原田	台地			●				
47	中沖B	468	84	大崎町菱田	台地		●	●				H11農政分布調査



- ① 門也坊
- ② 池之坊
- ③ 桐樹坊
- ④ 禅盛坊
- ⑤ 榎木坊
- ⑥ 松尾坊
- ⑦ 梅谷坊
- ⑧ 杉谷坊
- ⑨ 藤井坊
- ⑩ 原之坊
- ⑪ 桜井坊
- ⑫ 中之坊
- ⑬ 文殊坊
- ⑭ 橋元坊
- ⑮ 十宝坊
- ⑯ 山本坊
- ⑰ 松谷坊
- ⑱ 慶林坊

凡例

○ 調査対象範囲

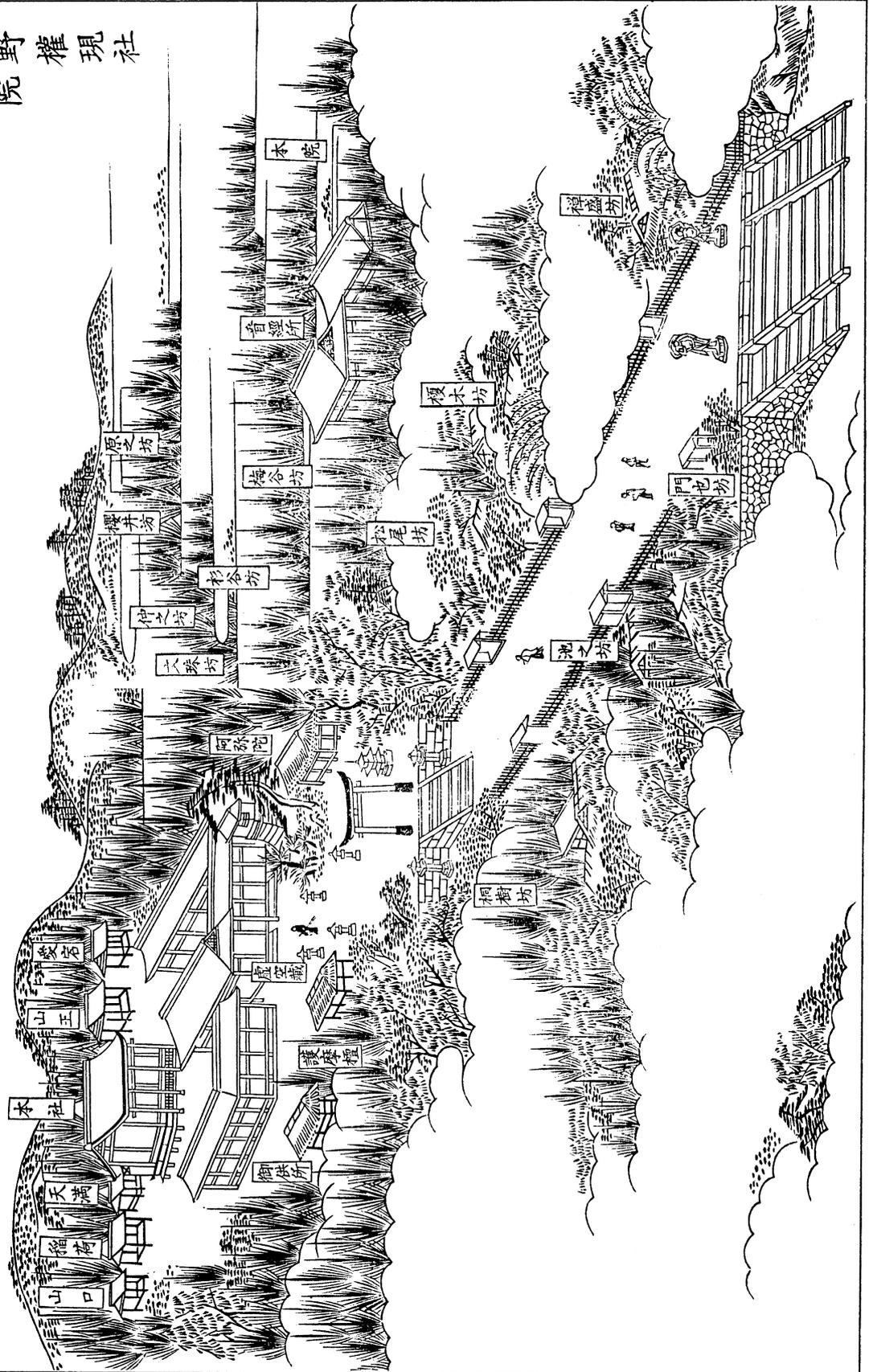
①～⑱ 坊の位置

※ 28の坊があったとされるが、現在地名として判明しているのは18

0 (1 : 3000) 100m

第17図 照信院跡調査対象範囲図

新熊野權現社
照倍院



第18図 照倍院跡三国名勝図会 四卷

第2節 調査の方法と基本層序

1 調査の方法

本年度の発掘調査は、令和4年6月1日～令和4年6月28日の期間に、調査対象表面積10,000㎡を対象に実施した。(第17図)

本遺跡の調査区割(グリッド)は設定せず、基準杭2点S001(-10,10,31.938), S002(-10,15,32.102)を熊野神社鳥居付近に任意に設定し、その後、S003(-13.994,45.901,33.261), S004(-19.202,55.472,33.365), S005(4.162,63.24,33.522)の3点を設定した。なお、標高値は、国土地理院基準点閲覧サービスを利用して、熊野神社参道階段下の基準点コード:L050000002386・等級種別:準基準水準点・基準点名:準基準2386・標高:28.8918mを利用した。

調査は用地境界や法面などでは安全上の措置として、約2m程度内側に控えてトレンチを設定し、表土は重機による掘削と、その後包含層では人力による掘り下げ作業を実施した。トレンチ位置は表面踏査を行い、『三国名勝図会』に描かれた新熊野権現・照信院の絵図を参考に設定した。

包含層中の遺物は、基本的に層位を確認して一括での取り上げを行ったが、必要に応じてトータルステーションによる取り上げも行った。遺構は検出面での写真撮影と、トータルステーションと平板での平面実測・調査のみを行った。一部の遺構(SD1・SP3・SL1)については、検出状況の写真撮影の後、一部掘り下げを行い、実測を行った。検出での実測の縮尺は、遺構の広がりや大きさに応じて、縮尺5分の1と10分の1,40分の1とした。

2 遺構の検出と認定

各遺物包含層上面を検出した際、精査を行い、土色及び土質の違いから遺構の有無を確認した。また、遺構内外で異なる土の境界をたどり、平面的に遺構の輪郭(平面プラン)を確定していった。

その後、SD1・SP3・SL1は主軸を確認し、土層確認用のベルトを設定し、遺構の掘り下げを行った。なお、SP3は完掘まで調査を行った。その際、埋土の色・質・硬さなどの違いを比較し掘り下げた。さらに、遺構を検出した層や埋土状況、遺構の形態、遺構内出土遺物などの情報から遺構の帰属時期の検討を行った。確認調査のため、ほとんどの遺構は平面のみ調査を行って、埋め戻してある。

3 基本層序

今回の調査で、I層(表土)からV層まで確認できた。調査時は、Ia層は現代の耕作土で、それ以前の耕作土をIb層とした。II層が中世から近世相当層の可能性が高いが、調査ではほとんどが削平を受けていた。III層は古墳時代の土器が多く出土する傾向があり、古墳時代相当層の可能性が高い。IV層は黒色土に池田降下軽石が混じる層で、無遺物層である。V層は、アカホヤ火山灰層で、V層上層には造成土①～③が確認されており、一部V層の下層にあたる部分で、平坦面を構成していることが確認できた。このことから、照

信院はV層を基板層として整地している可能性が高い。造成土①～③が確認されており、造成土①は1トレンチから、II～III層にシラス混じりで版築のような硬化を一部確認できた。造成土②は、多量の小礫が含まれており、溝状遺構(SD1・2)の内側だけに検出され、玉砂利のような印象を受けるものである。造成土③は3トレンチから確認され、溝状遺構(SD3)の埋土と近いものであるため、今後、溝状遺構の埋土の可能性があり、検討を要するものである。なお、Ib層は、後述で詳細は述べるが、造成土の可能性もある。

第7表 照信院跡基本層序

層	色調	層厚(cm)	備考
I a	灰白色土	20	表土
I b	灰黄褐色土	0～15	
II	灰黄褐色土	0～5	中世～近世相当層
III	黒褐色土	0～30	
IV	暗褐色土	10	池田降下軽石含
V	黄褐色土		アカホヤ火山灰層
造成土①	黒褐色土	10	シラスを多く含む
造成土②	灰黄褐色土	10～15	多量の小礫を含む
造成土③	にぶい赤褐色土	8	小礫を含む

第3節 調査成果

表面積10,000㎡に8つのトレンチ(164㎡)を設定して、調査を実施した。トレンチの位置については、『三国名勝図会』(第3図)を参考に、新熊野権現の本社周辺に設定した。トレンチごとの調査成果について、後述する。遺構の検出状況から1トレンチと7トレンチを先に記載し、その後順を追って記載していく。

1 1トレンチ(第20図)

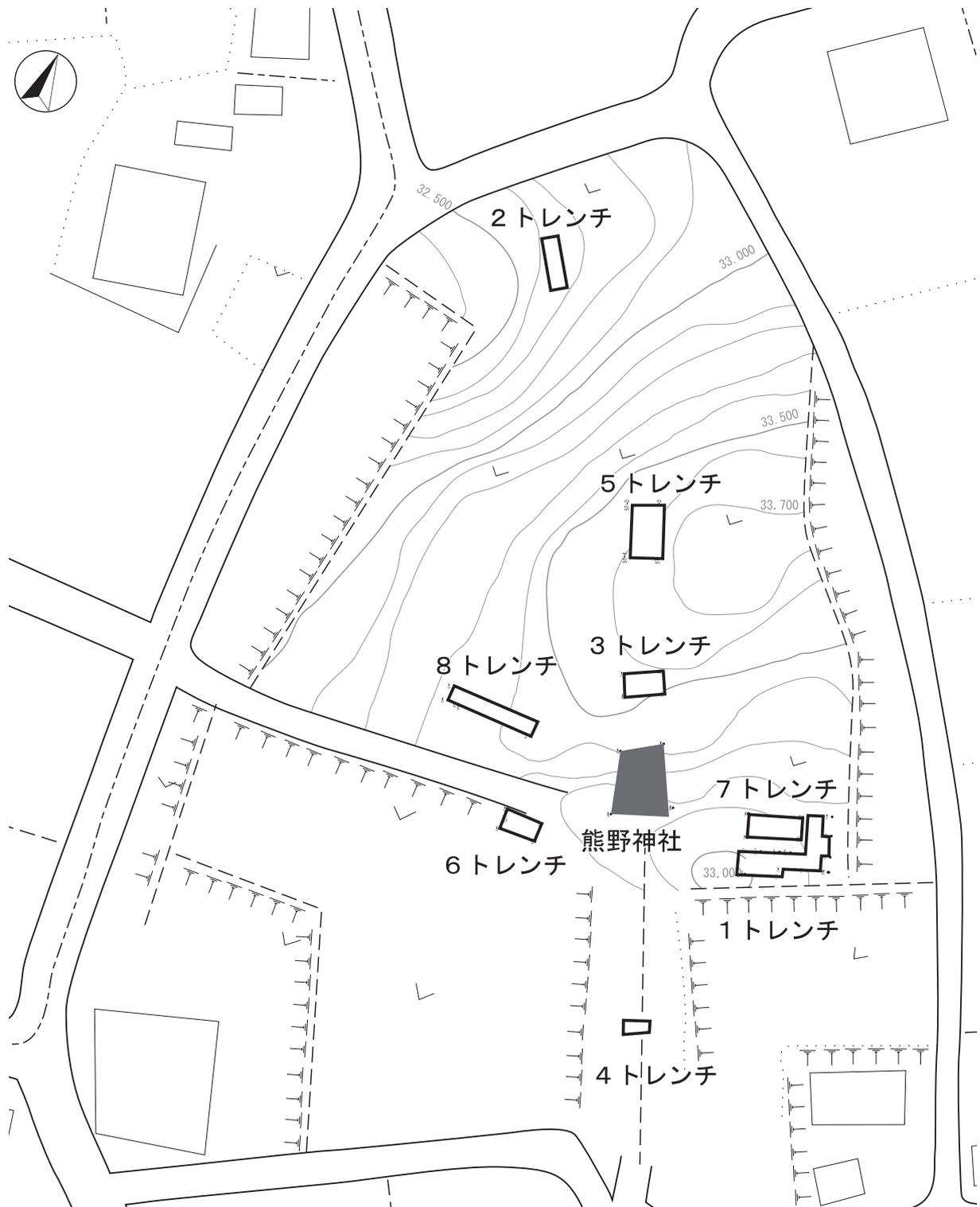
調査区の南東側、第18図では回廊にあたる付近にL字状にトレンチを設定した。遺構や造成土の確認のため、調査進捗に合わせて、トレンチを拡張していき、最終的に、トレンチの大きさは、東西に長さ約11m・幅2～3m、南北方向に長さ約7m・幅2～3mとなった。

下層が不明だったため、表土から人力にて掘り下げを行った。トレンチ西側で、表土直下から造成土①が検出され、掘り下げると地形の凹みを埋めるように小礫を多量に含んだ造成土②を検出した。

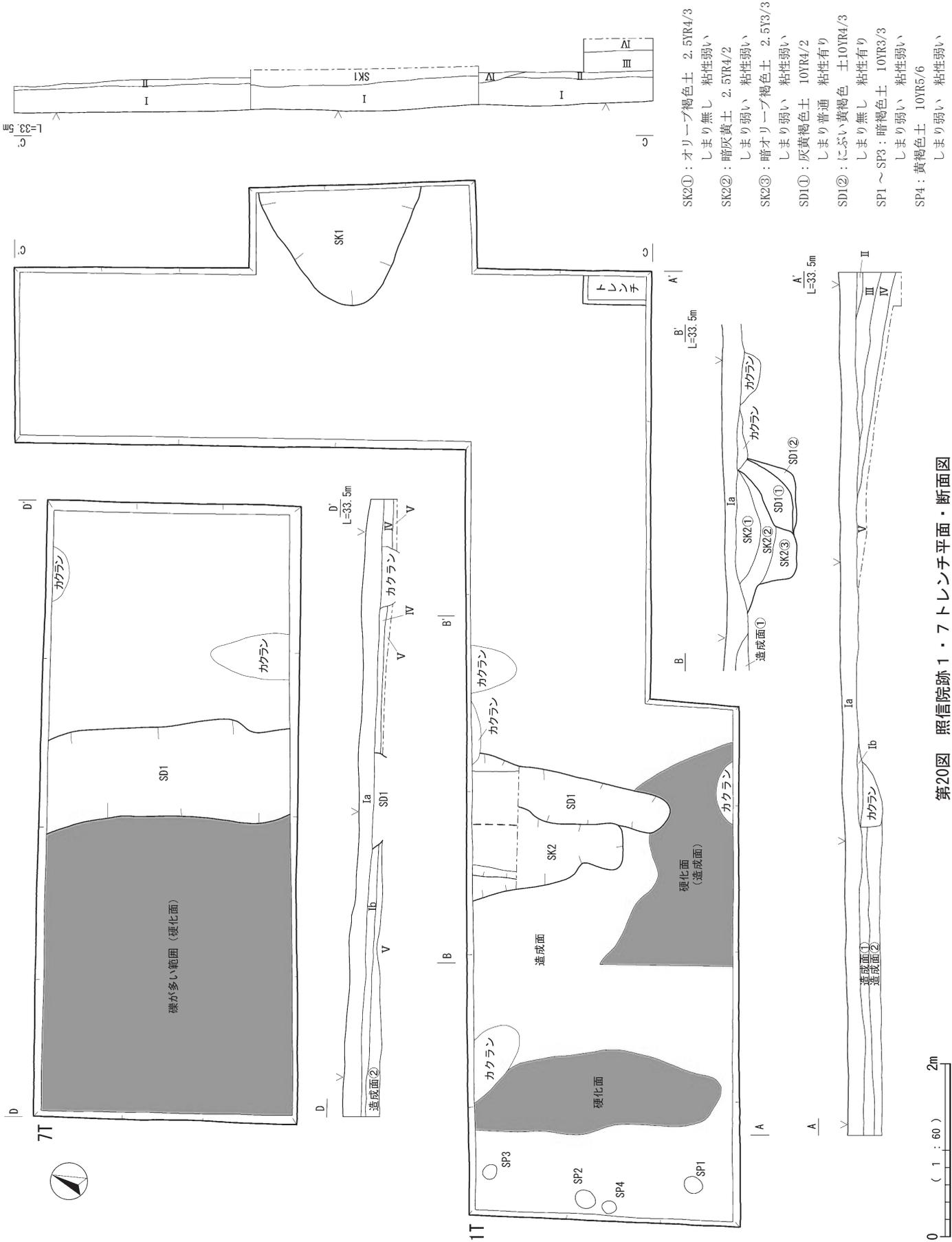
(1) 遺構

遺構は、溝状遺構1条と土坑2基、ピットを4基検出した。そのうち、造成土②とほぼ同じレベルのV層上面で、SD1(溝状遺構)とSK2(土坑)、ピット1～4(SP1～4)を検出した。

1トレンチ及び7トレンチで検出した溝状遺構(SD1)は、南北方向に延びており、長さ約200cm・幅約50cm・深さ約60cmである。床面は平坦面を呈しており、壁は比較的緩やかに立ち上がる。土坑2(SK2)は、SD1を削平しており、平面



第19図 照信院跡トレンチ配置図



第20図 照信院跡1・7トレンチ平面・断面図

形は隅丸長方形で、長さ約175cm・幅100cm・深さ約60cmである。床面は平坦面をしており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。また、トレンチ東側では、土坑1(SK1)を検出した。楕円形を呈しており、半分はトレンチ外へ伸びている。長さ約185cm・幅約140cmで、黒色土にアカホヤのブロックが混じる。一帯は、飯隈古墳群で、照信院跡とは、関係のない遺構の可能性が高い。遺物は確認されなかった。SP1～4は、整地したと考えられる硬化したV層上面で検出され、径が約20cmで暗褐色土から黄褐色土の埋土である。硬化したV層の面で検出されていることから、建物の柱穴の可能性もある。

(2) 遺構内出土遺物 (第21図)

ア 土師器

30～33は、小皿である。30は、底部から体部にかけて一旦曲線的に立ち上がった後、体部は直線的に鋭く立ちあがる。また底部内面中央が凹む。色調は白色系である。底部切り離しはヘラ切りと思われる。31は、底部から体部が直線的にやや鋭く立ちあがる。色調は白色系である。底部は摩耗している。32は、底部から体部が曲線的に立ちあがる。色調は白色系である。底部は摩耗している。黒い煤が付着していることから灯明皿として用いられていたものか。33は、底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて、曲線的に立ち上がる。また、底部内面中央が凹む。底部切り離しは回転系切りである。色調は、白色系である。

イ 陶磁器

34は、肥前系の碗で、外面に草花文が描かれる。年代は18世紀後半とされる。35は、SD1から出土した龍門司の碗である。白化粧土に透明釉がかかる。高台内面が露胎し、見込みに蛇ノ目釉剥ぎがみられる。年代は18世紀前半である。36は、龍門司系の灯明皿で見込みに重ね焼きの際の砂目(ごま目)が残る。37は、加治木・始良系の瓶である。内面と外面に黒釉がかかる。年代は18世紀とされる。

ウ 鉄製品

38, 39は、鉄釘とみられる。いずれも錆が付着している。

(3) 1トレンチ出土遺物 (第22図)

ア 土師器

40は、表土から出土した小皿で焼成の緻密さから近世のものとして推定される。色調は橙色系である。底部切り離しは回転系切りである。

イ 陶磁器

41は、表土から出土した龍泉窯系の青磁碗の破片で、外面に鎬連弁文が見られる。時期は13世紀後半から14世紀前半と想定される。42は、表土から出土した加治木・始良系の筒型碗もしくは瓶である。見込みに灰かぶりがみられる。年代は18世紀後半とされる。43は、造成土②から出土した肥前系の皿で、見込みに梅花文が描かれる。また畳付に釉剥ぎが見られる。時期は19世紀以降とされる。

ウ 瓦

44は、Ib層から出土した平瓦で、鹿児島城下で出土する瓦

の胎土に似通う。近世のものとして推定される。瓦の出土は3点と光台寺跡と比べて少ない。

2 7トレンチ (第20図)

SD1の検出を目的として、1トレンチ北側に約7m×約3mの東西方向を軸とするトレンチを設定した。1トレンチ検出のSD1北側に、長さ約300cm・幅約100cmの平面プランを確認した。また、SD1の西側には、小礫を多量に含む造成土②や遺物を検出し、SD1の東側ではほとんど小礫を含む層を確認できず、遺物の出土もなかったことから、明らかにSD1境の様相が違うことが確認できた。

(1) 遺構

7トレンチにおいて、1トレンチ検出のSD1北側に、長さ約300cm・幅約100cmの溝状遺構(SD1)の平面プランを確認した。また、SD1を境に、西側(熊野神社側)には、小礫を多量に含む造成土②を検出し、薩摩焼や土師器などの遺物も多く出土している。

(2) 遺構内出土遺物 (第23図)

45は、土師器の坏で、C類大型に分類される。年代は14世紀前半と推定される。

(3) 7トレンチ出土遺物 (第24図)

ア 土師器

46は、7トレンチII層から出土した小皿で、C類中型に分類される。底部から口縁部にかけて曲線的に立ち上がり、口唇部は分厚い。また、やや上げ底である。年代は14世紀中頃から14世紀後半のものとして推定される。底部は回転系切りである。47は、7トレンチII層から出土した小皿で、C類小型に分類される。底部内面中央が盛り上がり、色調は白色系である。14世紀後半から15世紀初頭のものとして推定される。底部は摩耗している。48は、7トレンチ表土から出土した小皿で、焼成の緻密さから近世の土師器と推定される。底部から口縁部にかけて曲線的に立ち上がり、口唇部に一部煤が付着している。色調は白色系である。底部切り離しは回転系切りである。

イ 陶磁器

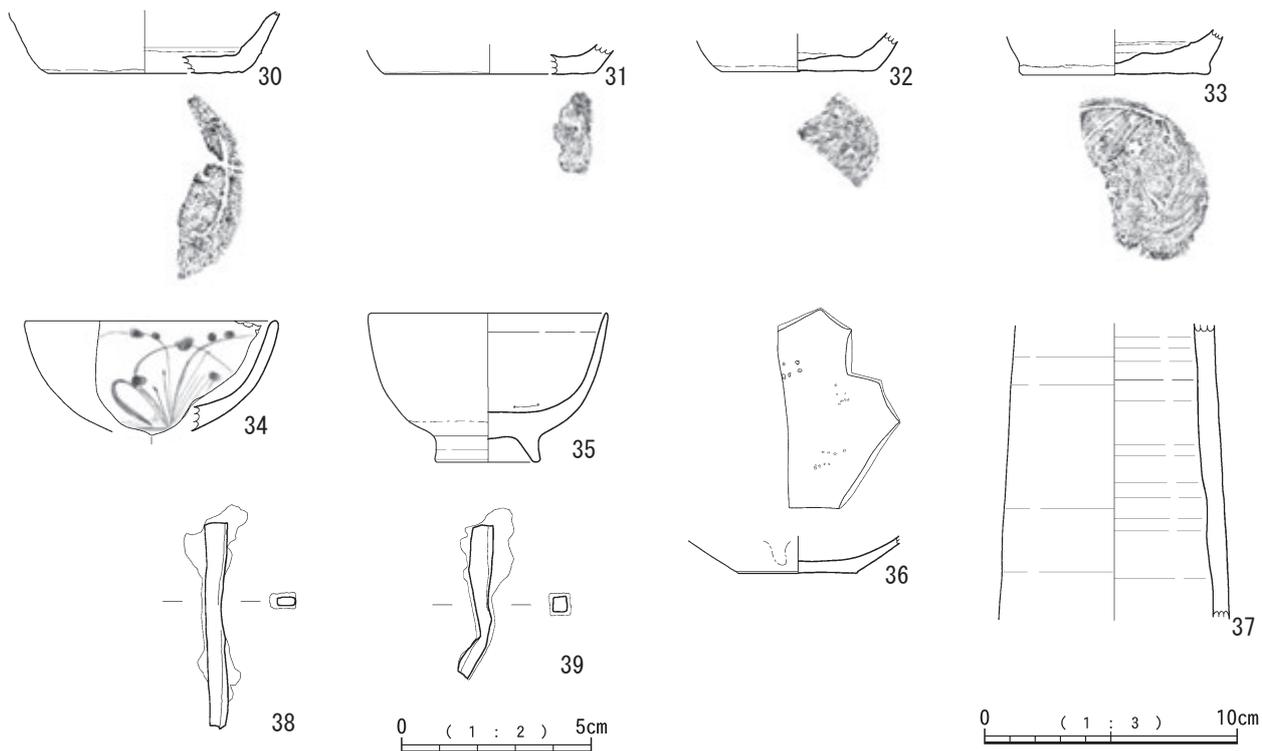
49は、表採された龍泉窯系の青磁碗の破片で、外面に鎬連弁文が見られる。時期は13世紀後半から14世紀前半と推定される。50は、表土から出土した苗代川系の土瓶である。年代は近代である。

3 2トレンチ (第25図)

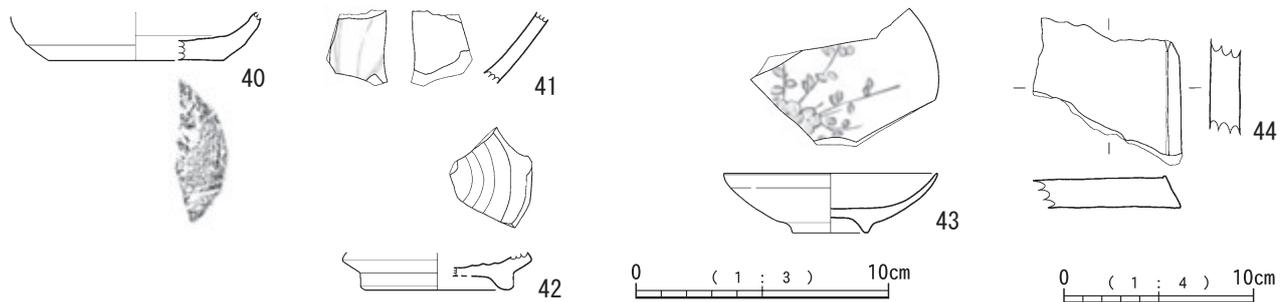
調査区北側、第3図では、愛宕・山王・天満などの末社が鎮座している箇所に、約7.5m×約2mの北西から南東を軸とするトレンチを設定した。表土直下は、トレンチ北側でIII層、南側でIV層を検出した。遺構の検出や遺物・小礫の出土がなかったため、10～20cm掘り下げたところで調査を終了した。

4 3トレンチ (第26図)

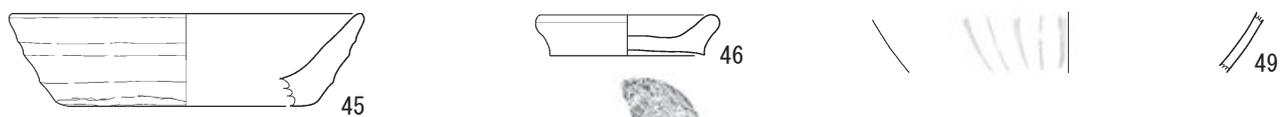
第3図の本社位置と現在の熊野神社の位置が変わっていないと推定して、熊野神社裏側に、約5m×約3.2mの東西方



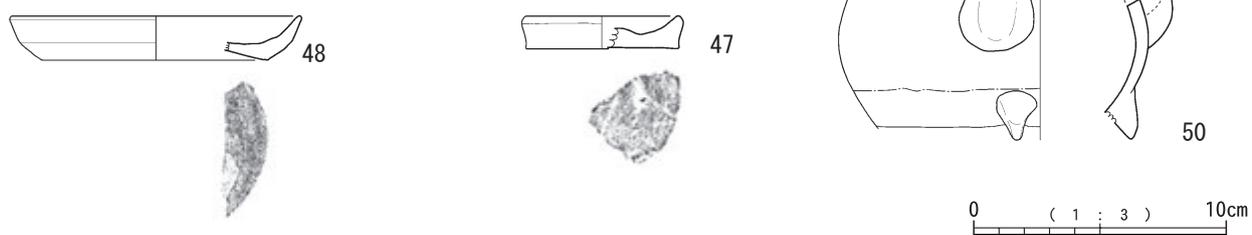
第21図 1 トレンチ溝状遺構内出土遺物



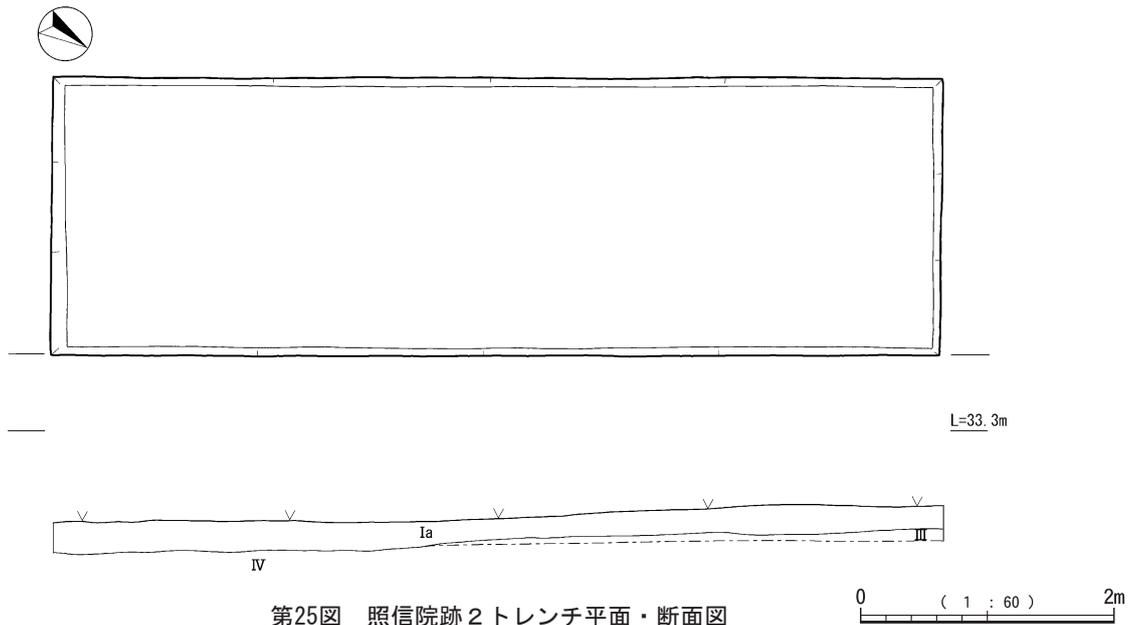
第22図 1 トレンチ出土遺物



第23図 7 トレンチ溝状遺構内出土遺物



第24図 7 トレンチ出土遺物



第25図 照信院跡2トレンチ平面・断面図

向を軸とするトレンチを設定して調査を行った。熊野神社隣接地である裏手も検討したが、耕作者の車両出入りとなっていたため、神社から約7m離れた箇所とした。

表土から60～70cm下層で、V層の面を検出し、その上層には、造成土②と造成土③を検出した。なお、造成土③は東側でV層の凹みを埋めるように厚く堆積しているが、後述するSD 3の埋土の可能性もある。また、3トレンチからは、I b層とした部分から多くの遺物が出土しており、特質するものとして、懸仏の一部である華瓶(けびょう)が出土した。そのため、調査時は、表土として処理したI b層は、近世時の造成土の可能性が高い。

(1) 遺構

遺構は、V層上面で、土坑3(SK 3)と溝状遺構2(SD 2)、ピット5(SP 5)を検出した。

SK 3は平面が不定形を呈しており、長さ約390cm・幅約210cmである。寛永通宝や薩摩焼・土師器などが出土しており、廃仏毀釈時の廃棄土坑の可能性もある。また、その東側にはSK 3②として、長楕円形を呈して、長さ約140cm・幅約40cmの土坑を検出した。埋土がSK 3に類似しており、SD 2を削平している。SD 2は、南北方向から南東方向に延びており、長さ約170cm・幅約50cmである。埋土は造成土③に類似しており、遺物は少量出土している。SP 5は径20cmで、埋土はSK 3に類似したにぶい赤褐色土である。3トレンチの遺構については、平面のみの調査で終了している。

(2) 遺構内出土遺物(第27図)

ア 陶磁器

51は、加治木・始良系(元立院窯)の仏花器で胎土は灰褐色。黒釉が外面と内面の上部にかかる。年代は18世紀後

半と推定される。

イ 古銭

52及び53は、寛永通宝である。

(3) 3トレンチ出土遺物(第28図)

ア 土師器

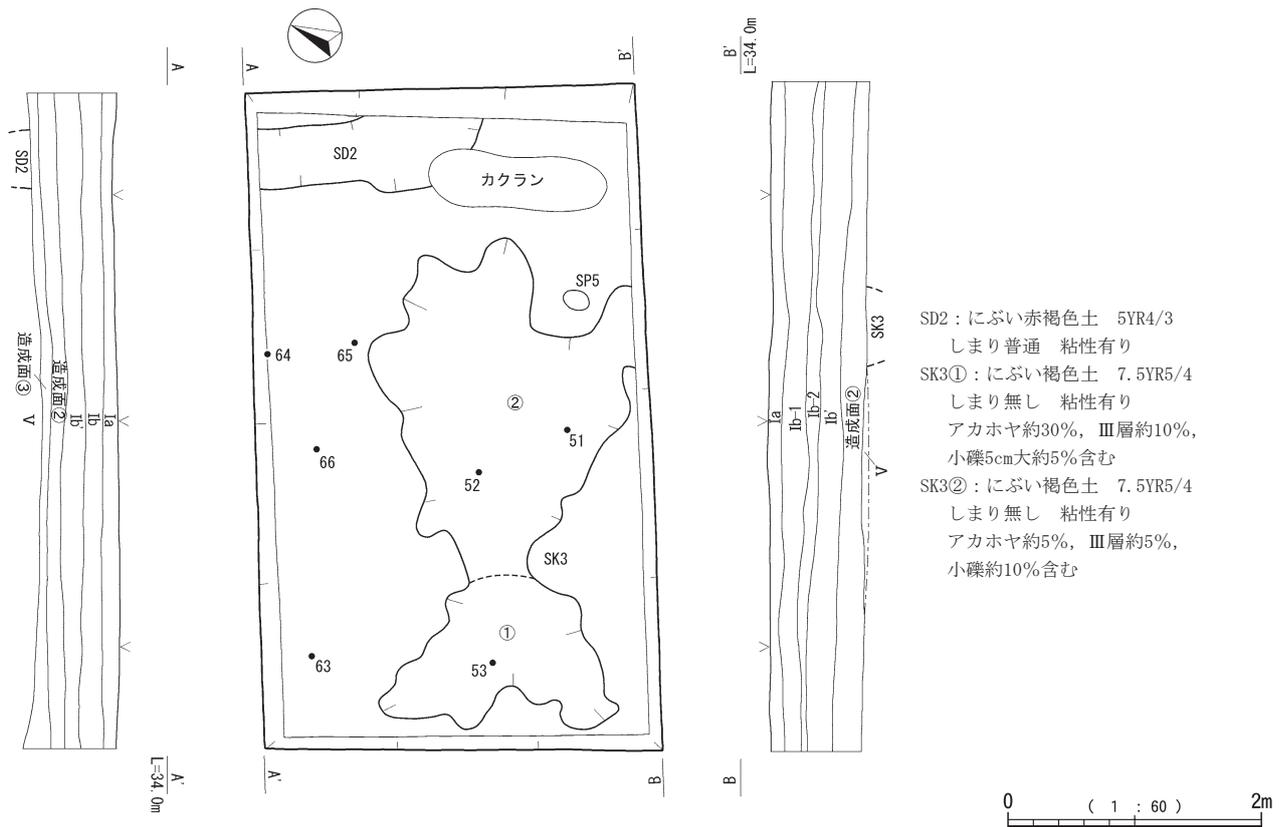
54は、表土から出土した小皿で、C類小型に分類され、底部から体部が鋭く立ちあがる。14世紀後半～15世紀初頭のもものと推定される。色調は、白色系である。底部は摩耗している。55は、表土から出土した小皿で底部から体部がゆるやかに立ちあがる。色調は橙色系である。底部切り離しは回転糸切りである。56は、表土から出土した小皿で焼成の緻密さから近世のもものと推定される。

イ 陶磁器

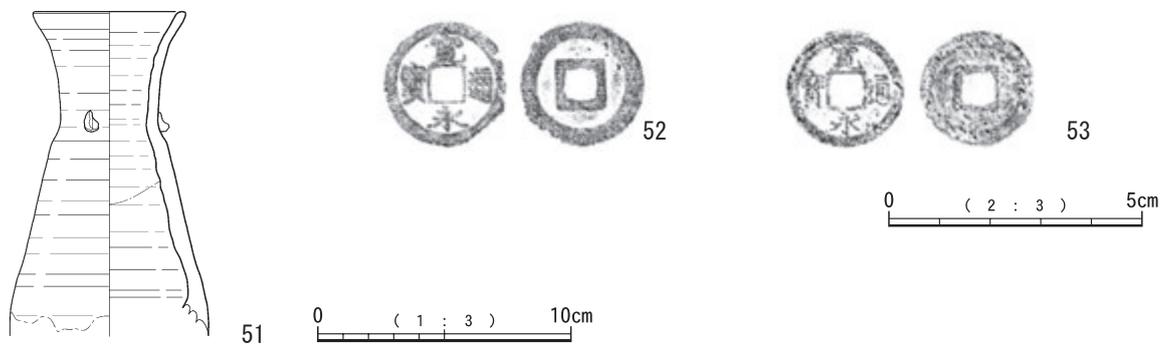
57は、3トレンチI b層から出土した肥前内野山系の香炉の口縁部である。口唇部が釉剥ぎされている。銅緑釉が外面にかかる。年代は18世紀初頭と推定される。58は、3トレンチI b層から出土した龍門司の線香立てで黄褐色の胎土に褐釉がかかる。年代は18世紀前半と推定される。59は3トレンチ表土から出土した肥前内野山系の香炉である外面に銅緑釉がかかる。年代は18世紀初頭と推定される。

ウ 青銅製品

60は、表土から出土した懸仏の一部である華瓶とみられる。2つの穴が開いているのは、鏡像と接合するための鉾を打つためと思われる。懸仏とは、銅鏡や鏡に模した鏡板に線刻や彩色で仏像や神像を表したものを鏡像といい、鏡板に立体的な仏像・神像を取り付けたものを懸仏という。これらは「御正体」とよばれ、掛け吊して礼拝の対象とされた。鏡像の発生と展開には、密教における観想や神仏習合による本地



第26図 照信院跡3 トレンチ平面・断面図



第27図 3 トレンチ土坑内出土遺物

垂迹思想などが関わっている。密教的主題の鏡像に始まり、平安時代を通じて像が立体化していき、鎌倉時代以降は懸仏が主流となっていく。青銅製品61と62は、寺院の建築や装飾などに使われた鋳とみられる。

エ 古銭

63～67は、銅銭の寛永通宝である。そのうち、66及び67は、裏面に「文」の字があり、文銭である。

オ 鉄製品

68～71は、鉄釘とみられる。いずれも錆が付着している。

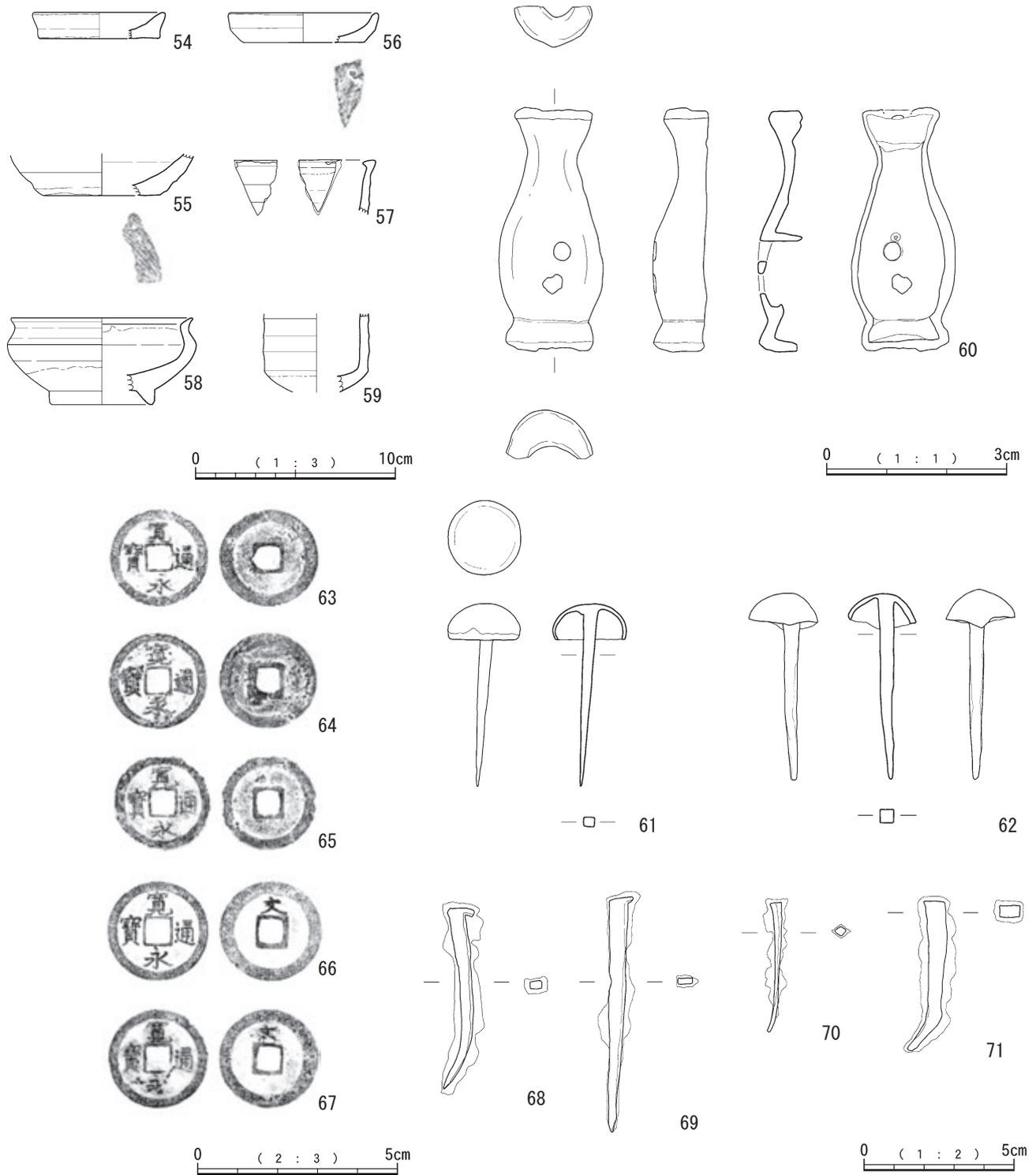
5 4 トレンチ (第29図)

現在の参道にあたる部分に、約3m×約2mの東西方向を軸とするトレンチを設定して調査を行った。参道のため、直下に礫敷きや硬化面があることを想定して、掘り下げを行い、表土から30cm下層でⅢ層を、45cm下層でⅤ層を確認した。

(1) 遺構

遺構は、土坑1基とピットSP 2基を検出した。土坑4 (SK 4) とピット6 (SP 6) はⅢ層上面で、ピット7 (SP 7) Ⅴ層上面で検出した。

SK 4は平面が不定形で、長さ約80cm・幅約70cmである。SP 6は径約50cmでやや楕円形を呈している。埋土は、SK 4、



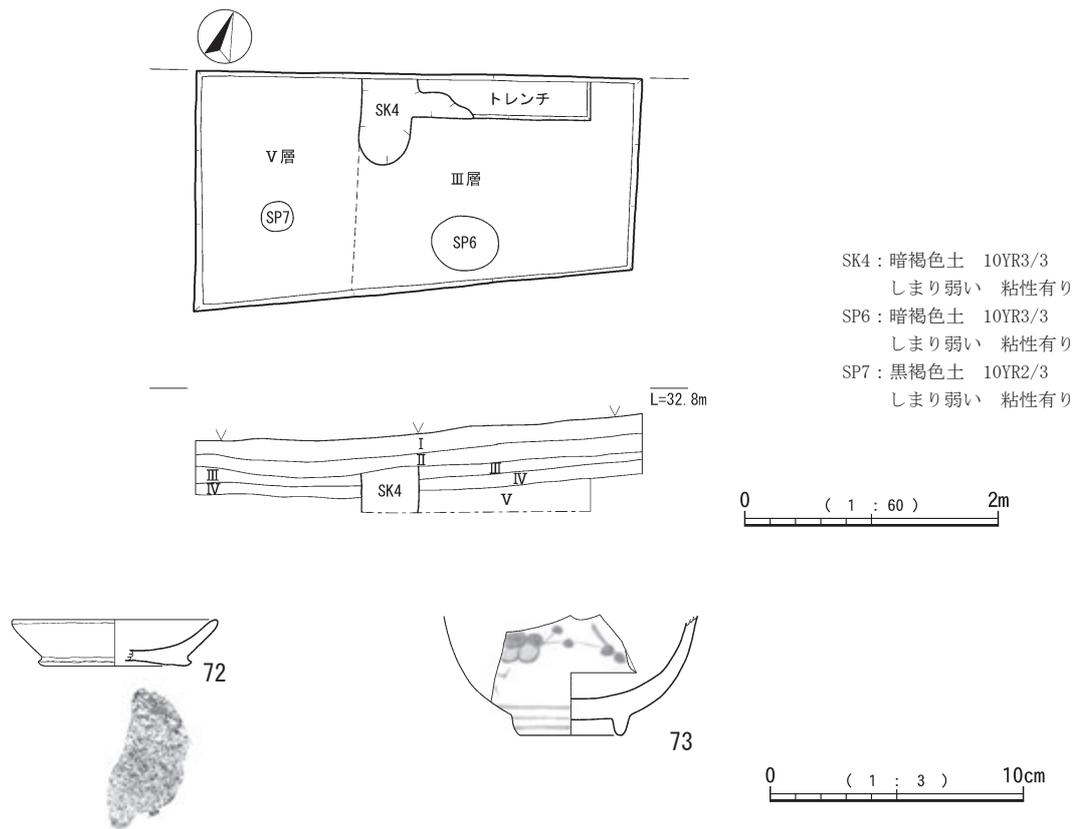
第28図 3 トレンチ出土遺物

SP 6とも類似しており、暗褐色土で、5～10cmのアカホヤブロックを含んでいる。SP 7は、径約30cmで円形を呈しており、埋土状況や遺物の出土もなかったことから、照信院跡とは時期の違う遺構と判断した。なお、いずれの遺構も平面のみの調査で終了した。

(2) 4 トレンチ出土遺物 (第29図)

ア 土師器

72は、4トレンチ表土から出土した小皿で、B類大型に分類される。底部下端が張り出し、底部から体部にかけて曲線的に立ちあがる。また上げ底である。色調は橙色系である。年代は13世紀後半から14世紀後半のものと推定される。底部切り離しは回転糸切りである。



第29図 照信院跡4 トレンチ平面・断面図及び出土遺物

イ 陶磁器

73は、4トレンチの表土から出土した肥前系の丸碗で、外面に梅花文が描かれている。畳付に釉剥ぎ、見込みに蛇ノ目釉剥ぎがみられる。年代は18世紀後半と推定される。

6 5 トレンチ (第30図)

耕作地を踏査した後、表面で3～5cmの礫が多いところから少なくなるところの付近に、約7.2m×約4.3mの南北方向を軸とするトレンチを設定した。

(1) 遺構 (第31図)

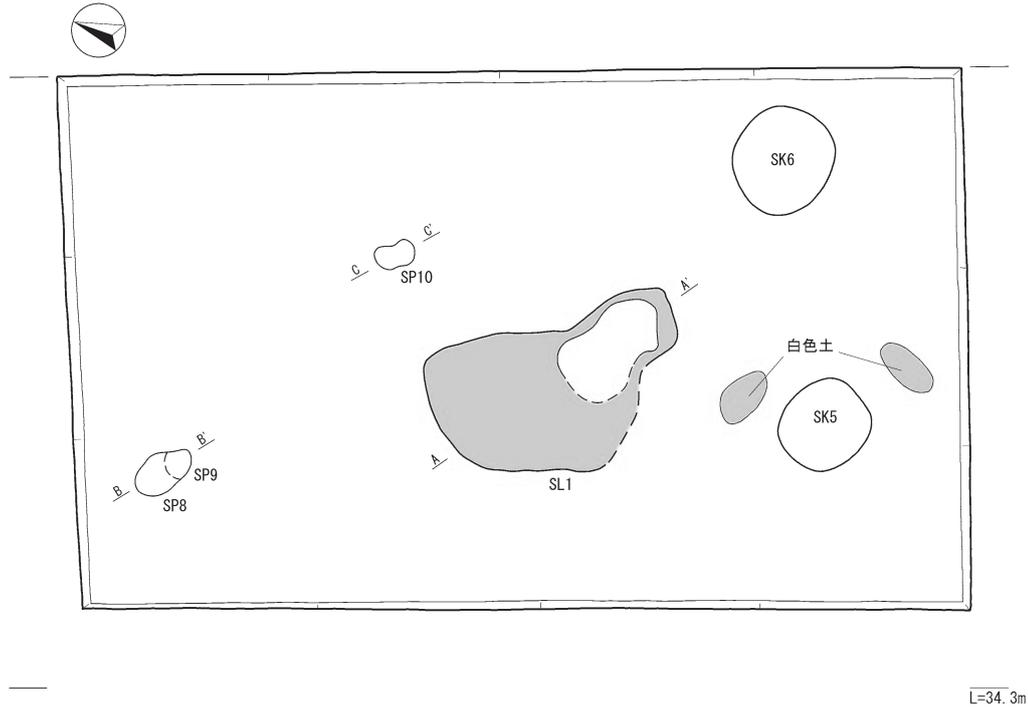
遺構は、かまど状遺構を1基、ピットを3基、土坑2基を検出した。

かまど状遺構 (SL 1) は平面が瓢箪状を呈しており、長さ206cm・幅120cm、そのうち、かまどにあたりと推定される部分は長さ91cm・幅46cmである。かまどの壁にあたる部分は、厚さ7cmあり、固い白色土で構築されている。焼土域や炭化物の集中は検出できなかったが、遺物は、かまど部分にあたる箇所から、面取された軽石製品が2つ出土している。壁の厚みと掘り込みの深さが判明した時点で、調査を終了している。

ピット8・9 (SP 8・SP 9) は、切り合って検出され、平面観察で、SP 9が新しいと判断した。SP 9は径約20cmを呈して

おり、3～5cm大の小礫が10点ほど確認できた。SP 8は径約30cmのやや楕円形を呈していると推定され、小礫30点ほどが確認できる。それぞれ下層にも小礫があると考えられる。肉眼観察した限り小礫に文字等は確認できなかった。平面のみの調査で終了した。ピット10 (SP10) はSP 8・9の東側約200cmのところ検出した。平面は瓢箪状を呈しており、長さ約30cm・幅約20cm・深さ約18cmである。底面は尖った形状をしており、断面形は片葉研状を呈している。ピットの中には、3～5cm大の小礫が103個詰められていた。(図版11 (下)) 粘土等で版築や地業のようなものは見られなかった。なお、取り上げた礫を赤外線観察したが、墨等で文字を書いた礫は発見できなかったが、SP 8～10は一字一石経に類する遺構の可能性はある。

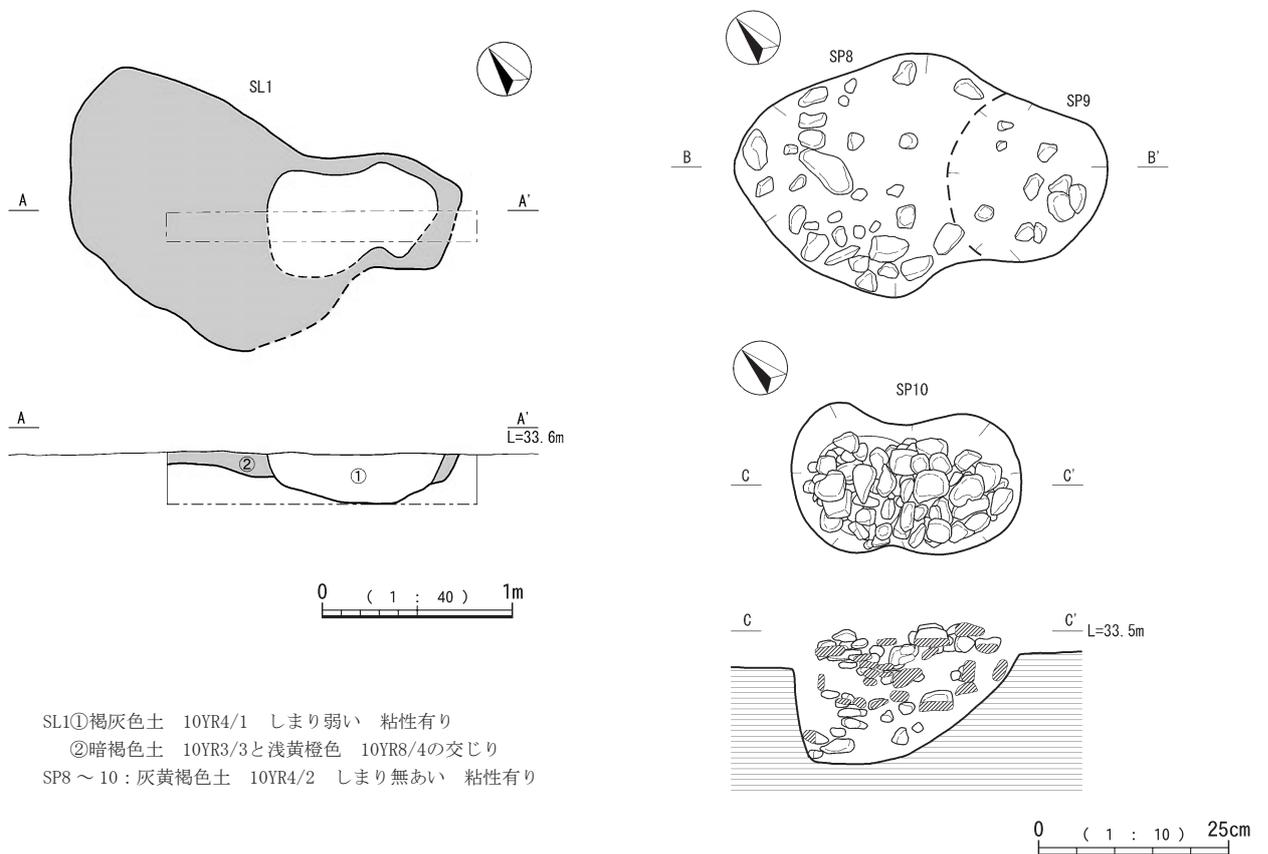
土坑5 (SK 5) は円形を呈しており、径が約80cmである。その東側では、土坑6 (SK 6) が検出され、楕円形を呈しており、約82cm×約80cmである。SK 5とSK 6の芯々距離は220cmで、掘立柱建物の柱穴の可能性の残る遺構である。平面のみの調査で終了した。



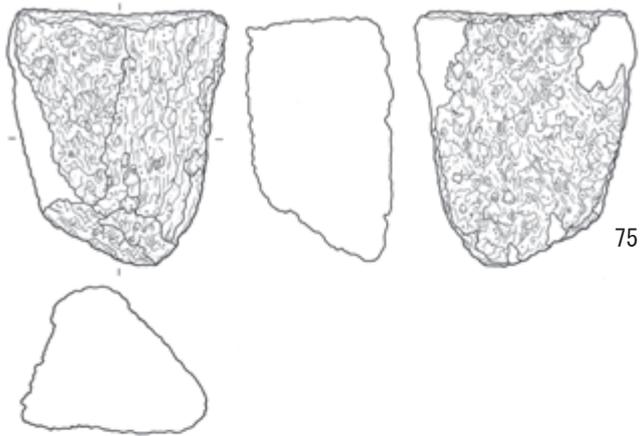
SK5, SK6 : 灰黄褐色土 10YR4/2
しまり普通 粘性やや有り

第30図 照信院跡5トレンチ平面・断面図

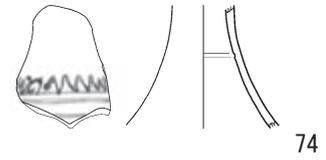
0 (1 : 60) 2m



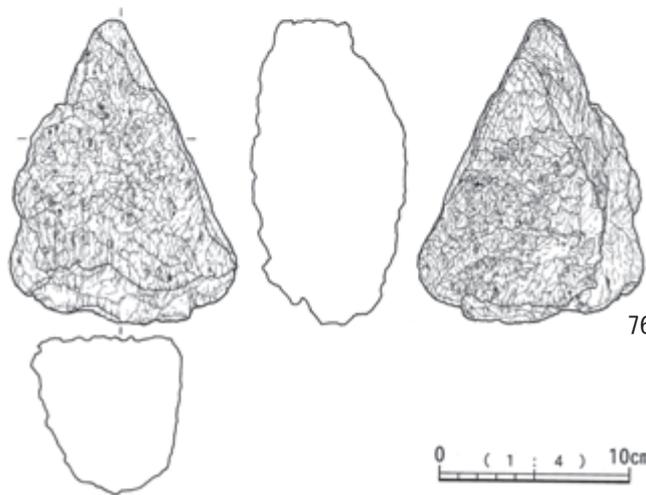
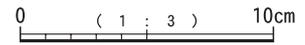
第31図 照信院跡5トレンチ内かまど状遺構・ピット



75



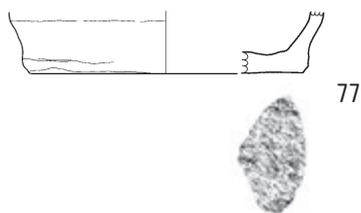
74



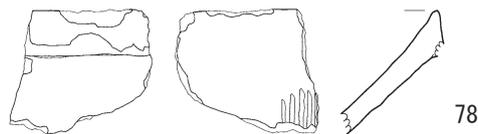
76



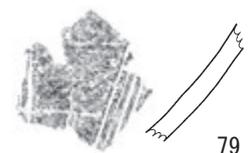
第32図 5トレンチかまど状遺構内出土遺物



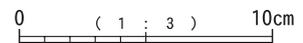
77



78



79



第33図 5トレンチ出土遺物

(2) 遺構内出土遺物 (第32図)

ア 陶磁器

74は、SL 1から出土した肥前系の徳利の破片である。胎土は灰白色で透明釉がかかる。年代は18世紀代とされる。

イ 軽石製品

かまど部分にあたる箇所から、面取された軽石製品75及び76が出土している。最大長は75は13cm、76は約16cmである。

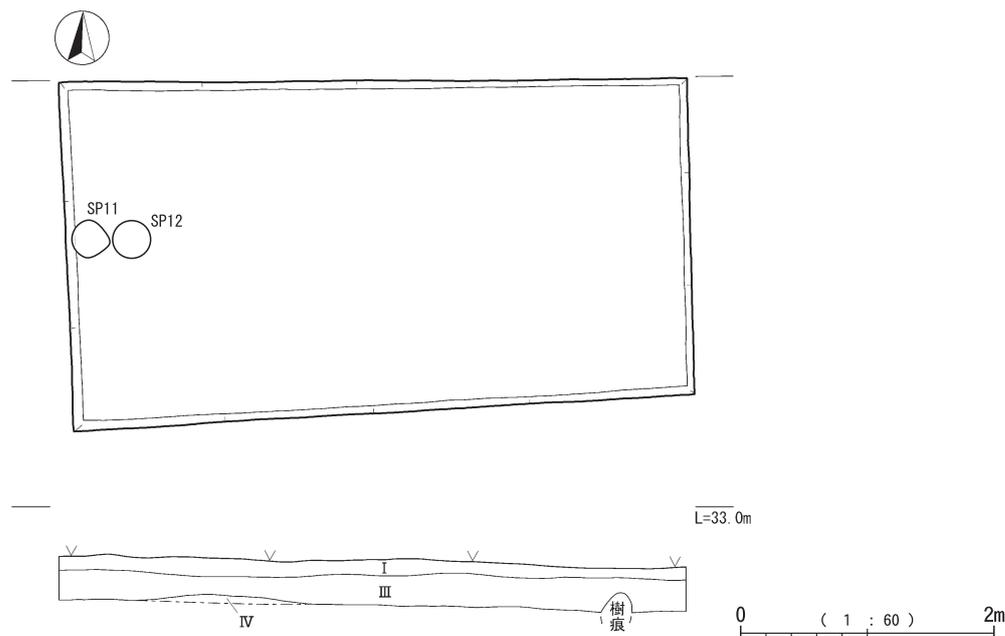
(3) 5トレンチ出土遺物

ア 土師器

77は、表土から出土した坏で、底部下端がやや張り出し、底部から体部にかけて直線的に立ちあがる。色調は、橙色系で年代は不明である。底部切り離しは回転糸切りである。

イ 陶磁器

78は、5トレンチ表土から出土した備前の播鉢である。79は、表採された備前の播鉢である。2点ともに、年代は16世紀であると考えられる。



第34図 照信院跡6トレンチ平面・断面図

7 6トレンチ（第34図）

調査区全体で一段低く、第3図で回廊にあたる可能性のある部分に、約5m×約2.6mの東西方向を軸とするトレンチを設定した。表土を掘削するとⅢ層、約35cm下層からⅣ層を確認した。6トレンチは遺物のごく少量しか出土せず、小礫もほとんどないことから、当該時期の遺構・遺物は無しと判断した。周辺より、一段下がっているため（約60～100cm）に、後世に削平を受けたと推測される。

（1）遺構

遺構は、Ⅳ層上面でピット2基を検出した。ピット11・12（SP11・12）の2基は、円形で、径が30cmである。埋土の状況から、照信院とは時期の違う遺構と判断した。

8 8トレンチ（第35図）

『三国名勝図会』の絵図では、回廊は本社を挟んで反対側にもあることから、熊野神社を中心に1トレンチと7トレンチの反対側に、約12.5m×約2mの東西方向をするトレンチを設定した。

（1）遺構

遺構は、溝状遺構を1条検出している。溝状遺構3（SD3）は、トレンチ西側に位置し、長さ約200cm・幅約45cmである。埋土は灰黄褐色を呈しており、SD1に類似する。SD3を境に東側（熊野神社側）に小礫を多量に含む造成土②が検出され、土師器片なども多く出土した。SD3の西側では、礫は少なく遺物の出土もない。SD3を境に様相が違ってくることを確認できた。

（2）遺構内出土遺物（第36図）

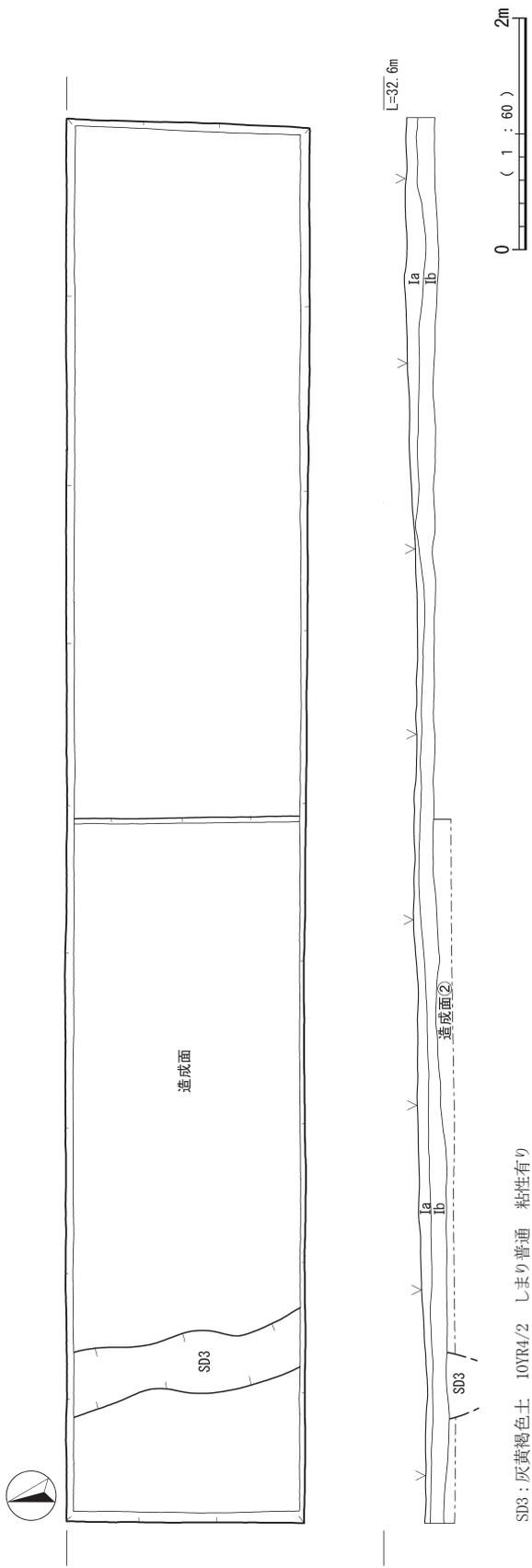
ア 陶磁器

80は、SD3から出土した苗代川の袋物で、内側に褐釉がかかる。年代は18世紀代と推定される。

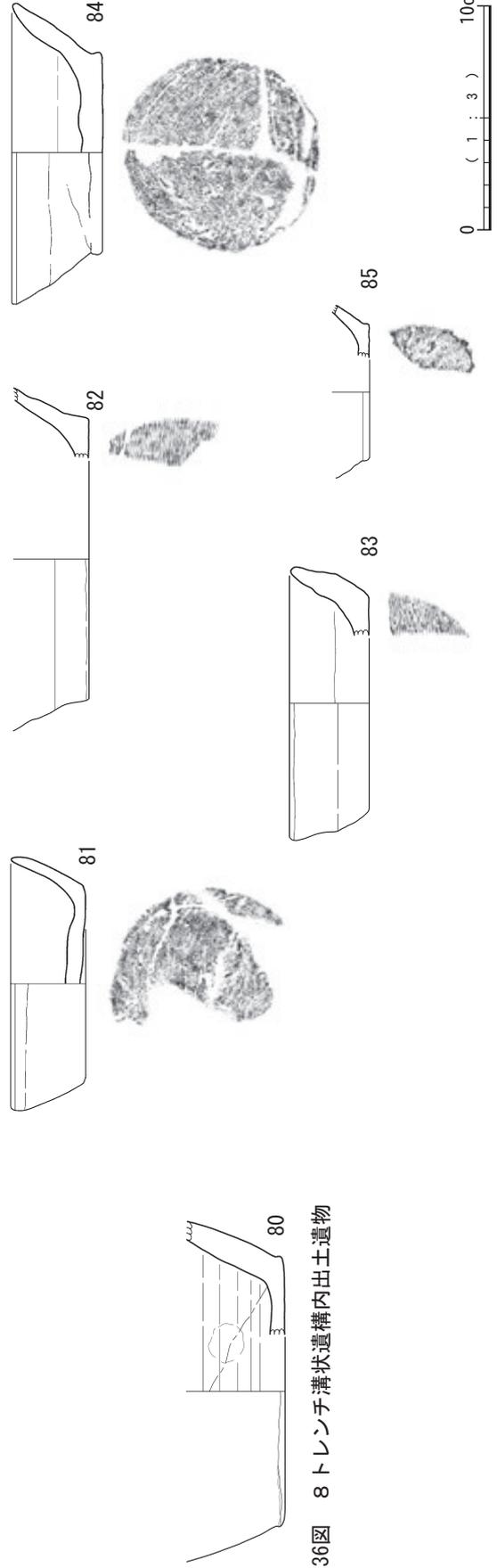
（3）8トレンチ出土遺物（第35図）

ア 土師器

81は、造成土②から出土した坏で、C類小型に分類される。底部内面中央が盛り上がり、やや上げ底である。色調は白色系である。13世紀後半～14世紀前半のものと推定される。底部切り離しは回転糸切りである。82は、造成土②から出土した坏で、C類小型に分類される。色調は橙色系である。13世紀後半～14世紀前半のものと推定される。底部切り離しは回転糸切りである。83は、表採された坏で、C類中型に分類される。色調は橙色系である。色調は橙色系である。13世紀後半～14世紀中頃のものと推定される。84は、造成土②から出土した坏で、ほぼ完全な形で復元できた。B類大型に分類される。色調は橙色系である。14世紀前半～14世紀中頃のものと推定される。底部切り離しは回転糸切りである。85は、造成土②から出土した小皿で、底部から体部にかけてやや鋭く立ち上がる。色調は橙色系で、底部切り離しは回転糸切りである。



SD3 : 灰黄褐色土 10YR4/2 しまり普通 粘性有り



第36図 8トレンチ溝状遺構内出土遺物

第35図 照信院跡8トレンチ平面・断面図及び出土遺物

第8表 照信院跡出土土師器観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	トレンチ	層	取上番号	遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面調整	内面調整	備考
21	30	土師器	小皿	1T	—	30	SD1	—	(7.8)	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	へら切りか?
	31	土師器	小皿	1T	—	30	SD1	—	(8.4)	(1.1)	回転ナデ	回転ナデ	不明瞭
	32	土師器	小皿	1T	—	—	SD1	—	(6.0)	(1.6)	回転ナデ	回転ナデ	摩耗
	33	土師器	小皿	1T	—	30	SD1	—	(7.2)	(1.8)	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り
22	40	土師器	小皿	1T	表土一括	—	—	(7.0)	(1.8)	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り	
23	45	土師器	坏	7T	—	46	SD1	(14.0)	(10.0)	3.7	回転ナデ	回転ナデ	不明瞭
24	46	土師器	小皿	7T	II	37	—	(7.0)	(6.0)	1.6	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り 口縁にススあり(灯明痕)
	47	土師器	小皿	7T	II	40	—	(6.2)	(6.0)	1.3	回転ナデ	回転ナデ	不明瞭
	48	土師器	小皿	7T	表土	—	—	(11.5)	(9.0)	1.7	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り
28	54	土師器	小皿	3T	表土一括	—	—	(6.6)	(6.0)	(1.3)	回転ナデ	回転ナデ	摩耗
	55	土師器	小皿	3T	表土一括	—	—	(6.0)	(2.1)	—	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り
	56	土師器	小皿	3T	表土一括	—	—	(7.5)	(6.0)	1.5	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り
29	72	土師器	小皿	4T	表土一括	—	—	(8.0)	(6.0)	1.9	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り
33	77	土師器	坏	5T	表土一括	—	—	(10.8)	2.5	—	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り
35	81	土師器	坏	8T	造成土②	69	—	(11.3)	(8.7)	3.3	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り
	82	土師器	坏	8T	造成土②	74	—	—	(12.4)	(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り
	83	土師器	坏	—	表土一括	—	—	(12.2)	(9.8)	3.5	回転ナデ	回転ナデ	摩耗
	84	土師器	坏	8T	造成土②	7	—	13.4	8.7	4.0	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り
	85	土師器	小皿	8T	造成土②	81	—	—	(6.0)	(1.6)	回転ナデ	回転ナデ	回転系切り

第9表 照信院跡出土陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	種類	トレンチ	層	取上番号	遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土の色調	記号	産地	年代	備考
21	34	陶磁器	碗	染付	1T	—	—	SD1	(10.0)	—	(4.5)	灰白	N8/0	肥前系	18C後半	草花文
	35	陶磁器	碗	陶器	1T	—	18	SD1	9.4	4.0	5.9	灰白	10Y7/1	薩摩(龍門司)	18C前半	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ
	36	陶磁器	灯明皿	陶器	1T	—	4	SD1	—	(4.6)	(1.2)	にぶい赤褐	5YR4/3	薩摩(龍門司)	18C後半	見込みにごま目あり
	37	陶磁器	瓶	陶器	1T	—	19	SD1	—	—	—	にぶい黄橙	10YR7/3	薩摩(加治木・始良系)	18C	
22	41	陶磁器	碗	青磁	1T	表土一括	—	—	—	—	—	灰白	7.5Y7/1	龍泉窯系	13C後半~14C前半	
	42	陶磁器	碗or瓶	陶器	1T	表土一括	—	—	(6.0)	(1.2)	褐色	7.5YR4/3	薩摩(加治木・始良系)	18C後半	見込みに灰かぶり	
	43	陶磁器	皿	染付	1T	造成土②	—	—	8.4	3.0	2.4	灰白	10Y8/1	肥前系	19C以降	見込みに梅花文
24	49	陶磁器	碗	青磁	—	表探	—	—	—	—	—	灰白	7.5Y7/1	龍泉窯系	13C後半~14C前半	
	50	陶磁器	土瓶	陶器	7T	表土一括	—	—	(5.2)	—	(9.1)	褐色	7.5YR4/3	薩摩(苗代川)	19C	
27	51	陶磁器	仏花器	陶器	3T	—	53	SK3	(6.0)	—	(12.8)	灰褐	5YR5/2	薩摩(加治木・始良系)	18C後半	
28	57	陶磁器	香炉	陶器	3T	Ib	—	—	—	—	—	灰白	10YR7/1	肥前(内野山系)	18C初頭	口唇部釉剥ぎ
	58	陶磁器	線香立て	陶器	3T	Ib	—	—	9.0	5.0	4.3	黄褐	10YR7/6	薩摩(龍門司)	18C前半	
	59	陶磁器	香炉	陶器	3T	表土一括	—	—	(5.0)	—	(3.9)	灰白	10YR8/1	肥前(内野山系)	18C初頭	
29	73	陶磁器	丸碗	染付	4T	表土一括	—	—	(4.0)	(4.7)	—	灰白	7.5Y8/1	肥前系	18C後半	梅花文
32	74	陶磁器	徳利	磁器	5T	—	—	SL1	—	—	(4.8)	灰白	5Y8/1	肥前系	18C	
33	78	炆器	搥鉢	炆器	5T	表土一括	—	—	—	—	(4.9)	褐灰	10YR6/1	備前	16C	
	79	炆器	搥鉢	炆器	5T	表土一括	—	—	—	—	—	にぶい赤褐	2.5YR5/4	備前	16C	
36	80	陶磁器	袋物	陶器	8T	—	86	SD3	—	12	—	黄灰	2.5Y6/1	薩摩(苗代川)	18C	

第10表 照信院跡出土軽石製品観察表

挿図番号	掲載番号	器種	トレンチ	遺構	層	取上番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
32	75	軽石製品	5T	SL1	—	—	13.0	9.8	7.8	250	
	76	軽石製品	5T	SL1	—	—	16.1	11.9	8.2	290	

第11表 照信院跡出土瓦観察表

挿図番号	掲載番号	種別	瓦種	トレンチ	遺構	層	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	瓦当:文様	連珠数	瓦径(cm)	周縁幅(cm)	瓦当高(cm)	文様高(cm)	内径(cm)	文径(cm)	胎土色調	産地	年代	備考
22	44	瓦	平瓦	1T	—	Ib	—	(7.8)	(6.7)	1.6	—	—	—	—	—	—	—	—	灰白	2.5Y7/1	—	近世

第12表 照信院跡出土青銅製品・古銭観察表

挿図番号	掲載番号	器種	トレンチ	遺構	層	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
27	52	古銭	3T	SK3	—	55	2.4	2.4	0.1	青銅製・寛永通宝
	53	古銭	3T	SK3	—	56	2.3	2.3	0.1	青銅製・寛永通宝
28	60	華瓶	3T	—	表土一括	—	4.1	1.7	0.2	青銅製
	61	鉢	3T	—	表土一括	—	6.1	2.5	0.4	青銅製
	62	鉢	3T	—	表土一括	—	6.3	2.5	0.5	青銅製
	63	古銭	3T	—	造成土①	58	2.4	2.4	0.1	青銅製・寛永通宝
	64	古銭	3T	—	造成土①	60	2.4	2.4	0.1	青銅製・寛永通宝
	65	古銭	3T	—	造成土①	—	2.5	2.5	0.1	青銅製・寛永通宝
	66	古銭	3T	—	表土一括	59	2.3	2.4	0.1	青銅製・寛永通宝
	67	古銭	3T	—	表土一括	—	2.5	2.5	0.1	青銅製・寛永通宝

第13表 照信院跡出土鉄製品等観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	トレンチ	遺構	層	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
21	38	鉄製品	鉄釘	1T	SD1	—	20	5.9	1.4	0.7	
	39	鉄製品	鉄釘	1T	SD1	—	21	4.7	1.4	1.4	
28	68	鉄製品	鉄釘	3T	—	表土一括	—	6.4	1.4	1.1	
	69	鉄製品	鉄釘	3T	—	表土一括	—	8.2	1.2	1.3	
	70	鉄製品	鉄釘	3T	—	表土一括	—	4.4	0.9	0.6	
	71	鉄製品	鉄釘	3T	—	表土一括	21-2	5.4	1.1	0.9	

第4節 小結

第3節調査成果をもとに、照信院跡についてまとめていきたい。

1 発掘調査

(1) 各トレンチ調査から

トレンチの設定は、現在の熊野神社が『三国名勝図会』にある照信院の本社と位置が変わっていないと仮定して、設定した。

7トレンチからは、多くの小礫が検出され、その礫敷が途切れるところで溝状遺構が検出された。宮崎県カラ石の元遺跡では、礫敷の検出はないものの、六地地藏・無縫塔が多く残る区域と柱穴群・土坑が溝状遺構で区画されていることから、「建物域と墓域（祭祀域）を区画していた可能性」があるとしている。照信院跡では、礫敷を玉砂利として考えると、礫敷側が寺院の建物域であり、溝状遺構は寺院と他の区域を分けるものであると考えられる。また熊野神社を中心に7トレンチと対称となる8トレンチを設定したところ、礫敷と溝状遺構が確認されたことから、絵図にある回廊またはそれに付随するものとして、その区画の範囲を確認することが出来た。しかし、7・8トレンチともに回廊の柱跡や礎石などは検出できなかった。

1・3・7・8トレンチから造成面を検出した。いずれも寺院建立の際に地形の凹みを平坦に整地するためのものと考えられる。1トレンチからは、照信院跡の遺構ではなく、飯隈古墳群に伴う土坑と考えられることから、照信院が創建される前から、土地の利用があったことが分かる。

3トレンチからは、土坑を検出した。その中から寛永通宝や懸仏の一部である華瓶、鋳等が出土したことから、廃仏毀釈に関係した廃棄土坑である可能性が考えられる。3トレンチの南側土層断面からは、I b層に類似する2層を確認し、I b-1層、I b-2層とし、さらにI b'層を確認した。廃棄後、埋め立てられたため、他の1・7・8トレンチと異なる状況であると考えられる。

5トレンチでは、円礫の詰まったピットを2基確認した。円礫が詰まっているピットの類例として、一字一石経がある。鹿児島県内でも20件ほど確認されている。その一つとして、いちき串木野市の柵城跡から、一字一石経塚が15基検出されている。20,680点の石が出土し、そのうち少量ではあるが、墨書された経石が確認されている。経石は判読が不明なものも多く、文字として確実に判読できたものは25点であり、石の大きさは2～5cmのものが主体である。ピット3内の円礫は、一字一石経の可能性もあることから、整理作業において赤外線を照射し、墨書文字の有無について調べたが、確認できなかった。また、かまど状の遺構も同じトレンチから検出された。

7・8トレンチで確認された小礫は、他のトレンチでは検出されていない。現在、調査区は畑として利用されているが、地表面にも小礫が確認できる。踏査を行ったところ、

地表面の小礫も熊野神社周辺においては多く見られるが、神社周辺から離れていくほど、小礫の数が少なくなっていく。各トレンチでの特徴が異なることから、土地利用の仕方が異なっていると予想される。

(2) 出土遺物から

今回の調査では、約650点の遺物が出土し、そのうち、土師器19点、陶磁器18点、瓦1点、青銅製品3点、寛永通宝7点、鉄製品6点を図化した。

土師器は、出土遺物のなかで最も数が多く、出土点数は235点である。ほとんどが細片でなかにはローリングを受けたと考えられ、表面が摩耗しているものもある。出土状況は、1トレンチ、3トレンチ、8トレンチに集中しており、表土及び溝状遺構、造成土からの出土が多かった。土師器の器形は、口径が5.6cm～15.0cm、底径が5.0cm～11.0cm、器高が1.3cm～4.0cmであり、比較的小型のものが多い傾向であり、土師器を概観すると、年代が推定されるものだけで14世紀前後のものが多いことがわかった。また、照信院跡出土の陶磁器を概観すると、中世の遺物は少なく、薩摩、肥前系の近世陶磁器が多い。第3節調査成果でも触れたが、土師器は14世紀前後のものも多く、陶磁器は18世紀から19世紀以降のものが中心となることから、土師器と陶磁器の年代観が異なる。『大崎名勝誌』内の「飯隈山由緒帳」によれば、飯隈山権現心熊野三社大権現宮は、建治2(1274)年島津久経が参詣した際に、権現宮を再興し、覚人上人を飯福寺中興の開山というの記載がある。一時さびれていたが、再興されたその後と考えると、14世紀前後の土師器が多く出土することに繋がったのではないかと考える。また、1500年代は肝付氏と島津氏の戦いが繰り返され、「天皇からの勅願所が焼失」し、寺院の焼失や倒壊などがあったが、1600年代に「島津義久が本社、稲荷、愛宕を建て、島津家久が権現社等を修理、その後山王宝殿、鳥居等が建立される」など、島津氏の力を借りて、再興していったようである。そのため陶磁器は、多少の時期差はあるが、再興以降後である18世紀から19世紀以降のものが中心となり、土師器と陶磁器の年代観の差が生じたのではないかと考える。

近世の遺物は、照信院で使用されていたであろう、仏花器や香炉などの仏具が出土している。その中で、照信院跡



(東京国立博物館デジタルコンテンツから引用)

写真4 重要文化財：金銅聖観音懸仏

の出土遺物の中で特質とされるのが、華瓶である。江戸時代には、幕府の仏教保護政策の影響もあって、仏像を神体とする神社があるなど神仏混淆の傾向があった。銅鏡や鏡を擬した鏡板に、線刻や彩色で仏像・神像を表した鏡像、鏡板に立体的な仏像・神像を取り付けた懸仏を礼拝の対象としていた。3トレンチで出土した華瓶は、懸仏の仏像横の装飾であり、この華瓶も写真4に類似した懸仏の一部であったと思われる。照信院においても懸仏を礼拝の対象としていた可能性が考えられる。

2 現地踏査及び聞き取り調査

(1) 仁王像 (写真6)

聞き取りによると、現在、熊野神社(写真5)入り口に建てられている仁王像は、『三国名勝図会』では、参道入り口に建てられており、今よりも国道に近い場所に建っていたようである。鎌倉時代の作とされているが、詳細は不明である。昭和51年に町指定文化財に指定されている。周辺住民への聞き取りの中で、昭和の道路舗装工事の際に、飯隈山飯福寺石塔群近くの道路沿いに仁王像の一部が転がっていることに気づき、修繕を行い、現在の場所に移動したという。



写真5 熊野神社



写真6 仁王像

(2) 飯隈山飯福寺石塔群 (写真7・8)

廃仏毀釈後、野積みされていたものを昭和58年に調査し、昭和59年に町指定文化財に指定されている。宝塔21基、宝篋印塔9基、五輪塔53基、残欠相輪48基、空風輪130基、板碑3基が確認され、一部を復元している。

石塔群が当時の場所に位置しているとすれば、『三国名勝図会』にある仁王像と幅の広い大きな階段は、現在の石塔群周辺にあった可能性が非常に高い。実際に国道から熊野神社へ向かう際、一段高くなる場所がある。

(3) 坊

南九州最大の修験道場であった照信院には、28の坊があったとされている。『三国名勝図会』においても本社や本院等とともに、12の坊が描かれている。現在地名として判明しているのは、照信院跡の北部と南部に位置している18の坊である(第17図 調査対象範囲図)。周辺住民への聞き取りの中で、「〇〇坊の〇〇さん」と地域の方を呼んでいたことを記憶しており、廃仏毀釈で照信院が壊された後も口伝の地名として残っていたようである。



写真7 飯隈山飯福寺石塔群 (下段)



写真8 飯隈山飯福寺石塔群 (上段)

第4章 大願寺跡

第1節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

さつま町は薩摩半島の北部に位置する。平成17年3月に宮之城町・鶴田町・薩摩町の3町が合併して誕生した町で、北側は出水市・伊佐市、東側は霧島市・湧水町、南側は薩摩川内市・始良市、西側は薩摩川内市と隣接している。人口約2万人（令和5年7月現在）を有して、面積は303.9km²で鹿児島県全体の3.3%を占め、そのうち37%が森林である。さつま町の地形の特徴として、周囲は北に矢筈岳・宮ノ尾山・国見岳、東に安良岳・烏帽子岳・中ノ岳・片城山・船見岳、南に八重山・冠岳・雄岳、西側に紫尾山1,067mに囲まれ、川内盆地の一部となっている。気象は、夏は高温多雨、冬は温暖小雨で内陸性に近く、年間平均16.2℃、年間平均降水量2,365mmである。さつま町の中央をほぼ南北に流れる川内川は、熊本県白髪岳1,417mに源を発し、宮崎県えびの市を中心とした西諸県盆地を流れ、本県の大口盆地、川内平野を貫流し、東シナ海に注いでいる。筑後川に次ぎ九州第二の規模を誇る一級河川である。川内川に合流する支流は109の河川を数え、流入する河川による浸食や堆積により、沖積地や河岸段丘が形成されている。この地域の地質は四万十累層群を基盤としており、北部の紫尾山地は四万十累層群とこれに貫入した花崗閃緑岩からなる。南部及び東部には四万十累層群に貫入した火山岩類が低い山地を形成している。また、紫尾山地を除く広い範囲に今から約30万年前から約2万5千年前の火砕流堆積物が分布している。

大願寺跡は旧鶴田町南部に所在し、川内川右岸を通る国道267号沿いの長岡原台地の北端、標高52～53m前後の河岸段丘縁辺に位置する。すぐ北を川内川支流で紫尾山塊にその源を発する夜星川が南東へ流れ、大願寺跡南西の平野部で、夜星川と川内川が合流する。現在も大願寺に関する鐘撞き堂跡や多くの石塔群が周辺に存在し、集落名も大願寺地区として名前が残っていることから、廃寺となった後も人々にとって重要な地域であったことがうかがえる。

2 歴史的環境

さつま町の先史時代及び古代の遺跡は町内全域に分布し、約200か所（令和5年7月）の埋蔵文化財包蔵地が所在している。さつま町の中央を流れる川内川やその支流周辺には肥沃な大地が多く、先史時代から人々の生活に適した地域であったと考えられる。

旧石器時代

柏原の小松原B遺跡では、細石刃や細石刃核を主体とする石器が出土している。小松原B遺跡の細石刃に使用されている石材は、頁岩やホルンフェルス、黒曜石の順で使用率が高く、チャートや鉄石英製も数点出土している。また細石刃核の型式で「加治屋園型」に分類できるものが多く出土しているという特徴をもつ。

中津川の尾付野山遺跡では、礫群が1基と石器製作跡と思われるチップ、フレークの集中区が1か所確認されている。また三稜尖頭器、細石刃、細石刃核が出土している。久富木に位置する井手原遺跡では、細石刃や細石刃核が出土し、上牛鼻産、腰岳産などの様々な産地の黒曜石の使用が確認されている。

縄文時代

久富木の大畝町園田遺跡では、早期の手向山式土器、前期の轟式土器、曾畑式土器、中期の阿高式土器、後期の出水式土器、晩期の黒川式土器等が出土しており、この地域で長期に渡り生活が営まれていた様相が窺える。また、虎居の甫立原遺跡では、早期の集石や押型土器が出土している。柏原の水天向遺跡では、縄文後期の土器埋設遺構や鳥井原式土器、三万田式土器、上加世田式土器が出土している。そのほかにも石鏃や石錐、石皿だけでなく異形石器、軽石製品、円盤形石製品など精神文化関連の遺物とされるものも一定量出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、非常に少ない。前述の水天向遺跡では、中期中葉から後葉にかけての黒髪式土器や後期の松木菌式土器の土器片が出土している。二渡船渡ノ上遺跡では刻目突帯土器、高橋式土器、黒髪式土器が出土し、対岸に位置する山崎野町跡Aでは、高橋式土器が出土している。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、町内各地で確認されている。川内川流域に広く分布する地下式板石積石室墓は、小松原古墳や別府原古墳群から6基ずつ、湯田原古墳から1基発見され、副葬品として刀剣や鏃など多くの鉄器が出土している。また、湯田原や轟原出土した成川式土器には高坏が多く、内外面に丹を塗り研磨されたものがあるなど、当時期の埋葬法や、副葬品による生活状況等が明らかになってきている。

古代

時吉北川遺跡では、「新・来・神」などの文字が書かれた墨書土器や須恵器・土師器が出土している。西下原遺跡では、溝状遺構が6条、土坑が8基検出されている。二渡船ノ上遺跡では、土師器や須恵器が出土している。

中世

虎居城跡では曲輪や虎口、土塁、石塁、庭園状遺構が残存していることが確認され、土師器や陶磁器、鉄製品が出土している。松尾城及び宗功寺跡でも鉄滓や轆の羽口を伴った鍛冶関連の炉遺構や掘立柱建物跡等が検出されている。時吉北川遺跡で炉跡や青磁・白磁・紡錘車が、中津川城跡・寺屋敷遺跡で青磁や土師器、求名の通山遺跡では約300基の土坑及び2基の方形竪穴遺構や轆の羽口や鉄滓等が出土している。

大願寺遺跡周辺の集落や川内川沿いの川岸などでは、宝

塔や五輪塔の残欠と思われる石造物がいくつか見られる。由来等は不明であるが、形状からしてほとんどが南北朝期から戦国時代のものである。また周辺の地字名には、「市場」、「小路下手」、「京塚原」など古代から中世の村落地名と思われるものが多く残っていることから、『鶴田町史』では古代の禰答院の郡衙の所在地を柏原周辺ではないかと推定している。

近世

山崎野町跡Aでは、大型の礎石建物跡が見られるほか、17世紀から19世紀にかけての陶磁器類が出土しており、白薩摩の土瓶や肥前系大皿、製糸関連の遺物（煮繭鍋）などが出土している。また前述の松尾城及び宗功寺跡では宮之城島津家の墓地が隣接して現存しており、染付や瓦類が出土している。宮之城島津家の墓所は令和2年3月に島津宗家・越前（重富）島津家・加治木島津家・垂水島津家・今和泉島津家とともに国指定史跡「鹿児島島津家墓所」に指定されている。

3 大願寺跡略史

薩摩の臨済宗の五山、十刹、諸山のうち、大願寺は諸山に位置する。『禰答院記』によると、貞治三（1364）年渋谷氏系禰答院氏の重成により一関宗万を開山、起宗和尚を初住として創建され、その後禰答院氏の菩提寺となったとされる。『三国名勝図会』には、12の坊舎がある大変大きな寺院であったとある。本堂には、足利義満自筆の「醫王寶殿」の扁額を掲げるなど、将軍家と禰答院氏の親密さが伺える。大願寺の廃寺の時期は、はっきりと明示されていないが、石塔や大願寺研究に精通する伊敷歴史研究会会長池田純氏の見解からも、禰答院氏が衰退するとともに、菩提寺であった大願寺も江戸時代初期には廃寺となったと考えられる。

『三国名勝図会』が編纂された近世後期には、薬師堂のみがのこっていたと記載される。盛衰を繰り返した大願寺は、禅宗の道場となった後、衰微した際には「醫王寶殿」の扁額は、薩摩川内市水引の泰平寺に移され、さらに薩摩藩主島津光久の時代に鹿児島城下に建てられた東照宮別当寺大願寺の本堂に掲げられたとある。現在は、日吉町の妙信寺本堂に掲げられている。

【参考・引用文献】

宮之城町史編纂委員会

2000『宮之城町史』

鶴田町郷土史編纂委員会

1979『鶴田町史』

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2010『尾付野山遺跡・向井原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書（147）

2011『二渡船渡ノ上遺跡・山崎野町跡A』鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書（161）

2018『虎居城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書（197）

2022『井手原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化

財発掘調査報告書（219）

さつま町教育委員会

2006『時吉北川遺跡』鹿児島県立薩摩郡さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

2008『向井原遺跡』鹿児島県薩摩郡さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

2011『水天向遺跡』鹿児島県薩摩郡さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

2015『小松原B遺跡』鹿児島県薩摩郡さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）

宮之城町教育委員会

1985『大畝町園田遺跡』鹿児島県薩摩郡宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

1992『甫立原遺跡』鹿児島県薩摩郡宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

1995『松尾城及び宋功寺跡（2）』鹿児島県薩摩郡宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

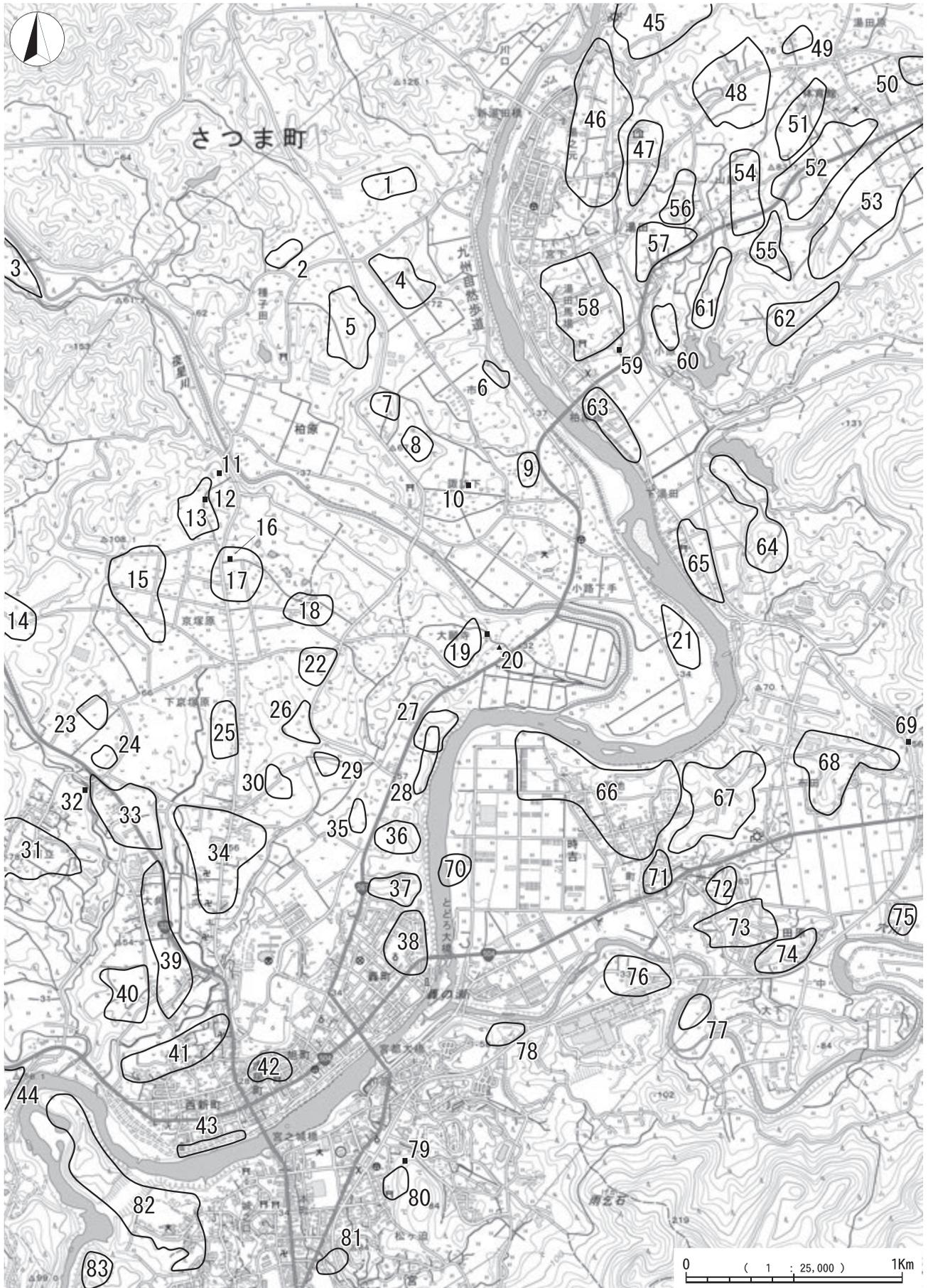
薩摩町教育委員会

2001『寺屋敷遺跡 通山遺跡 宮ノ前遺跡 犬木屋遺跡』鹿児島県薩摩郡薩摩町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

【参考史料】

『禰答院記』

『三国名勝図会』



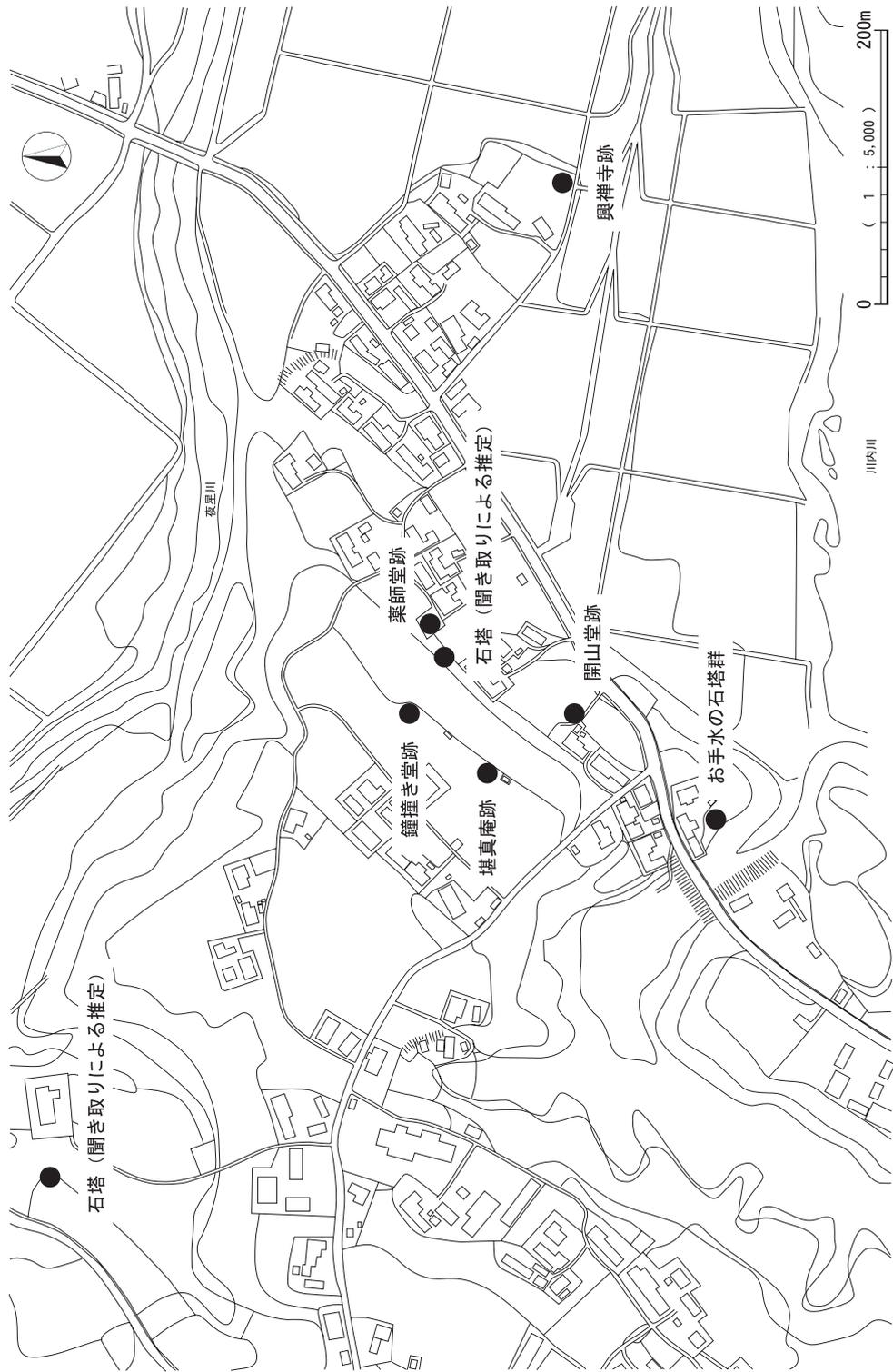
第37図 大願寺跡周辺遺跡 位置図

第14表 大願寺跡周辺遺跡一覧表（1）

番号	遺跡名	遺跡台帳番号		所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
1	東原遺跡	392	192	さつま町柏原	散布地		●		●				
2	長迫遺跡	392	186	さつま町柏原	散布地		●		●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
3	上片野遺跡	392	242	さつま町	—	—	—	—	—	—	—	—	
4	木場田遺跡	392	191	さつま町柏原	散布地				●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
5	長山遺跡	392	187	さつま町柏原	散布地		●		●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
6	頭無シ遺跡	392	190	さつま町柏原字頭無シ	散布地		●		●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
7	諏訪原遺跡	392	189	さつま町柏原	散布地		●	●	●				宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（6） H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
8	加治山遺跡	392	188	さつま町柏原	散布地				●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
9	宮ノ下遺跡	392	193	さつま町柏原	散布地				●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
10	諏訪上下遺跡	392	144	さつま町柏原字立山	散布地	—	—	—	—	—	—	—	
11	京塚原遺跡	392	130	さつま町柏原字小松原	散布地			●					
12	京塚原古墳	392	133	さつま町柏原焼堂	地下式板石積石室				●				
13	焼堂遺跡	392	178	さつま町柏原焼堂	散布地		●		●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
14	政所C遺跡	392	182	さつま町柏原	散布地				●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
15	長牟田遺跡	392	179	さつま町柏原字長牟田	散布地		●	●	●				
16	小松原古墳	392	132	さつま町柏原字小松原	地下式板石積石室				●				
17	小松原B遺跡	392	177	さつま町柏原字小松原	散布地	●	●		●				さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書（7） H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
18	小松原A遺跡	392	176	さつま町柏原字小松原	散布地		●		●		●		H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
19	大願寺跡	392	170	さつま町柏原	散布地		●		●		●		本報告書
20	黄龍山興禅寺跡	392	137	さつま町柏原字興禅寺	社寺跡	—	—	—	—	—	—	—	
21	水天向遺跡	392	183	さつま町柏原	散布地				●				さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）（6） H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
22	原田後A遺跡	392	171	さつま町柏原	散布地				●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
23	政所A遺跡	392	180	さつま町柏原	散布地		●		●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
24	政所B遺跡	392	181	さつま町柏原	散布地		●		●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
25	樋山遺跡	392	175	さつま町柏原字樋山	散布地		●						H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
26	原田後B遺跡	392	172	さつま町柏原	散布地				●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
27	御手水遺跡	392	169	さつま町柏原	散布地				●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
28	長岡城跡	392	146	さつま町柏原字城ヶ迫	城館跡						●		
29	原田A遺跡	392	173	さつま町柏原	散布地				●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
30	原田B遺跡	392	174	さつま町柏原	散布地		●		●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
31	西ノ原遺跡	392	123	さつま町虎居甫立	散布地		●		●				H5年度県教委分布調査（Ⅲ）
32	大角原遺跡	392	125	さつま町虎居大角・甫立	散布地		●	●	●				H5年度県教委分布調査（Ⅲ）
33	北園	392	124	さつま町虎居甫立	台地		●			●	●		
34	登鹿倉遺跡	392	126	さつま町虎居上向	散布地		●		●				
35	原田前遺跡	392	168	さつま町柏原	散布地				●				H4年度県教委分布調査（Ⅱ）
36	椿城跡	392	147	さつま町柏原字御手水	城館跡						●		
37	轟原城跡	392	38	さつま町虎居字原口	城館跡						●		
38	轟原瀬ノ上遺跡	392	6	さつま町虎居轟原	散布地		●						
39	原口遺跡	392	122	さつま町虎居大角・原口・堂ノ前・椿ノ下	散布地				●				H5年度県教委分布調査（Ⅲ）
40	兎田遺跡	392	121	さつま町虎居大角・甫立	散布地		●		●				H5年度県教委分布調査（Ⅲ）
41	後川遺跡	392	120	さつま町虎居西手	散布地		●		●				H5年度県教委分布調査（Ⅲ）
42	曇秀寺跡	392	30	さつま町虎居旭町	社寺跡							●	

第15表 大願寺跡周辺遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	遺跡台帳番号		所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
43	虎居町武家屋敷跡	392	237	さつま町	—	—	—	—	—	—	—	—	さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
44	松尾城跡	392	11	さつま町虎居海老川	城館跡					●			①鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(42) ②宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)(5)
45	鶴川原	392	78	さつま町湯田	散布地		●	●	●		●		H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
46	上湯ノ坊	392	77	さつま町湯田	散布地		●		●		●		H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
47	長牟田遺跡	392	80	さつま町湯田	散布地				●	●	●		H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
48	石橋段遺跡	392	81	さつま町湯田	散布地				●				H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
49	石橋段遺跡	392	195	さつま町柏原神子	散布地				●				H4年度県教委分布調査(Ⅱ)
50	下湯田原遺跡	392	196	さつま町柏原神子	散布地		●	●					H4年度県教委分布調査(Ⅱ)
51	供養原A遺跡	392	82	さつま町湯田湯田原	散布地		●						H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
52	上五敷遺跡	392	87	さつま町湯田湯田原	散布地		●	●					宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書(8) H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
53	供養原B遺跡	392	86	さつま町湯田湯田原	散布地		●	●					H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
54	中尾A遺跡	392	88	さつま町湯田山越	散布地		●	●					H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
55	下五敷遺跡	392	89	さつま町湯田山越	散布地				●				H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
56	叶山遺跡	392	83	さつま町湯田叶山	散布地		●	●	●				H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
57	十郎佐遺跡	392	84	さつま町湯田山越	散布地		●	●	●				H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
58	嶋畑遺跡	392	79	さつま町湯田	散布地		●	●	●				H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
59	湯田の切開どん	392	14	さつま町湯田	台地						●		
60	供養山遺跡	392	85	さつま町湯田湯田原	散布地		●	●	●				H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
61	中尾B遺跡	392	90	さつま町湯田山越	散布地		●	●					H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
62	鐘遺跡	392	91	さつま町湯田山越	散布地				●				H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
63	船津田遺跡	392	76	さつま町湯田	散布地				●				H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
64	湯田城跡	392	13	さつま町湯田	城館跡						●		
65	高樋口遺跡	392	75	さつま町下湯田	散布地				●				H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
66	北川遺跡	392	74	さつま町時吉・北川・焼米田他	散布地		●	●	●				H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
67	時吉城跡	392	15	さつま町時吉	城館跡				●		●		H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
68	鶴ヶ城跡	392	42	さつま町田原字鶴ヶ城	城館跡						●		
69	布田	392	243	さつま町	台地							●	
70	時吉瀬ノ上遺跡	392	4	さつま町時吉	散布地		●						
71	中城跡	392	46	さつま町時吉字中城	城館跡						●		
72	萩峯遺跡	392	65	さつま町時吉	散布地		●	●	●				H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
73	赤道遺跡	392	64	さつま町時吉	散布地		●	●	●	●	●	●	①さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) ②宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書(12) H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
74	田原古城跡	392	12	さつま町田原	城館跡						●		
75	小西遺跡	392	66	さつま町広瀬	散布地				●	●	●		H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
76	築詰遺跡	392	62	さつま町田原	散布地		●	●					宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書(11) H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
77	高祖遺跡	392	63	さつま町田原	散布地		●	●					H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
78	鼠ヶ城跡	392	10	さつま町田原	城館跡					●			
79	宮之城窯跡	392	55	さつま町宮之城屋地愛宕	生産遺跡							●	H5年度県教委分布調査(Ⅲ)
80	多宝寺跡	392	34	さつま町宮之城屋地愛宕	社寺跡							●	
81	大道寺跡	392	31	さつま町宮之城屋地	社寺跡							●	
82	虎居城跡	392	9	さつま町宮之城屋地城ノ口	城館跡					●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(162)(197)
83	古城跡	392	41	さつま町宮之城屋地宇古城	城館跡						●		



第38図 大願寺跡周辺図

第2節 調査の方法と基本層序

1 調査の方法

表面積2,656㎡に4つのトレンチを設定して、調査を実施した。(第39図)

本遺跡の調査区割(グリッド)は設定せず、平成25年県営中山間総合整備事業柏原地区大願寺集落道工事で設置した任意のレベル杭(L=52.076m)を基準にし、道路上に残る4点A(52.39m)、B(52.62m)C(52.54m)D(52.502m)を利用し、E(53.03m)F(52.94m)G(52.85m)H(52.75m)の4点を任意に設定した。

調査は用地境界では安全上の措置として、約2m程度内側に控えてトレンチを設定し、表土は重機による掘削と、その後包含層では人力による掘り下げを実施した。トレンチ位置は現存している鐘撞き堂から調査区へ直線上に伸ばしてトレンチを設定し、それを中心に設定していった。

包含層中の遺物は、基本的に層位を確認して一括での取り上げを行ったが、必要に応じて平板とレベルによる取り上げを行った。遺構は検出面での写真と平板での平面実測、調査のみを行った。一部の遺構(SP 1)については、検出状況の写真撮影の後、一部掘り下げを行い、実測を行った。検出での実測の縮尺は、20分の1、50分の1とした。

2 遺構の検出と認定

遺構の検出は、IV層上面において、精査を行い、土色及び土質の違いから遺構の有無を確認した。その結果SK 1やSP 1、SD 1～9の遺構を検出したが、ほとんどの遺構は平面検出のみで、埋め戻してある。

3 基本層序

今回の調査でI層(表土)からIV層まで確認できた。調査時は、I層を色調でIa、I b層と分け、表土(現代の耕作土)とし、II層を旧表土としたが、3トレンチのI b層としていたところから近世の遺物が出土していることから、I a層をI層とし表土(現代の耕作土)、I b層をII a層、II層をII b層として旧耕作土とした。III層は中世から近世相当層の可能性が高いが、耕作による削平を受け、残存している層は大変薄く本来のIII層の堆積状況は確認できなかった。IV層はアカホヤ由来の層で、ブロック状にアカホヤ火山灰の一次堆積が見

られる。V層は、黒褐色土でやや粘性が強く、このV層内から押型文土器や塞ノ神式土器が出土したことから、V層は縄文時代早期相当であると判断した。

第3節 調査成果

各トレンチは、現存する鐘撞き堂跡を基準に設定を行った。トレンチ番号は、調査着手順に付し、トレンチごとの調査成果については、後述する。遺構の検出状況から1トレンチと4トレンチを先に記載し、その後順を追って記載していく。

1 1トレンチ(第40図)

調査区東側に約10m×2mの南東から北西方向を軸とするトレンチを設定した。表土の厚さも薄く、トレンチの北西側では、平成の頃に実施した工事により敷かれた碎石が表土内に多く残っており、攪乱部分が多く確認された。トレンチの南側では、10cmほど掘り下げるとすぐにIV層のアカホヤ由来の層が確認できた。

(1) 遺構

溝状遺構3(SD 3)が1条検出された。

攪乱が各所ある中、明確なプランではなかったが、4トレンチで検出したSD 3と思われる面が1トレンチ北側の攪乱のそばまで延びているのが確認できた。SD 3の詳細については、4トレンチの遺構において記載する。また、トレンチ西側に、トレンチ外から南北に延びる遺構と思われる面を検出したが、埋土状況から遺構ではなくI層の攪乱と判断した。

(2) 1トレンチ出土遺物(第41図)

遺物は、土器が6点出土している。5点が小片のため、1点のみ掲載する。86は、壺の底部で、古墳時代の成川式土器である。下から上方向へケズリを行った後、工具で横にナデ調整を行っている。内面は、ケズリを行った後ナデ調整を施している。底径は12.6cmである。

2 4トレンチ(第40図)

1トレンチ西側で検出したトレンチ外から南北に延びる遺構と思われる面の広がりを確認するため、1トレンチの西側へ約2m間隔をあげ、約10m×3mの東西を軸とする4トレンチを設定した。掘削を行うと、トレンチ南西側にすぐにIV層が広がり、1トレンチで検出した遺構面は確認できなかった。IV層を目指しながら掘り下げを行っていくとトレンチ北東側にIV層を検出した。4トレンチにおいても攪乱があり、東西に延びるトレンチ跡を先行トレンチとして利用し、下層確認を行った。

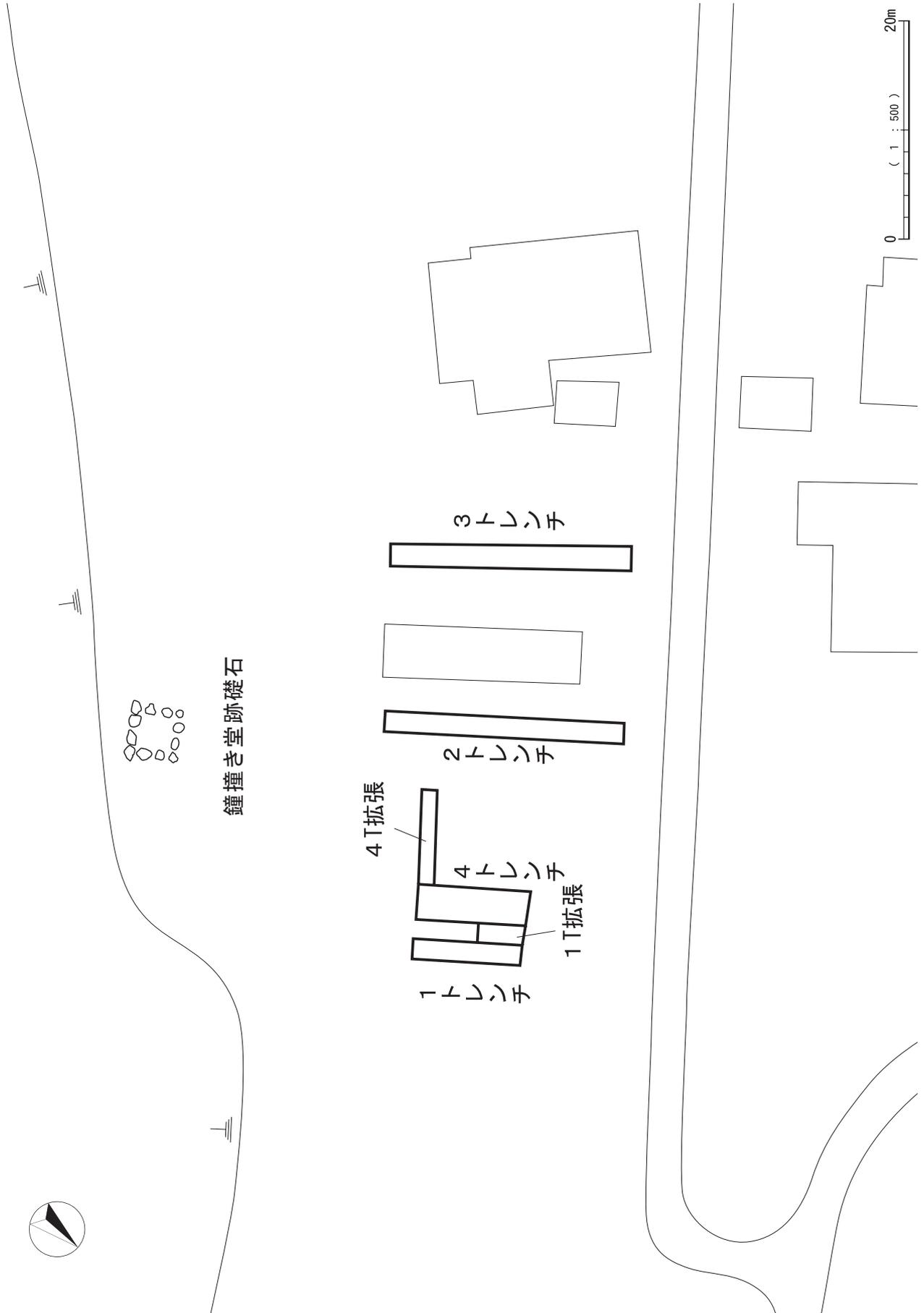
(1) 遺構

遺構は、溝状遺構(SD 1～3)が3条検出された。

トレンチ跡を先行トレンチとして下層確認を行い、土層断面からSD 1～3を検出した。埋土は類似しており明確な差はなく、第40図にある断面から、SD 1が最も古く、SD 3が最も新しいことが確認できた。SD 1～3は北側土層断面においても確認することはできるが、畑の耕作等により削平されているため、明確な掘り込みは確認できない。IV層を掘削し、

第16表 大願寺跡基本層序

層	色調	層厚(cm)	備考
I	褐色土	8～30	表土
II a	灰褐色土	0～10	旧耕作土
II b	褐色土	0～20	
III	黒褐色土	0～10	古墳・中近世相当層
IV	明褐色土	2～50	アカホヤ由来の層
V	黒褐色土	10～	縄文時代早期相当層



第39図 大願寺跡トレンチ配置図

その埋土が他のトレンチで確認できた遺構の埋土にも類似することから中近世に該当すると考えられる。

SD 1は、幅1.3～1.8m、検出面からの深さ8～12cmで、軸は北西を向いている。先行トレンチの断面では、底面は凹凸になる部分があるが、北側断面をみるとほぼ平坦である。遺物は含まない。

SD 2は、幅1.3～1.6m、検出面からの深さは約4～16cmで、軸は北西を向いており、トレンチ内ではSD 1と並行に延びている。底面は、ほぼ平坦である。

SD 3は、幅0.8m、検出面からの深さは約12cmである。トレンチ内では、SD 1、SD 2と同様に北西へ真っ直ぐ延び、約5mを過ぎたところから、北へカーブして延びていることが確認できた。

(2) 4 トレンチ出土遺物 (第41図)

4トレンチからは、土器が6点出土した。そのうち型式が確認できたものが3点であり、いずれも縄文時代後期の南福寺式土器であった。3点のうちIV層上面で取り上げた1点は、大変もろく取り上げた際に砕け、接合も不可能で掲載できなかった。掲載する2点はSD 3に隣接する黒褐色土内から出土している。SDの埋土とも異なり、Ⅲ層に類似していることから、Ⅲ層を掘り下げ、IV層内の縄文時代の遺物を巻き込んだ層と判断し、Ⅲ'面とした。2点ともに縄文時代後期の南福寺式土器の浅鉢である。87は、口縁部片である。くの字状に短く屈曲する。屈曲部下には、棒状工具により、凹線が施文されている。88は、胴部片である。棒状工具により、凹線が施される。文様、胎土から、87と同一個体と考えられる。

3 1 トレンチ拡張部分 (第40図)

4トレンチで検出した溝状遺構の広がりを確認するために、4トレンチと1トレンチの間をつなげ、1トレンチ拡張部分と設定して掘削を行った。約4.5m×1.7mである。SD 3はプランがはっきりとしない部分があるが、1トレンチ方向へカーブして延びていることが確認できた。1トレンチ拡張部分では、遺物は出土しなかった。

4 4 トレンチ拡張部分 (第40図)

4トレンチ南側の先行トレンチ断面でSD 2の立ち上がりが確認できなかったため、さらに4トレンチを図のように、約8.5m×1.5m広げ、4トレンチ拡張部分とした。その際、拡張部分西側に遺構面を確認したが精査することはできなかった。4トレンチから続く先行トレンチを4トレンチ拡張部分まで延ばしていくとSD 2がさがるSD 1を検出した。遺物は出土しなかった。

5 2 トレンチ (第43図)

台地の縁辺に残る鐘撞き堂跡を基準として南東から北西を軸とした約22m×2mのトレンチを設定した。2トレンチでは、I～V層まで確認できたが、耕作されたことで、Ⅲ層は削平され大変薄くなり、部分的に残存している状態であった。

(1) 遺構

遺構は、溝状遺構が5条 (SD 4～8)、土坑1基 (SK 1)、

ピット (SP 1) を検出した。

SD 4、SD 5は土層断面での検出となった。SD 4は、トレンチ南側で検出され、幅は1～1.4m、軸は北を向いている。SD 5は、SD 4の横で検出した。幅は1.6～1.7mで、軸は北東を向いている。SD 4とSD 5は隣接しているが、Ⅱb層が削平し、掘り込みや斬り合いなどが確認できず、時期差は判然としない。

SD 6～8は、トレンチの中央部分で検出され、東西に延びている。当初、平面上で確認できた幅約4.2mの溝状遺構を1条としていたが、調査を進めると、東側土層断面と先行トレンチの状況からSD 6～SD 8であることが確認できた。また、SD 7、SD 8の中央に帯状硬化面が1条確認できた。SD 6～8も同様に、Ⅱa層やⅡb層に切られており、はっきりとした掘り始めが確認できない。

SD 4～8は、埋土が残存するⅢ層に類似していることから、中近世相当の溝状遺構であると考えられる。SD 8の埋土で黒曜石が1点出土したが、表土やⅠ～Ⅱb層においても出土することから、耕作等で遺物が巻き込まれるなどして、原位置をとどめておらず、埋土内に含まれたのではないかと思われる。

SK 1は、トレンチ南東側で検出された。南北に長軸をおき、平面上確認できるのは長軸約1.7m、短軸約1.2mの楕円形で、さらに2トレンチ東側外に続いている。SK 1内においても、黒曜石を1点出土しているが、SD 8内の黒曜石と同様と判断した。

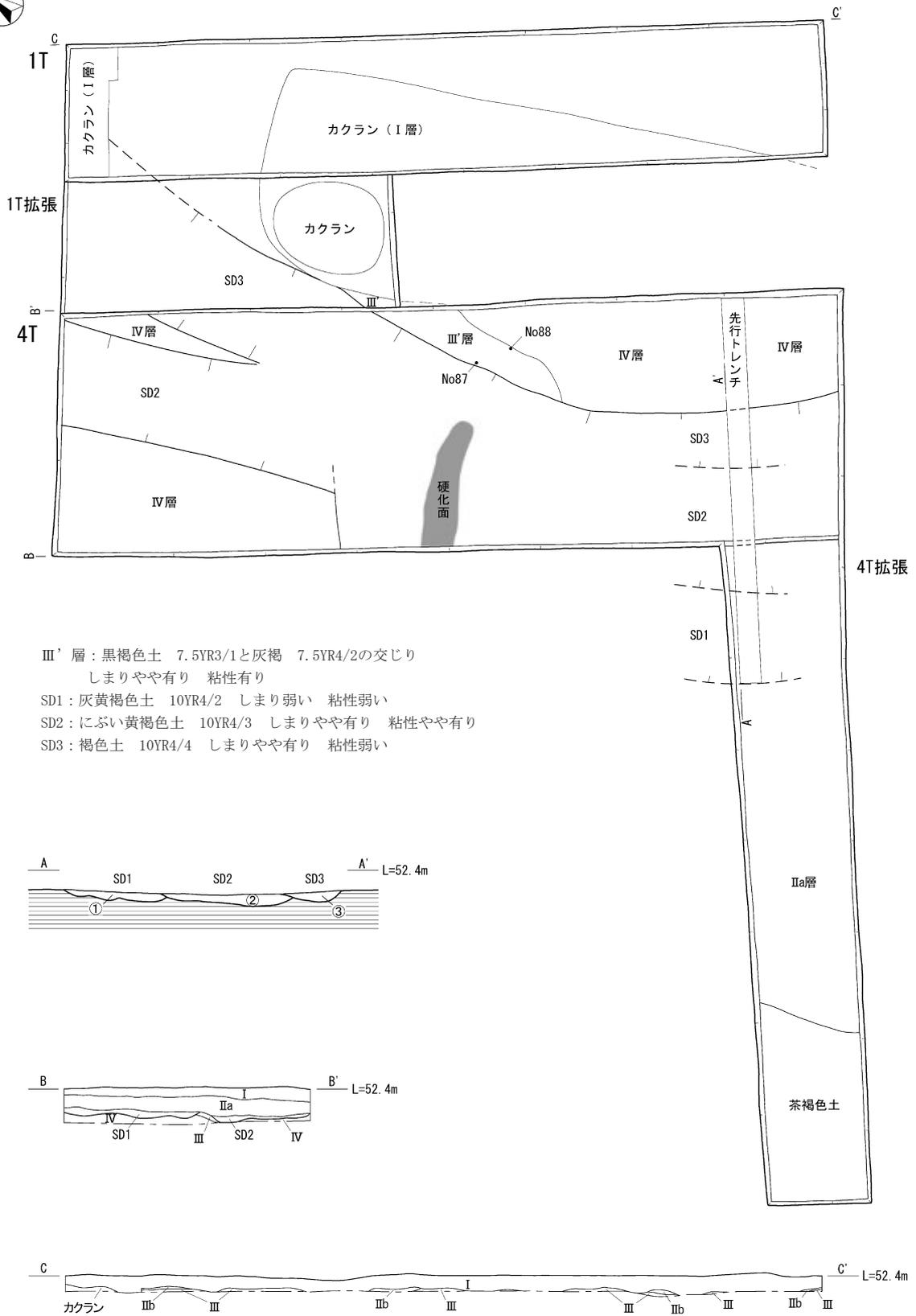
トレンチ北東側には、SP 1を検出した。55×44cmの楕円形柱穴で、深さは6cmと浅い。SK 1、SP 1ともに埋土がⅢ層に類似するため、中近世相当の土坑と考えられる。

(2) 2 トレンチ出土遺物 (第42図)

2トレンチからは、土器が11点、石器4点、黒曜石のフレイク3点、チップが1点出土している。多くが小片であるため、トレンチ南側に設定した、先行トレンチから出土した縄文時代早期の土器4点、石器4点を掲載する。

89～91は、縄文時代早期の塞ノ神式の土器片である。89は、塞ノ神A b式土器の胴部である。口縁部がラップ状に外反する器形で、屈曲部に貝殻をやや押し引くように施文する。90は、89の器形と同様で、塞ノ神A b式土器の頸部片である。文様は貝連点殻刺突文が施され、その下位は沈線によって区画された部分に縄文が施されている。91は、塞ノ神A b式土器の胴部片である。縄文施文後、沈線により区画されている。92は、縄文時代後期の南福寺式土器の深鉢の胴部片である。部分的に肥厚し、上部分は棒状工具により凹線が施される。内面に赤色が強い所が見られるが、器壁の剥落と風化によってはっきりとしないながらも、赤色顔料が塗布されていた可能性が考えられる。

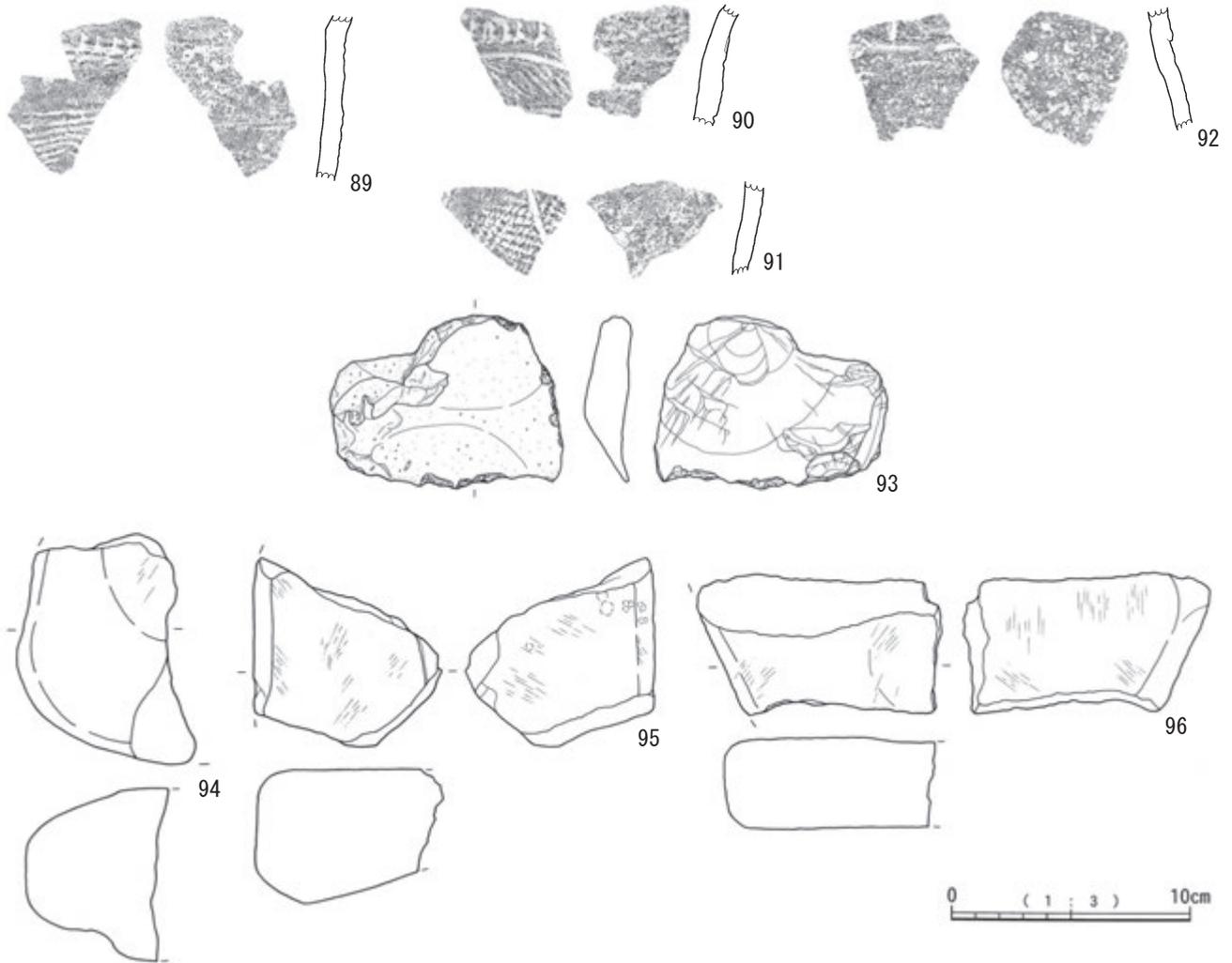
93は、二次加工剥片である。背面は礫面で、腹面は剥離面をそのままに下辺の鋭い縁辺に刃部をつくる。砂岩の自然礫からの剥離で100の石核と同様に、下の川内川の礫から打



第40図 大願寺跡1・4トレンチ平面・断面図

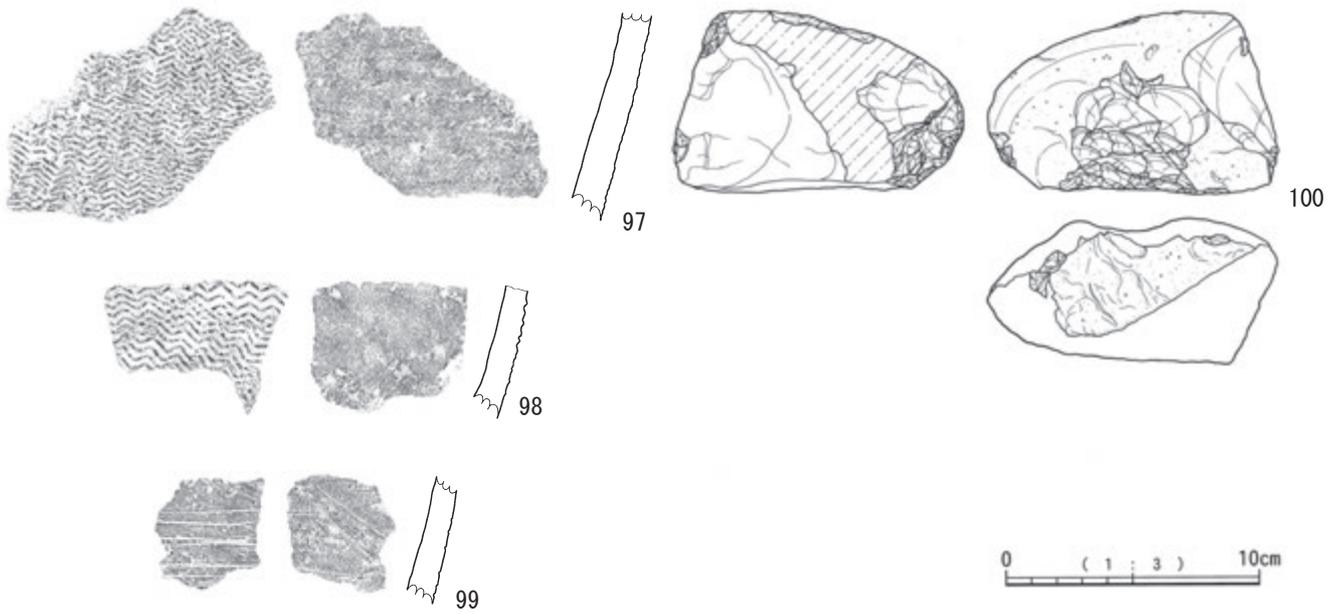


第41図 1・4トレンチ出土遺物



第42図 2トレンチ出土遺物

面調整を行わずに不定形剥片を剥出したことが伺える。94～96は、砂岩を石材とした石皿の破片である。94は、表面の右上部分に擦痕がほとんど確認できないが、顕著な磨面を呈する。95、96は、表裏の平坦面に擦痕があり、95の裏面には敲打痕が確認できた。



第44図 3トレンチ出土遺物



第45図 表採遺物

6 3トレンチ（第43図）

調査区西側に2トレンチに平行する約22m×2mのトレンチを設定し3トレンチとした。トレンチ北側でⅡa層から遺物が確認できたため、途中で人力掘削に切り替えた。3トレンチ南側は、Ⅳ層また先行トレンチ設定場所ではⅤ層まで確認することが出来たが、北側半分はⅡa層までの掘り下げとなった。

（1）遺構

遺構は、溝状遺構（SD 9）を1条検出した。SD 9は、幅約4mで3トレンチ中央付近に東西に走り、その上に帯状硬化面を2条検出している。

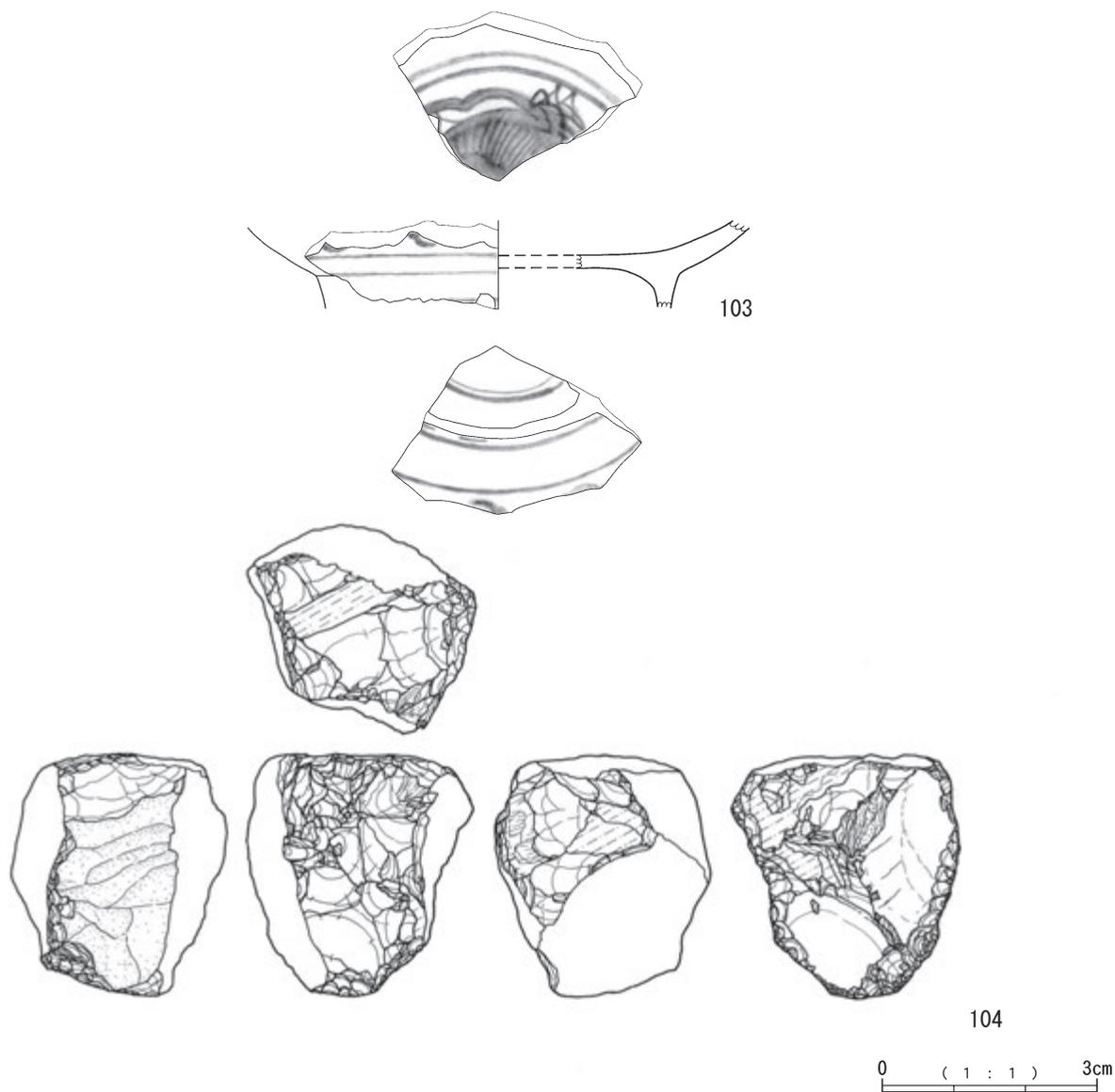
（2）3トレンチ出土遺物（第44図）

遺物は、土器7点、石器1点、フレーク5点、陶磁器4点、土師器1点が出土した。小片が多いため、土器3点、石器1点を掲載する。

97, 98は、南側に設定した先行トレンチ内から出土した縄文時代早期の山形押型文土器の胴部片である。98は、施文はやや斜位を呈し、粘土接合帯で剥離しており、擬口縁を呈する。99の文様は、横位を意識しているがわずかに斜位を呈している。器壁は1cmとやや厚手であり、胎土に角閃石や小礫を含んでいる。

100は、砂岩がホルンフェルス化した風化礫からかなり大きな剥片を剥出しようとした後、自然面の平坦面を打面としてさらに剥片をとろうとしたが、摂理で大きな剥片は剥出できずに破棄された残核である。

陶磁器は、出土した4点のうち3点は、近世のもので、大願寺の時代のものではなく、いずれも小片であるため掲載しなかった。1点目は18世紀末とみられる龍門司焼の碗、2点目は18～19世紀とみられる龍門司焼で器種は不明であるが皿もしくは碗であると思われる、3点目は19世紀の肥前系の皿



第46図 中近世出土遺物

である。

表採遺物（第45図）

表採遺物は、土器5点、石器1点、チップ4点、フレーク6点、陶磁器8点、土師器4点、瓦1点を採集したが、そのうち、ここでは土器2点を掲載し、青花1点、火打石1点は中近世の遺物として掲載する。

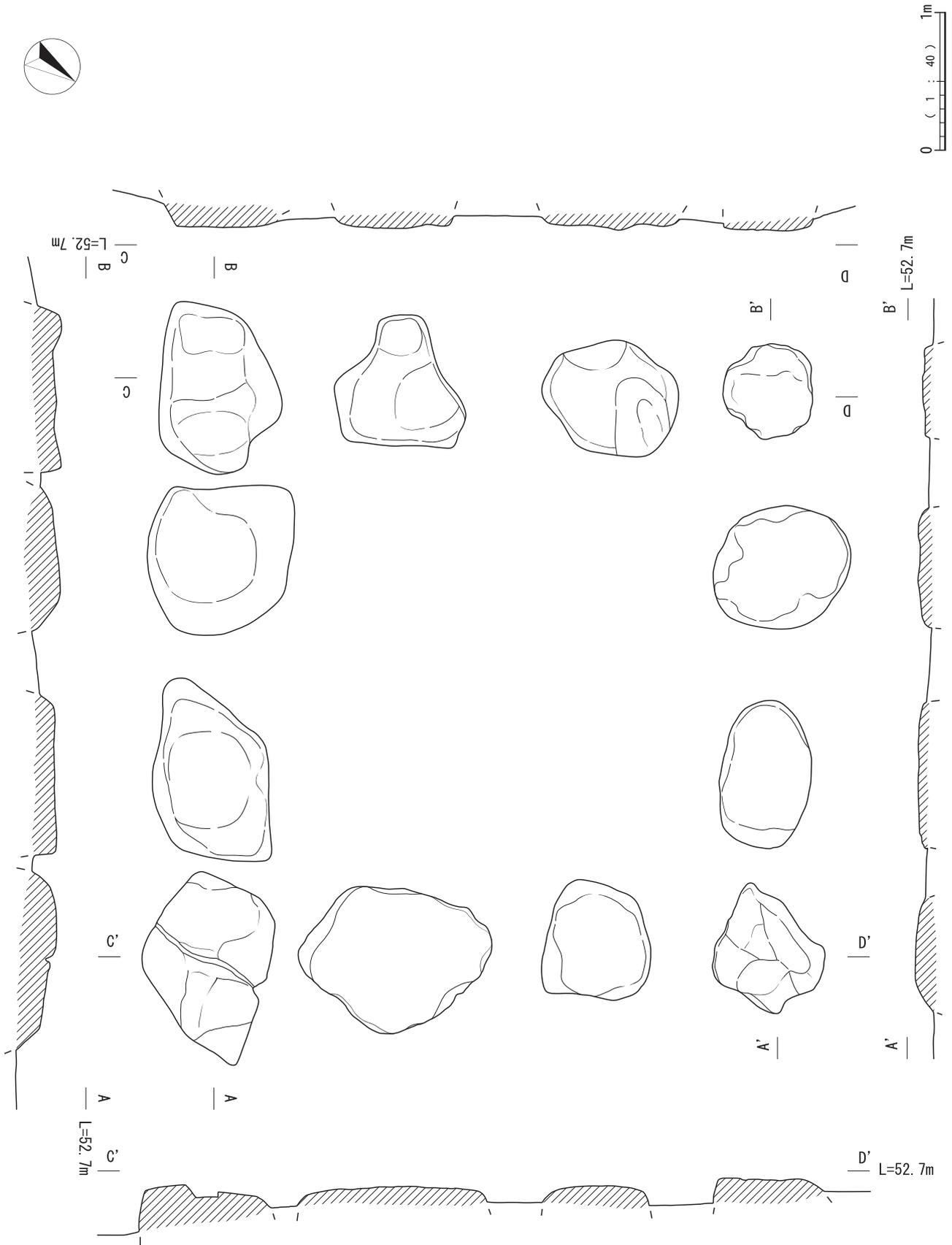
101, 102は、ともに古墳時代の成川式土器の土器片である。鐘撞き堂跡の調査の際に、礎石が並ぶ面から少し下るなだらかな斜面の礫集中部分で採集した。礎石下層は未調査であるため判然としないが、礫集中部分は、斜面の土が流れないように鐘撞き堂建立以降も転がった礫を積み直す等、原位置を保っていないと考えられる。古墳時代の土器が見つかった際も、礫と同じような意図で礫内に置かれていたので

はないかと考えられる。

101は、甕の脚部である。幅約1cmの工具によるハケ目が見られる。脚内部には、指頭圧痕が残っている。102は、甕の脚部である。胴部との境からハケ目が見られる。先端は、内面に粘土の接合痕を残しつつ、横方向のナデにより整えられている。

中近世の遺物（第46図）

103, 104は、先述の表採遺物に含まれるが、大願寺の時期相当と見られるため、中近世の遺物として別途記載した。103は、景德鎮窯の青花で碗の小片であり、高台部分が残る。見込み部分が緩やかに上がる特徴から饅頭心と考えられる。16世紀後半と推定される。104は、略方形を呈する石英の縁辺の角に何度もの打撃痕が見られることから、火打金



第47図 鐘撞き堂跡礎石図

は出土していないながら、火打石の可能性が高い。

鐘撞き堂跡（第47図）

調査区南側の台地の縁辺に、鐘撞き堂跡の礎石がある。約0.6～1.5mの大小12個の岩が使用されている。礎石は北西から南東を軸に、一辺約5mの方形に整然と並んでいる。

今回は、下層の調査は行わず、平面のみの実測を行ったため、礎石の大きさや鐘撞き堂の入り口の位置などは不明である。どの石もほぼ平面に近いが、中には凹んで平坦な部分をもつ礎石があり、鐘撞き堂の柱等を置いていた位置になるのではないかと考えられる。

第17表 大願寺跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	トレンチ	層位	取上番号	器種	部位	主文様・調整		色調		焼成	胎土				備考
							外面	内面	外面	内面		角閃石	長石	石英	小礫	
41	86	1 T	Ⅲ	5	壺	底部	ケズリ後 工具ナデ	ケズリ後 ナデ	2. 5YR4/6 赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	普通		○		○	底径12.6cm
	87	4 T	Ⅲ'	17	浅鉢	口縁部	凹線文	—	7. 5YR4/6 赤褐	5YR3/4 暗赤褐	普通	○			○	88と同一個体か 滑石入
	88	4 T	Ⅲ'	18	浅鉢	胴部	凹線文	—	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR5/6 明赤褐	普通	○			○	87と同一個体か 滑石入
42	89	2 T	Ⅳ	—	—	胴部	貝殻押引文	工具ナデ	7. 5YR4/3 褐	10YR5/3 にぶい黄褐	普通			○	◎	
	90	2 T 先行トレンチ	Ⅳ	—	—	頸部	貝殻連点刺突・ 沈線	工具ナデ	7. 5YR5/4 にぶい褐	7. 5YR4/3 褐	普通	○		○	○	
	91	2 T 先行トレンチ	Ⅳ	—	—	胴部	縄文・沈線	—	7. 5YR5/4 にぶい褐	7. 5YR4/3 灰褐	普通		○	○	○	
	92	2 T	Ⅳ	—	深鉢	胴部	凹線文	ナデ	5YR6/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	普通		○	◎	○	赤色顔料の可能性
44	97	3 T 先行トレンチ	Ⅴ	21	—	胴部	山形押型文	—	10YR5/4 にぶい黄褐	7. 5YR6/4 にぶい橙	普通	◎	○	○	○	
	98	3 T 先行トレンチ	Ⅴ	—	—	胴部	山形押型文	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	普通		○	○	◎	
	99	3 T	Ⅳ	—	—	胴部	工具ナデ 沈線	—	10YR4/2 灰黄褐	10YR3/2 黒褐	普通	○		○	◎	
45	101	鐘撞き堂 礎石	—	—	壺	脚部	ケズリ	工具ナデ 指頭圧痕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	普通			○	○	
	102	鐘撞き堂 礎石	—	—	壺	脚部	ハケ目 ケズリ	ナデ 指オサエ	5YR4/6 赤褐	10YR5/4 にぶい黄褐	普通	○		◎	○	

第18表 大願寺跡出土陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	種類	トレンチ	層	取上番号	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土の色調	記号	産地	年代	備考
46	103	陶磁器	碗	青花	表採	—	—	—	—	4.8	—	—	—	中国	14C	景德鎮窯

第19表 大願寺跡出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	トレンチ	遺構	層	取上番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
42	93	二次加工剥片	2 T	—	Ⅳ	—	(6.7)	(9.7)	2.2	440.0	砂岩
	94	石皿	2 T	—	Ⅳ	—	(9.6)	(6.4)	7.3	347.0	砂岩
	95	石皿	2 T	—	Ⅳ	—	(6.7)	(7.7)	5.7	502.5	砂岩
	96	石皿	2 T	—	Ⅳ	—	(4.2)	(9.8)	3.8	133.2	砂岩
44	100	石核	3 T	—	Ⅴ	—	7.2	11.4	5.8	527.5	砂岩
46	104	火打石	表採	—	—	—	3.4	3.1	2.9	29.1	石英

第4節 小結

第3節の調査成果をもとに、大願寺跡についてまとめていきたい。

1 発掘調査

(1) 各トレンチ調査から

2, 3, 4トレンチで各々見られた溝状遺構及び硬化面は、川内川に面した台地縁辺に並行するように重なりながら延びている。(第48図) 各トレンチは約20m間隔があり、連続するものであるかは明確に出来なかったが、土地利用にあたっての規則性がうかがわれる。このような土地造成は、大願寺に関連するもの以外に考えにくい。

2トレンチで検出した土坑(SK 1)は、長軸約1.7m、短軸約1.2mの楕円形プランで、軸は南北を向く。検出のみで調査を終了したため、深さや共伴する遺物の検出はなく時代を特定するには至らなかったが、SK 1の検出層や検出時点の埋土からは中世の可能性が高い。

ピット(SP 1)は、調査区台地中央側で検出された。付近にも、円形状のプランが複数確認されたが、削平のため残存状態が悪く確認には至らなかった。1基のみの検出のため、建物などの復元には至らなかったが、台地中央側に集中するとなれば、台地縁辺、溝、柱穴の組み合わせは土地利用に規則性があつた点を補強する。

(2) 出土遺物から

今回の調査では、約90点の遺物が出土し、そのうち、図化に耐える土器12点、陶磁器1点、石器6点を図化した。

縄文時代早期の遺物として押型文土器が出土している。さつま町内では4遺跡で確認されている。甫立原遺跡の山形押型文は約10点出土しており、縦位で施文され、大きく外反する口縁部をもつものが多い。中津川城跡、虎居城跡の出土土器は、いずれも縦位で施文されている。松尾城及び宗功寺跡では、横位施文が報告されている。施文方法を見ると、大願寺跡出土の押型文土器は、山形は横位でやや斜位に施文されていることから、松尾城及び宗功寺跡とともに、それ以外の遺跡の土器よりも古いと推定される。

また、縄文時代早期の遺物として塞ノ神式土器が出土している。大願寺跡では塞ノ神式のA b式が出土しており、貝殻刺突文が施文されている。さつま町中津川堂脇遺跡でも、塞ノ神式土器が出土しており、小片であるが、32点出土している。棒状施文具での連点文や幾何学的な文様、貝殻刺突文、撚糸など特徴的な施文部分がしっかりと確認できる。施文方法から大願寺跡出土のものと比較すると、大願寺跡出土遺物の段階が古いと考えられる。

縄文時代後期の土器として、南福寺式土器が出土している。これまでさつま町での出土例はなく、今回の出土確認で、さつま町の縄文時代後期の様相が広がる。今後の類例をまちたい。

古墳時代は、成川式土器の土器片が出土している。1トレンチと鐘撞き堂礎石内から出土し、土器片のため、時期

などは不明である。101, 102は、鐘撞き堂礎石の南角(写真9)の手のひら大の礫が集中している一角から採集した。湯田原遺跡や京塚原遺跡等と同様で、大願寺においても台地上の畑地で広範囲に古墳の遺物が確認されている。礎石造成時の混入か、後世で出土した土器を礎石の礫内に混入したか、どのような経緯での混入か不明である。

また表採ではあるが、中世の遺物として景德鎮窯の青花の碗を採集した。大願寺跡は、耕作で大きく削平を受けており、遺物も原位置を留めていないものが多いと考えられるが、16世紀後半のものと同様に推定されるため、大願寺の時期に合致する遺物である。見込みの文様が部分的なため確認は難しいが、七宝文または宝尽くし文に類似している。

また、中近世の遺物として火打石を掲載した。火打金は出土していないものの、石英の縁辺の角に何度も打撃痕があるという特徴をもつため、火打石の可能性が高いと思われる。藤木聡氏は、火打石の石材について「鉄を削るに十分な硬さと縁辺の鋭さを必要とする点で、縄文時代の石鏃やスクレイパー等に用いられた石材種と共通し、メノウ・玉髄・チャート・石英・鉄石英・サヌカイト等が用いられた」としている(藤木2013)。大願寺跡出土のものも石英が石材となっている。また藤木氏が九州における火打石の産地及び火打関連地名の分布図を提示しているが、宮之城町角石という地名もあり、金鉱床もさつま町周辺に広がる。火打石の産地も近い環境にあつたと考えられる。

2 現地踏査及び聞き取り調査

聞き取り調査をおこなったところ、調査区は現在畑として利用されているが、昭和初期は養蚕が推奨され、調査区は桑の木畑として利用されていたようである。層位でいうとI～II層となり、桑の木の栽培も中世の包含層の削平の一つにつながつたと考えられる。また、そのため遺物も原位置をとどめていないものが多く、中近世の遺物とした陶磁器や火打石も表採となつたと考えられる。

現地踏査を行うと、周辺住民の方から集落の様々な場所に石造物があるという情報を得た。また、昭和50年代に古石塔調査を行っており、『南九州の石塔』古石塔調査特集号(3)で報告されている。そこで、大願寺関連の施設として、ここでふれたい。

(1) 大願寺関連の施設

『鶴田再撰方札帳』によると、大願寺には鉦光院・瑠光寺・大音寺・乗興院・清重庵・円通庵・堪真庵・了閑庵・フケイ庵・道光庵・鶴田村興禅寺の11の脇寺があつたとの記載がある。現在、確認できるのが、堪真庵、興禅寺の2つであり、大願寺関連の施設として、県指定史跡である開山堂跡や薬師堂跡も含めて記載する。

ア 開山堂跡(写真10)

開山堂跡には、約20基の墓石が方形に並んでおり、祁答院洪谷氏4代行重や5代重実の墓石がある。また、無縫塔

が7基並び、京都の五山である建仁寺、福岡の十刹である聖福寺、薩摩の諸山である正興寺などへ昇任した名僧や住職の墓石が並んでいる。

また、開山堂の西側にある3基の墓石は『禰答院記』内に行意、行祖、妙圓の3つの墓塔は開山堂の中に建てられていたとの記載があることから、最初の大願寺の位置はこの開山堂であっただろうとしている(室屋1980)。

イ 薬師堂跡(写真11)

薬師堂跡には、約40基の墓石が並んでいる。薬師堂跡の西側には禰答院渋谷氏の墓石で宝塔と宝篋印塔、一石五輪塔が並ぶ。7代重茂から8代久重、9代徳重、11代重貴、12代重武、13代良重の墓石である。東側には、歴代住職の無縫塔、五輪塔、宝塔が並ぶ。伊敷歴史研究会会長池田純氏によると、禰答院渋谷氏の宝塔は塔身が円柱型の特徴をもつ。禰答院渋谷氏は関東から配置されたため、県内に残る宝塔と特徴が異なるのだらうと見解を述べている。

『鶴田再撰方札帳』によると、この薬師堂が建立された際には、薬師如来の坐像が置かれ、足利義満の自署である

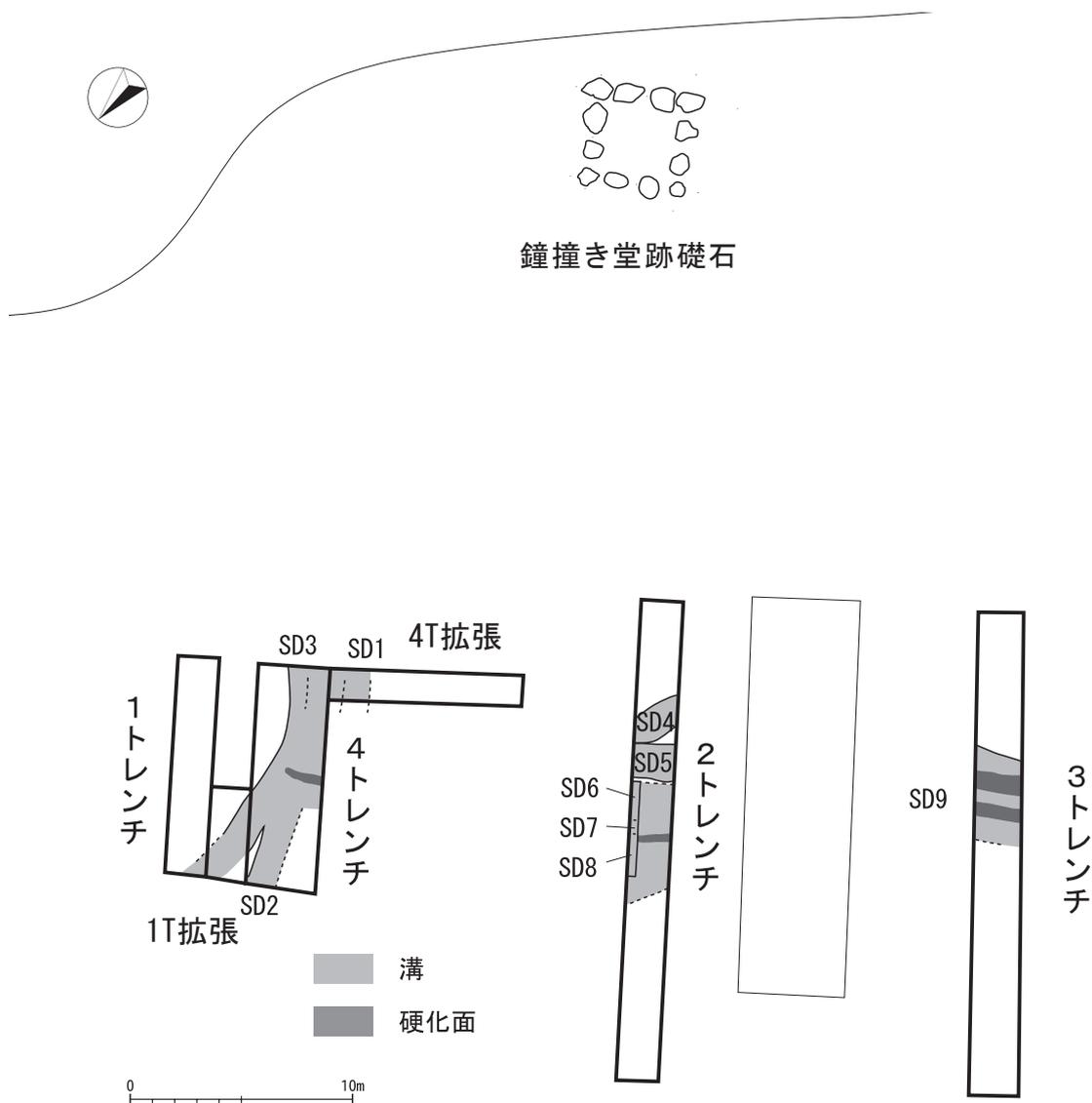
「醫王寶殿」の扁額が掲げられていたという。この扁額は、大願寺の沿革で先述したように、幾つかの寺院を経て、現在は日吉町の妙信寺本堂に掲げられている。

ウ 興禅寺跡(写真12)

興禅寺跡は尼寺跡であり、『鶴田再撰方札帳』に記載されている脇寺の一つである。開山堂跡や薬師堂跡、他の石塔群が置かれている場所は、台地上やすぐその一段下の間中に位置するが、興禅寺跡だけは川内川流域の低地に位置する。宅地に多数の墓塔があったものを昭和50年代の調査の際に整備し、35基の墓石が並ぶ。石塔のあった敷地内には、興禅寺の礎石が埋まっているとの伝承もある。興禅寺跡にも宝塔や宝塔的の五輪塔、宝篋印塔、一石五輪塔(写真13)が並び、「大姉」と刻まれているものも多く、「尼」の字も見られる。

エ 堪真庵跡(写真14)

堪真庵は、『鶴田再撰方札帳』に記載されている脇寺の一つで、現在、鐘撞き堂跡礎石の西側の台地縁辺に、約10基の墓石や石塔の残欠が並ぶ。以前、運動場として使用し



第48図 大願寺跡溝状遺構及び硬化面実測図

ていた広場の入口や隅に建っていたが、現在の場所に移設されている。墓石には、「禅師」や「童女」という文字が見られ、僧侶や女兒の墓であることが分かる。

オ お手水の石塔群（写真15）

国道267号線沿いの生コン会社付近の雑木林の中に約11基の石塔や残欠が並ぶ。そのうち2基は「大師」の文字が刻まれている。五輪塔や宝塔、他の石塔群で見られなかった石殿が3基並ぶ。年代の記載はないが、他の石塔群と同時期のものと考えられる。お手水の石塔群も11か所ある脇寺のうちの一つと思われる。

カ その他の石塔群（第38図）

上記に示した4か所以外の石造物について周辺住民の聞き取りにより情報を得た。今回の調査でまとめた大願寺に関連する石塔として第38図に示す。あわせて、古石塔群調査において調査・整備し、まとめられているものも、ここで触れさせて頂きたい。

まず、周辺住民の聞き取りから記載する。1つめは薬師堂と開山堂の間に位置し、台地と低地部の中間にあたる。現在は竹林になり、立ち入りが難しく、実際に確認することはできなかったが、古石塔群調査に掲載があるものと同一かと思われる。調査の報告によると15基並んでいるようである。2つめは、今回の調査区がある台地の北側縁辺にあたる場所で、ソーラーパネルの設置場所の近くだという。私有地であり、具体的な場所の確認はできず、数も不明である。「山中に入れば、まだあちこちに石造物がある」と多くの方が話されていた。

次に古石塔群調査で提示されていた地図もここに掲載させていただきたい。『南九州の石塔』古石塔調査特集号（3）の報告で掲載されている大願寺跡付近略図（第49図）には、今回確認できなかった石塔群の記録が2か所ある。調査によると、1か所は11基の石塔群、2か所目の数は不明である。

（2）鳥瞰図（写真17）

さつま町立柏原小学校校長室に鳥瞰図が残っている。調査時にご厚意で大願寺周辺部分の写真を撮影させて頂いた。そこには「大願寺沿革」が記載され、672年天台宗の霊場として創建、1364年に禰答院渋谷氏の菩提寺となり、明治維新の際に廃寺と書かれている。昭和15年頃の地名や史跡、建物等が簡易的に記載されている。現在の薬師堂跡の位置に「大願寺跡渋谷氏墓石」、開山堂跡に「薬師堂跡」とある。また、林の中に「墓石群」、今回調査を行った周辺には「良重息女墓石」の文字がある。石塔の整理や調査が昭和50年代に行われており、その際は薬師堂跡や開山堂跡は現在の位置にあり、相違がある。

3 大願寺の推定範囲

今回の発掘調査では、建物の跡は確認できなかったが、わずかに残る中世・近世相当層であるⅢ層内で溝状遺構及

び硬化面が確認でき、川内川に面した台地縁辺に並行するように延びている。何らかの土地利用があったことが伺える。また今回調査を行った調査区の周辺には、多くの石造物が点在している。聞き取りで上がった石造物の年代を確定するのは難しいと思われるが、地図上に石造物のドットを落とし、確認していくと、大願寺の脇寺等を含めたより正確な範囲が確認できるのではないだろうか。これらを含括してみると、大願寺は川内川から一段上がった低地部や今回調査対象地である台地部と広範囲にわたる。この範囲が、脇寺等を含む大願寺の範囲とされると考える。

【引用・参考文献】

- 藤木聡2013「発掘された火起こしの歴史と文化」『宮崎県文化講座研究紀要』宮崎県立図書館 編
- 室屋光義1980「鶴田町大願寺址墓塔群」『南九州の石塔』古石塔調査特集号（3）

【参考史料】

『鶴田再撰方札帳』



第49図 大願寺跡付近略図（室屋1980）



写真9 鐘撞き堂跡



写真10 開山堂跡



写真11 薬師堂跡



写真12 興禅寺跡



写真13 一石五輪塔



写真14 堪真庵跡



写真15 お手水の石塔群



写真16 現地指導：池田純氏



写真17 大願寺跡周辺 鳥瞰図（柏原小蔵）

第5章 総括

第1節 廃寺は語る！よみがえる鹿児島島の仏教文化事業

1 調査成果から

(1) 光台寺跡

今回の調査区において、建物跡は検出できず、光台寺の位置特定には至らなかったが、光台寺に関する建物は、調査区と今和泉島津家墓所の間にあった可能性が高まった。

調査区の土層から、元々傾斜がある地形を平坦な土地にすべく造成を行っていることが分かった。2トレンチで確認された、造成土と異なる石垣へ向かって入る土を裏込め埋土(図版1②)と表記したが、石垣裏面の調査は、安全面から掘削を断念し確認できていない。今回、光台寺跡において現存する石垣とその周辺を発掘調査したが、石垣は明治時代遺構に様々な要因において改修されて現在に至ることが明らかとなった。石垣は、石材となる熔結凝灰岩が豊富にある南九州において、街並みにおける重要な構成資産である(鯨坂・増留2020)。その構造に関しては、発掘調査が実施されていないことなどにより不明な点も多く、今回の調査においても石垣の構造までは至っていない。今和泉島津家墓所をはじめとする鹿児島島津家墓所の取り組みにおいても、石垣の構造までは踏み込んでいない。これは、墓所を構成する石造物や付随する遺構などの把握を優先したためであり、保存目的の調査のため、あえて実施しなかったと解釈される。数少ない事例としては、鹿児島市寿国寺跡の発掘調査事例があり、背面構造として直径が10～30cmの軽石を含む凝灰岩等を用いた裏込めがあり、基礎に胴木が敷設されていた。胴木は、標高13mの低地部において軟弱地盤への対応として用いられた可能性がある。このような構造が一般的な普請であったのか、将来の発掘調査においてはこれらの視点からのアプローチも必要である。

光台寺跡の出土遺物についての特徴は、陶磁器と瓦が多いことである。今和泉島津家が最上位家格「一門家」であり、光台寺はその菩提寺であるが、出土遺物においてその特徴は見ることは難しかった。しかし琉球陶器など出土があり、琉球との貿易を行う港のある町としての特徴はみることができた。

陶磁器は、中世の遺物が数点出ているが、主として18～19世紀の碗や土瓶、播鉢などが出土している。光台寺が創建された時期とも重なる。また、瓦は15点出土したうち2点が刻印瓦であり、出土した刻印瓦は、鹿児島城出土の瓦と類似する。在地の瓦だけでなく、鹿児島城出土と同様の瓦を使用していたとすれば、島津家につながる遺物の一つとしてみることもできる。

(2) 照信院跡

照信院跡の調査において、複数の遺構を検出した。まず、溝状遺構を境にして、礫敷の面の有無が確認されたことであ

る。寺院と他の区域を分ける回廊またはそれに付随するものである可能性が高く、照信院跡においては『三国名勝図会』の絵図にある施設配置が発掘調査で検出した遺構の配置に近い記録であったといえる。また、小礫を伴ったピットは、小礫が一字一石経の可能性もあり、宗教の様相が窺え、照信院につながる遺構と考える。

照信院跡の遺物の特徴で留意する事としては、土師器と陶磁器の年代観が異なる点である。土師器は14世紀前後のものが多く、陶磁器は、薩摩、肥前系の18世紀から19世紀以降のものが中心となる。第3章小結にもまとめたが、照信院の中興、再興に島津氏との関わりが非常に大きく、それが遺物にも反映されているのではないかと考える。飯福寺と島津氏との関わりは、『飯隈山由緒帳』の沿革にも記載されている建治2(1274)年に島津久経が飯福寺を訪れ、寂れがちであった権現宮が再興されている。当時の別当坊であった覚進上人を中興の開山と言っていた。1274年は文永の役の年であり、鎌倉幕府が異国降伏のために祈願を命じたことから、島津久経の飯福寺の参詣に繋がったようである。室町時代後半になると、肝付氏と島津氏の戦いが何度も行われたが、その際は飯福寺の別当となっていた救仁郷氏は島津氏に協力し、戦いに臨んでいる。また、江戸時代になると慶長6(1601)年に義久が本社や稲荷、愛宕の建立や権現社等の修理を、吉貴は享保3(1718)年に飯隈山の造営を行っている。このように、久経の参詣、別当坊以降、権現宮は島津氏の祈願所になり、氏久、家久、綱貴、重年の記録が残されており、島津氏との強い繋がりが見える。

(3) 大願寺跡

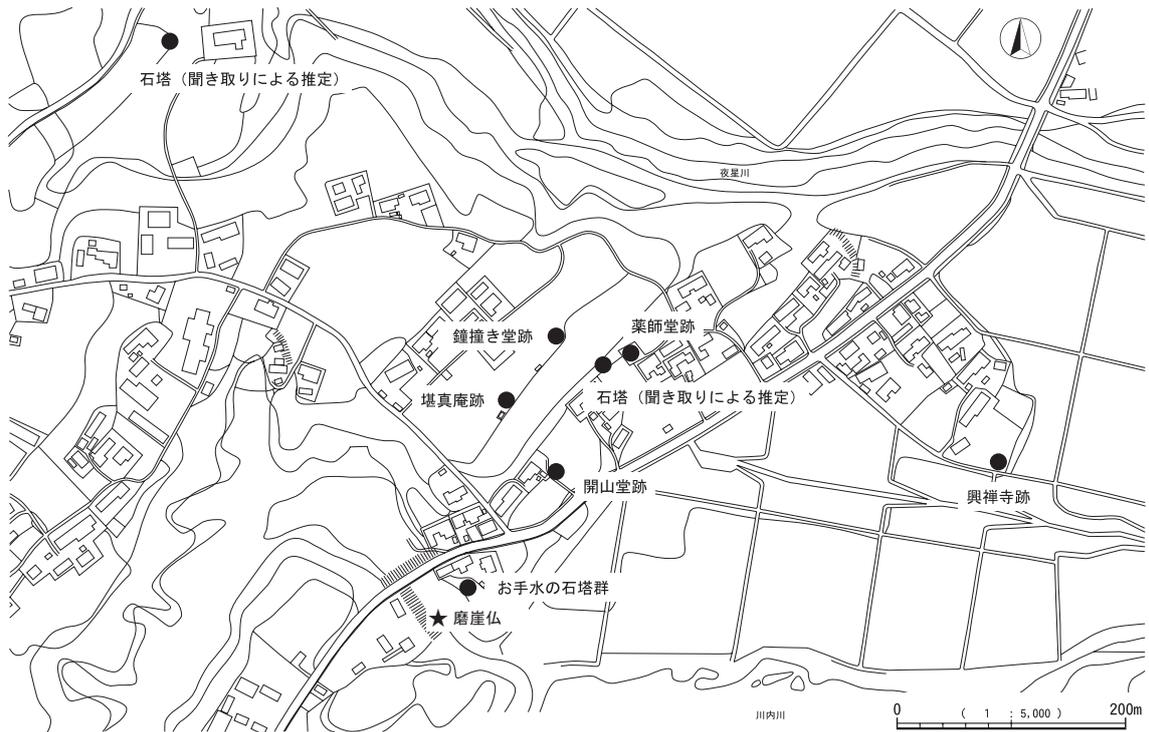
大願寺跡の調査では、建物跡は検出されなかったが、各トレンチで溝状遺構及び硬化面が見られ、川内川に面した台地縁辺に並行するように重なりながら延びている。検出された溝状遺構が、連続するものであるかは明確ではないが、土地利用にあたっての規則性が窺われ、この土地造成は、大願寺に関連する可能性が考えられる。

脇寺の存在は史料にも記されているが、どの寺がどこにあったのか多くが定かではない。しかし、聞き取りや古石塔調査から、様々な場所に石塔群が点在しており、この範囲が脇寺の範囲であると考えられる。このように石造物の広がりから寺域を考えると、創建当時「醫王寶殿」の扁額が薬師堂に掲げられ、大願寺から京都の建仁寺や福岡の聖福寺へ配置される僧侶の存在など、大願寺の規模を窺い知ることができる。

大願寺跡の時代に相当する遺物としては、青花や火打石を掲載した。今回の調査では、表採遺物のみとなる。残念ながら、大願寺に関連する仏具等の出土はなかった。陶磁器等が数点出土しているが、近世のものである。大願寺がすでに廃寺になったあとも土地利用があったことが窺える。

今回の発掘調査では寺域特定には至らなかったが、発掘調査終了後、さつま町教委の現地踏査により長い間所在不明となっていた磨崖仏が再確認された。町教委の許可を得て、地図や写真を示す(第50図、写真18～20)。第4章の小結で大願寺に関する石塔群について記載したうち、お手水の石塔群が最も近くに位置する。磨崖仏は、お手水の石塔群と沢を挟んだ国道267号線沿いの崖面で発見された。さつま町教委によると、発見されたのは、種子梵字や碑文、石塔の基壇で

ある。種子梵字は、約50センチ四方の大きさで、バン(金剛界大日如来)と思われる種子梵字が刻まれている(写真18)。また石塔基壇は、種子梵字の位置から更に東側へ斜面を登った位置にあり、形はほぼ正方形で上面には蓮台と思われる花卉状の意匠が刻まれており、宝塔や荘厳が施された五輪塔などの基壇ではないかと思われる(写真19)。そして、碑文は、石塔基壇の周辺の崖面で見つかり、「□□大公禪師」などの文字が刻まれているのを確認している(写真20)。



第50図 磨崖仏発見位置



写真18 種子梵字

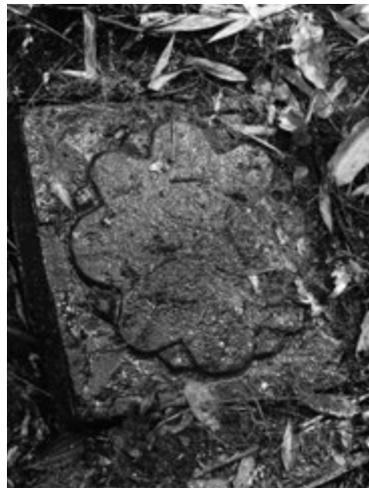


写真19 石塔基壇



写真20 碑文

2 文献調査から

近世の寺院を示す史料としては、『薩藩名勝志』や『三国名勝図会』等が著名である。照信院はこの中に収録されているが、光台寺と大願寺はわずかにふれられるにとどまる。また、光台寺は「相州時衆藤澤山の末寺」であり、『藤澤山衆領軒』に絵図が収録されており、光台寺と照信院は当時の様子を伺い知ることができる。一方で大願寺は絵図の記録はない。これは両史料が近世後半に作成されたものであり、大願寺は近世末には廃寺になっていたためと考えられる。

現在の鹿児島県を含めた旧薩摩藩領内で廃寺となった寺院は1066と言われており、これは担当者の一人である市来四郎自身が後年になって話した内容によるもので(市来1893)、当事者の証言として無条件に受け入れられていた。このことに対し、栗林文夫氏は「18世紀後半頃より以前のある時点での状況を反映した数字」であることを指摘し、慎重に検証することの必要性を述べた(栗林2020)。『三国名勝図会』に記された寺院は約560か寺であり、栗林氏が挙げた藩政期の記録類から得た寺院数も文献が執筆されたその頃を示しているものであり、栗林氏も指摘するように一様ではない。当事業が対象とする鹿児島県の寺院数は、改めて指摘するまでもないが、1066を遙かにしのぐ。現に、今回発掘調査を実施した大願寺跡は、江戸時代前半に廃寺となっており、1066か寺には含まれない。

3 「廃寺は語る！よみがえる鹿児島の仏教文化」事業を通して

文化庁は、平成10年の通知の中で、埋蔵文化財の対象を「中世までに属する遺跡を原則」としているが、近世に属する遺跡については、「地域において必要なものを対象」としている。明治元(1868)年に明治政府は神仏分離令を発し、鹿児島県においては激しい廃仏毀釈運動に発展した。すべての寺院は破壊され、鹿児島の仏教文化は壊滅的なダメージを受けることとなった。鹿児島には、江戸以前の寺院は存在しない。これは、全国的にみても突出した歴史的事象である。現在、埋蔵文化財包蔵地として周知化されているものは約300か所である。県内における寺院跡の現況は様々であり、地下にはまだ多くの痕跡が残されていることも、開発に伴う発掘調査により明らかになってきている。しかし、近年の被害や地震等の自然災害により、突如として失われる文化財も見受けられる。このままでは、地面の中に眠る寺院跡の情報もすべて失われてしまう。今後、調査の精度を高めていく必要があり、何らかの形で現在の地図等に示していくことも廃寺を捉えるためには必要な作業である。

今回、「廃寺は語る！よみがえる鹿児島の仏教文化」事業において、県内の廃寺の中から光台寺跡、照信院跡、大願寺跡の3か寺にスポットを当てて発掘調査を行った。光台寺跡、照信院跡については、廃仏毀釈において廃寺となっており、『三国名勝図会』や『藤澤山衆領軒』など文献に絵図が残り、建物の配置などを参考に調査を進めることができた。

大願寺跡に関しては、先述のとおり踏査による成果もあがっている。また、地域に残る史料も、貴重な情報源となる。さらに、廃寺に関連する石造物など現地踏査を行い、現在の地図に記録を落とししていくことで、当時の寺域などを知る手がかりとなる。地域をよく知る周辺住民への聞き取りを含めた現地踏査はこれらをさらに深めることになる。今回、事業を実施していくなかで、関係する3市町の方々に多くの協力いただいた。発掘調査や石造物の踏査は、多くの土地所有者の理解や協力を得て実施することが出来た。その際には、これまで、伝えられてきた石造物を大事に、守り続けている思いにも触れる事が出来た。踏査を行う際は土地所有者等へ十分に配慮する必要がある。改めて述べるまでもないが、廃寺について土地の来歴を明らかにしていくには、発掘調査だけでなく、文献調査と現地踏査を組み合わせる必要があることが重要である。

第2節 廃寺関連調査

1 廃寺の実態把握

近世以前の寺院に関する建造物は、さつま町興栓寺にその一部が現存する以外、廃仏毀釈等により全て破壊されてしまった。このため、建物の規模や配置などは、残された絵図や文書等の歴史史料、現存する石垣や石塔などの石造物によって推察するしかなく、発掘調査は、建物の基礎などの遺構が検出されることで、これを知りうる有効な手段である。いくつか事例を紹介したい。

志布志市宝満寺跡では、本堂跡を把握する目的で発掘調査を実施している。残念ながら、これを捉えることは出来なかったが、3か年に渡る確認調査の結果、13世紀末から14世紀にかけての製鉄跡が発見されるなどの成果が得られている。

南さつま市常潤院跡では、地下遺構の有無を把握する目的で発掘調査を実施し、坪地業を検出して建物を把握し、さらにその範囲を、地下レーダー探査を実施することにより遺構分布推定範囲を図示した。

鹿児島市清泉寺跡では、規模構造と石造物を把握するための調査が実施されている。明確な規模構造を知りうるような成果は得られていないが、県内最古の紀年銘を有する磨崖仏周辺の様相が見えてきている。

開発に伴う発掘調査で廃寺が調査対象となった事例として、鹿児島市寿国寺跡では、約2m四方の石組が検出され、周辺に一边約8mの石列と共に絵図面に記された門前池の可能性が指摘できる成果が得られた。これより10m西側にピット群や井戸跡なども検出され、併せて検出された墓も含めると、門前池、建物、墓地の関係がわかる成果が得られた。

いちき串木野市栢城跡では、「岩水山良福寺水天善神」銘の碑をもつ井戸跡や近世墓群、良福寺和尚の墓石(第十世松山和尚と第十四世萬春和尚)が廃棄された状態で検出されている。遺物等も宗教的様相をもつものが出土しているが、良福寺歴代住職の墓石が、前半は出土し、後半は文献比定

地の近くに存在することなどから、良福寺跡あるいは宗教関連施設が検出されたとしている。

2 石造物の地下構造把握

伊佐市広徳寺跡古墓や王城古墓の調査では、自然石の積石台座が残る第3号土坑墓からは人骨が検出され墓碑から1708年と特定できる。

宗功寺跡では、六地藏塔に近接してトレンチを設定して、現存する六地藏塔が移設されてきたという口伝の検証を基礎構造の有無で実施している。

第3節 廃仏毀釈の概要

今回の事業では、鹿児島県において廃寺となった全ての寺院が対象にあたるが、その多くが廃仏毀釈により廃寺となった点は非常に大きい。そこで、廃仏毀釈について、また鹿児島におけるその経緯について最後に述べておきたい。

廃仏毀釈とは、慶応4(1868)年3月13日から明治元(1868)年10月18日までに相次いで出された太政官布告などの総称である神仏分離令によって起こったものである。日本の仏教は、6世紀に伝来して日本固有の神と結びつき、19世紀半ばまで、寺院は神社と共存していた。千年以上長い間、神仏習合の状態にあったと言える。だが、廃仏毀釈が徹底された鹿児島県において、この様子を窺い知ることはほとんどできない。

明治初年の廃仏毀釈は、突如として起こった訳ではなく、江戸時代後期において、儒学者の間で仏教批判が始まり、復古神道を唱える国学者がそれに次ぐといった動きがあった。神道から仏教色を排除するというもので、薩摩藩でも寺院整理につながっていった。

慶応元(1865)年春、藩士の一部が水戸藩で起きた廃仏の断行や僧侶の還俗を薩摩藩でも実施すべきと家老の桂久武に進言し、これが取り入れられる。慶応2(1866)年5月には寺院処分の取調局が設置され、調査の結果、寺社所領石高1万5018石、僧侶総数2964名という報告がなされる。当時、寺院は税金が免除され、堂宇の修繕や祭事には藩の費用が充てられており、財政に占める割合が大きかったことが明らかとなった。慶応2(1866)年9月17日には、霧島神宮にて後醍醐院真柱により神仏分離の祭文が捧げられ、12月には家老桂久武が寺院廃合掛を命ぜられている。

これに先立ち、慶応2(1866)年7月27日には蒲生郷において郷内の2寺を配して文武の2館を造立したい旨の願いが提出されている。

明治2(1869)年3月に藩主忠義夫人が死去し、知政所から神式での葬儀が告示されると、島津家縁の寺院についても廃寺の対象となっていく。11月には、島津家の菩提寺である福昌寺をはじめとする島津家縁の寺院や名利が廃寺となり、藩内にあった全ての寺院が廃寺となった。この寺院数について、市来四郎によると1066寺院であったと述べている。

やがて、明治9(1876)年に信仰自由の布達によって寺院

が再興されていくが、江戸時代の薩摩藩で信仰が禁止されていた浄土真宗が最大勢力となるという現象が生じることとなった。

薩摩藩内において廃仏毀釈が徹底された理由については、多くの先学が指摘しているところであるが、栗林文夫氏は「①鑄銭事業を契機とした梵鐘鑄つぶしが、廃仏毀釈のハードルを低くしたと思われる。またこれより先、斉彬が梵鐘を集め置いたことは、後人に彼の意思が廃仏にあったと思わせる効果があった。②江戸時代には僧侶自身も宗門改の役人の改めを受け、職能も他藩の僧侶より狭く、社会的地位も高くなかった。③民衆のほとんどが隠れ念仏の信徒で、表面だけの各宗旨の檀那寺についていた。④寺請制度が薩摩藩にはなく、寺院と民衆との直接的関係が見出しにくい。⑤廃寺によって色を失った僧侶に食料を給与し、希望者は兵士・教員・巡査・官吏に採用するなど、その生活を保障した。⑥薩摩藩の地理的位置が九州の最南端にあり、外からの情報が入りにくかった。これらの諸事情が複雑に絡まりながら、薩摩藩の廃仏毀釈は日本で最も徹底して実施された」と6つの点を指摘している(栗林2022)。

以上のように、灰燼に帰したかに見える鹿児島県内の仏教文化であるが、近年、仏像所在調査を進めた結果、県内で500軀を超える仏像の存在が確認(切原2017)され、「これらの仏像は文字によらない抵抗の証と評価することができる」とされた(栗林2022)。

なお、廃仏毀釈前の寺院を知る手がかりとしては『神社調』があり、これでは山号、宗派名、寺院名、開山者と開山の経緯、由緒、寺院に伝わる文書や末寺の位置などが記載されている。

第20表 鹿児島の廃仏毀釈関連年表

No.	年号	西暦	月日	主な出来事	出典
1	安政2	1855	4月	斉彬が梵鐘大小百余口・種々の仏具を引き揚げ、大砲製造所へ集め置く。	斉彬公史料3巻583号
2				記録奉行伊地知季安、藩内寺社の文書等調査条目を通達。	玉里島津家史料1巻387号
3	文久2	1862	11月	寺社奉行、鹿児島城下寺院調査(寺院住持・兼任持番・破壊地の報告)につき届書きを出す。	玉里島津家史料1巻387号
4	文久3	1863年	4月3日	梵鐘大小287口を琉球通報鑄造のための材料とするよう達せられ、本日より、毀滅に着手。	市来史郎日記
5			5月25日	千眼寺を寿国寺に合併、千眼寺知行高400余石は、救土用途に官収される。	忠義公史料2巻336号
6	慶応元	1865	春	藩士の数人が、水戸藩の例にならぬ、廃仏断行・僧侶の還俗を家老桂久武に建議。	忠義公史料1巻544号
7			5月	寺院廃合取調局を設置。	忠義公史料4巻147号
8			7月27日	蒲生郷役人、郷内の2つの寺を廃して文武の2館を建造したい旨を寺院取調方掛役に請願する。	鹿児島県史第3巻
9	慶応2	1866	9月17日	霧島神宮宝前に後醍醐院真柱の作で神仏分離の祭文(仏法・僧侶を非難し、由緒なき寺院の取り除き、神道の宣揚)を捧げる。	鹿児島県史第3巻
10			10月10日	日向国高城郷では、廃寺方が任命され、寺院の悉皆調査が行われる。	鹿児島県史第3巻
11			12月	家老桂久武、寺院廃合掛を命ぜられる。	鹿児島県史第3巻
12	慶応4	1868	3月17日	神祇事務局から神仏判然令が出される。	鹿児島県史第3巻
13			閏4月	神仏分離を藩内に布告して、寺院を廃合する。	鹿児島県史第3巻
14			3月25日	藩主忠義夫人暉子の葬儀を神式で執行。藩主一家が仏教から離脱する意志を表明。	忠義公史料6巻214号の8
15			3月	鹿児島城内の護摩所・看経所等を取り除く	鹿児島県史第3巻
16			6月12日	島津家歴代の霊位を神道を以て祭る。	忠義公史料6巻332号
17	明治2	1869	6月25日	中元・盂蘭盆会は領國中一同に禁止。祖先の祭祀は、仲春・仲冬の2度執行すべしとの布達。	忠義公史料6巻349号
18			8月8日	寺領を没収し、寺院の自滅を図る。合計4,209石余りを藩庫に没収。僧1人に1日5合の養料が給与される。	鹿児島県史第3巻
19			11月24日	大龍寺以下の名刹28か寺が廃寺になる。	鹿児島県史第3巻
20			11月	一乗院、福昌寺、大乘院、照信院、宝満寺、専修寺の6寺も廃寺となる。(廃仏毀釈完了)	鹿児島県史第3巻
21	明治4	1871	正月20日	十二夜・庚申祭などは仏家の余習であるので廃止。	鹿児島県布達下181号
22			7月13日	僧・尼類の藩内出入りを禁止。	忠義公史料7巻132号
23	明治9	1876	9月5日	信仰の自由を布達する。	忠義公史料7巻890号
24	明治11	1878		鹿児島の相国寺、福昌寺、長島の長光寺が復興。	鹿児島県史第3巻
25	明治12	1879		志布志の大慈寺、鹿児島の大乗院、出水の浄円寺が復興。	鹿児島県史第3巻
26	明治13	1880		鹿児島の常楽院、南林寺、野田の感応寺、出水の龍光寺、伊集院の妙円寺が復興。	鹿児島県史第3巻
27	明治14	1881		鹿児島の不断光院が復興。	鹿児島県史第3巻
28	明治16	1883		鹿児島の浄光明寺、西之表の本源寺が復興。	鹿児島県史第3巻

【引用・参考文献】

- 市来四郎 1893 「薩摩にて寺院を廃し神社を合祭せし事実」
『史談会速記録』第13輯
- 鹿児島県 1941 『鹿児島県史』第3巻・第4巻
- 安丸良夫 1979 『神々の明治維新』岩波書店
- 名越 護 2011 『鹿児島藩の廃仏毀釈』岩波書店
- 秋吉龍敏 2013 『薩摩の廃仏毀釈』（一）敬天愛人第31号
- 秋吉龍敏 2014 『薩摩の廃仏毀釈』（二）敬天愛人第32号
- 名越 護 2011 『鹿児島藩の廃仏毀釈』岩波書店
- 切原勇人 2017 「守り伝えるかごしまの仏たち～守り伝える
祈りの造形～」鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 小水流一樹2017 「鹿児島における廃仏毀釈の思想的原動力」
『黎明館調査研究報告』第29集鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 鱒坂 徹・増留麻紀子 2020 「麓のみちと石垣」『麓まち歩き
マップ2020』鹿児島大学工学部建築学科 鱒坂・増留研究室
- 栗林文夫 2022 「薩摩藩の廃寺数は一〇六六ヶ寺か」『日本歴史』第888号 日本歴史学会編集 吉川弘文館
- 栗林文夫 2022 「序論 問題の所在と中世南九州の寺社研究」
『中世南九州の寺社と地域社会』戎光祥出版
- 日限正守 2022 「解題」『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 神社
調1』鹿児島県歴史・美術センター黎明館
- 鹿児島市教育委員会 1991 『鹿児島寺院跡－近世寺院跡調査
報告書－』鹿児島市文化財報告書（7）

写真図版



① 2トレンチ西側土層断面 ② 2トレンチ北側裏込埋土 ③ 1トレンチ全景
④ 2トレンチ 土坑 ⑤ 2トレンチ ピット



①



③



②



④

① 2トレンチ遺物出土状況

② 2トレンチ全景

③ 3トレンチ全景

④ 3トレンチ板石



① 1トレンチ全景 ② 1トレンチ造成面 ③ 7トレンチ全景
④ 4トレンチ全景 ⑤ 7トレンチ 礫・溝状遺構



① 3トレンチ全景 ② 5トレンチ かまど状遺構 ③ 5トレンチ ピット8・9
④ 5トレンチ ピット10 ⑤ 8トレンチ 礫・溝状遺構



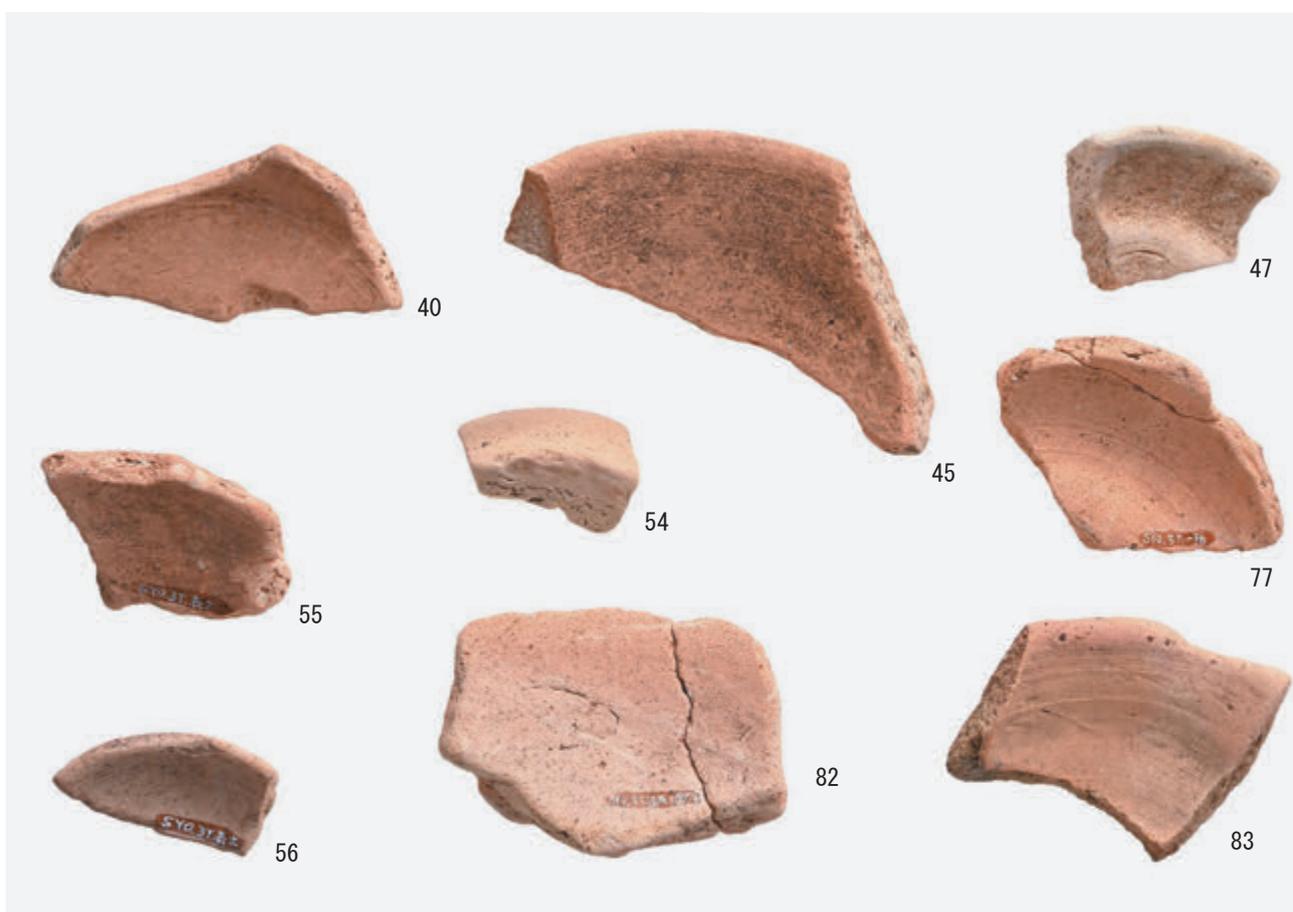
① 1トレンチ全景 ② 4トレンチ 拡張部分 ③ 4トレンチ 溝状遺構1～3

図版6 大願寺跡 2・3トレンチ

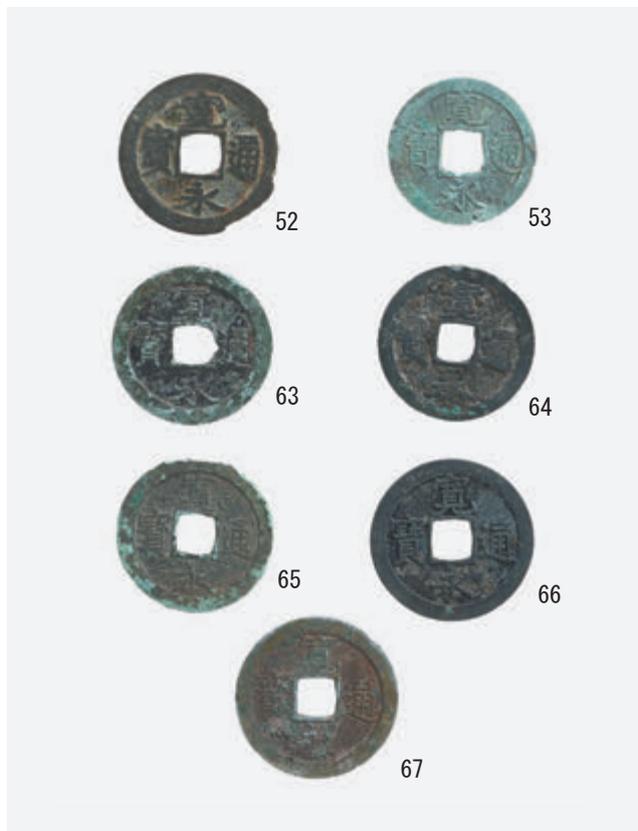
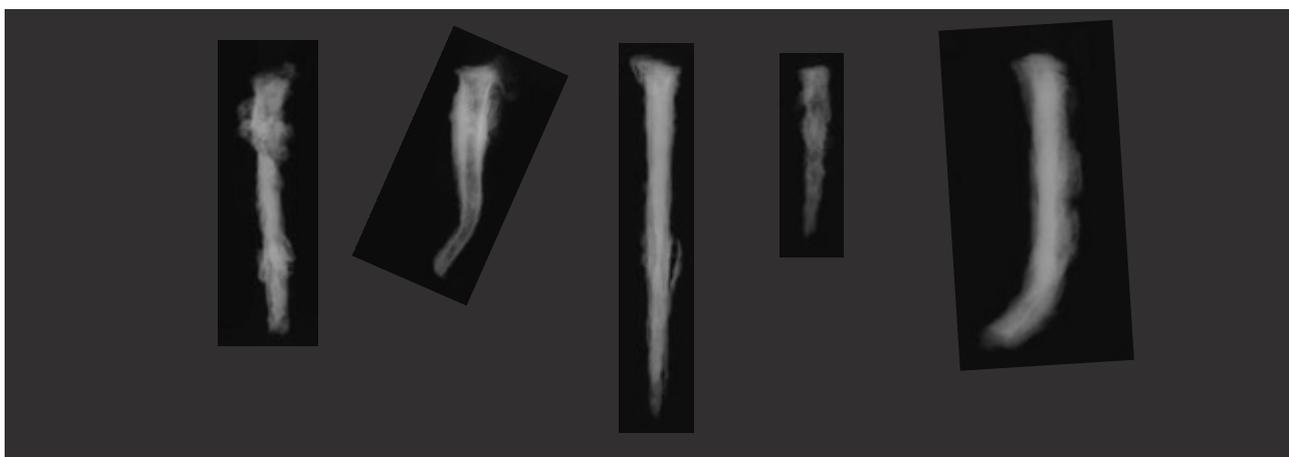


① 2トレンチ全景 ② 3トレンチ全景 ③ 2トレンチ 溝状遺構6～8
 ④ 2トレンチ 土杭・溝状遺構 ⑤ 2トレンチピット ⑥ 3トレンチ下層確認

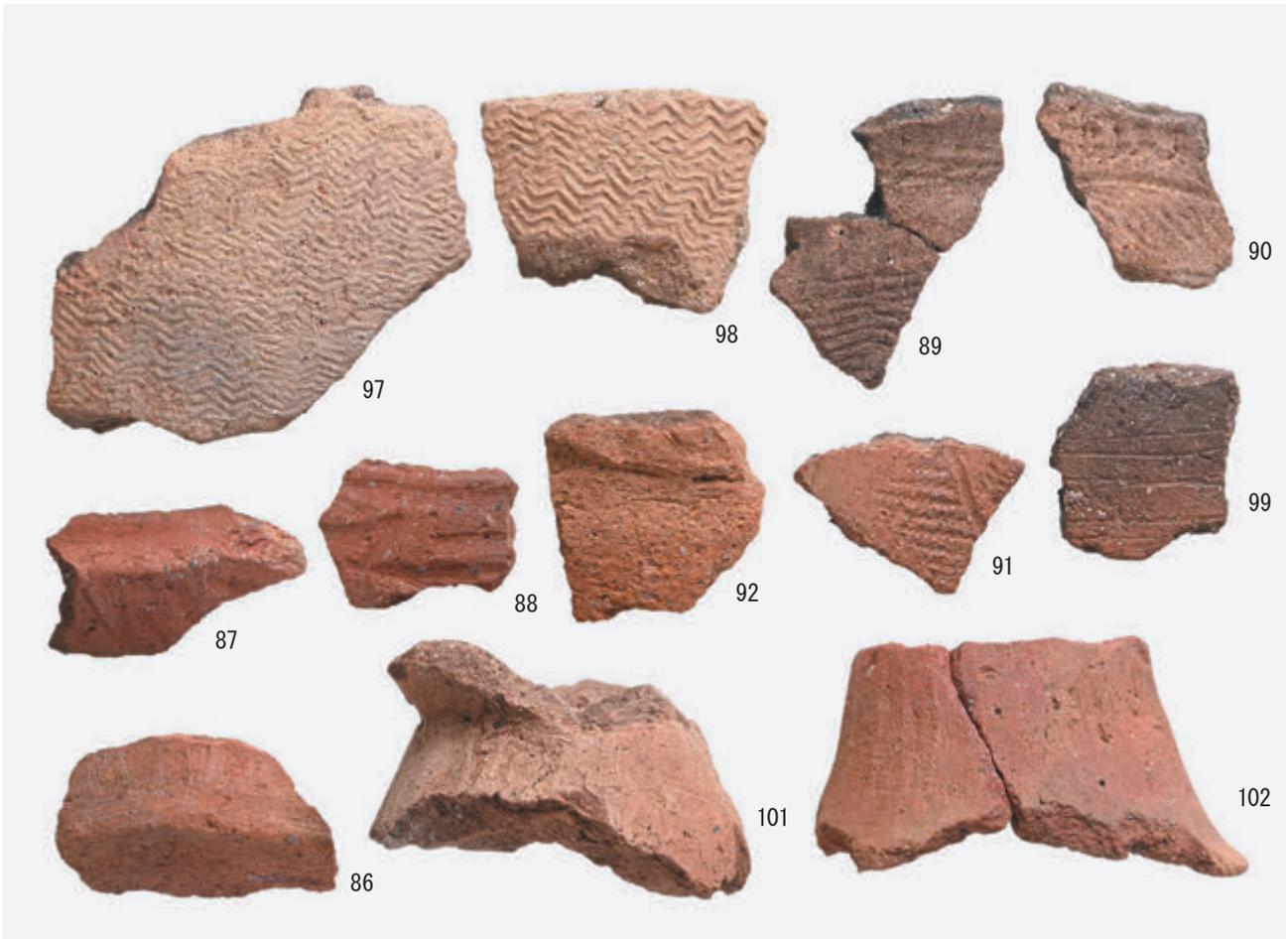












鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（225）

「廃寺は語る！よみがえる鹿児島の仏教文化」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

光台寺跡・照信院跡・大願寺跡

発行年月日 2024年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821

印刷 株式会社あすなろ印刷
〒890-0041 鹿児島県鹿児島市城西2-2-36
TEL 099-214-3757 FAX 099-214-3758



鹿児島県